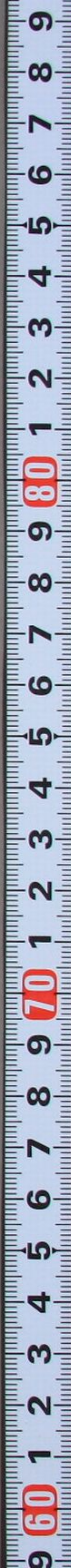




尾張名所圖會 前編



尾張多所
圖會前編

帝知村陽
秋永興七

尾張名所圖會序

尾張會序

藏書

尾張之為邦也北極出地三

十者六度則得緯度之中

者也勾芒之送柔風而滋芳草

織臙脂錦綉而呈富貴繁

華之態南陸之日耀矣揆而

清淨衆庶、殿富闡閱之文
易爾乃山々奇則、實翅一四
一凶哉、矐日乎此、以愛其舉
黛畫屏、採觚於彼、而寫其
錦綉、心腸者、昉于古人、而全
乎今人、鳥水、美、六、豈、意、因、折

方流而已、詩歌、其風景、以、研
名區、畫、番、其、勝、染、追、舊、蹤、去
自古、不、絕、其、人、而、在、之、觀、其、畫、矣
或人曰、如子之、所謂、天、之、駘、与
地、之、應、則、必、邪、亦、是、之、謂、也、其
比、焉、曰、然、而、我、舉、一、以、證、之、古

今之人物守陣壘而德閑謝
紛華而鎮定之後恭儉推讓安
節死義之士及其婆之鸞鳳
其守之文章一也姑舍而不編焉
若夫掌握兵權威武以一變
天下辟易萬人於頃刻以晚

殲殪勅敵乎一戰之下董之奇
而神速瞬息而成大勳者
六百有餘年之際而生其云曰
源中幕曰存右府曰警右衛也
是豈非天之中與也乎
產而其人亦傑乎哉或人唯之而

退錄之以為序

天保十二年歲次辛丑長至

尾張世臣六十九翁香齋深田正韶識



七十有二柳澤維賢書



引

諸君莫作龜善奉行各業唯在
此八字耳而翁自得以樂處諸
霞載中之一閑人也閑人而與
間事不亦因緣乎此書也余得四
癖以成焉文園性耽讀國書

以有涯眼窮無涯書而藏書積
有一萬卷專精誦讀年若不
倦或至持竿漂棗人目為蠹魚
後身是一癖也梅居稽查

皇和古今人物自播紳武林至僧
儒隱畸之生卒出處無一不

明了又視想宗祧法師為人常
注素于雲霞泉石風流為衣
好事為裳余曩以地仙與焉是
二癖也貯書亦與文園等故世
稱兩家二萬卷兵春江自幼著
摹寫縮圖而目所覩之萬物足

所到之百景無收不蓄焉然未嘗
有師天資至妙寫其微則足以
代衛人而悅燕王可謂刻彫衆
形者又頗錢物我屋山水名靈
神初佛刹縱橫幾將無不容躡
之地是三癡也瑞齋特名臨池

取工于細字筆鋒邁勁寸錢打
人其抽毫之際不知酸寒苛熱
膏嗜八雲之道是四癡也余有
此四癡猶醫者有玉丹赤青且春
江瑞齋之為人也雲退溫雅實
蓋無玷之雙璧而時照耀

者暗室也曩四癘來謀法余
固不立文字之儒也何以當之
輒然不應四癘頊然於是乃
曰卿等而為之易於以齋五今
鑑基与時相待而未吾將乘
勢歟四癘欣余遂為之鼓

吹以舞四癘歲去歲未爰後前
編苟完之功此編雖固屬稗史
此舉也不出三歲而其撰之精
詳綿密殊覺有力果知玉丹
赤青能奏引年之效矣嗚呼
夫太平之人而寫太平之象

以觀太平之人豈不右乎一
樂事哉抑四游舞蹈之力
耶將余故吹之功耶觀者俟他
日後編之苟羨辛丑冬十一月

精一居士深田精一併書



尾張名所圖云序

いふ一國に風土記云書ありて子孫の
を礼にそのを治るにといふ其國に
ありしや阿波に法あることと海山小
かありは家金根色乃ありは法色乃
和物とす此を法はるの法やのよる
本草多む一に法を法りてありち原
川を流るに志家されるを徳仁法

志るよ孝に似たうちのきたる都の宮に
皆う勢はそゝか雲一國乃外とほしく
孫まゐる事なくも尾張風女記に中略
那の獲尔のころそ其條乃歟失たはら
あり次口をききよさなる成まじとい
精一姫乃四人の癡人なれをせをとる
あにめてえをれする此書と子早振
神代出あつはこもあは海のうりに使

手ああはてなとろはくこり意
おちあ奇つれ社のねもころくに書しは
はまぬれか乃風女記にうたあくれ家
世はたこるあ無あつていおらからかきおろ
ゆるいお母乃世世もに朽を及かもに
た家ころ又たき切かも夕花さるかも
君れあこもりお路るお津津城に和由
海乃宮よりたえんくには井来ていろう

ははまははちそふあて天の下に
かやらるるまはは縁にまをほくおと
しへはま書まらうま清まの光
なるぬく入るるまははくたふ
てかむかへら上田仲敏

ちまこらうら名不圖會しふまの
まよおふまはて五畿内まはらる
ほらのまこのもまはくまはま
まらまはまはまはまのまはま
まのまはまはまはまはまはま
まのまはまはまはまはまはま

のいしきとまきとまきとすなまきとまきと
 おほくまきとまきとまきとまきとまきと
 くくくくくくくくくくくくくくくくくく

天保十二年丑上月

及村子春書

尾張名所圖會卷之一

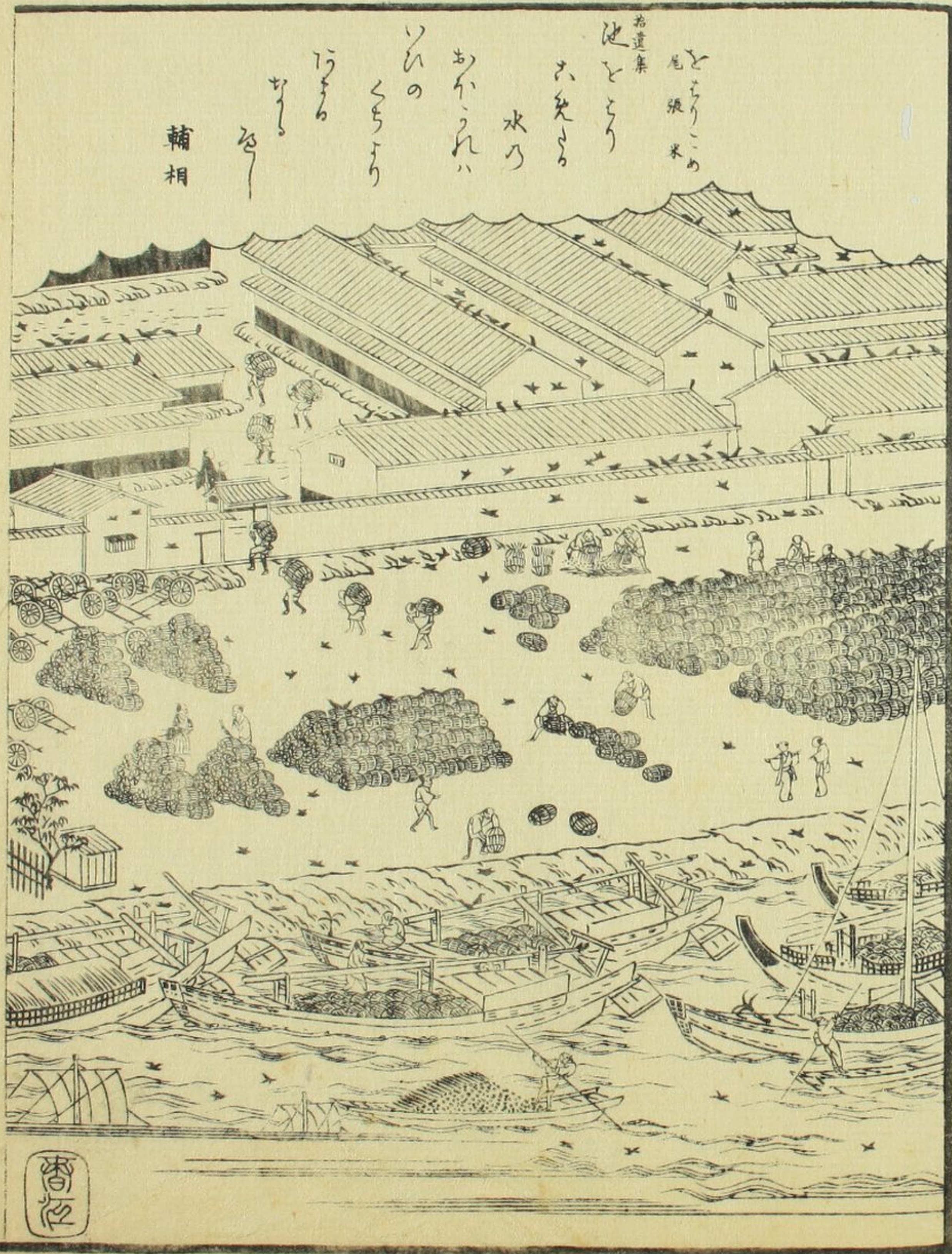
目錄 愛智郡

- 廣井の官倉くわんくらに貢米と納子圖のうこずず
- 國號濫觴こくごうらんさう 神武天皇東征圖かむすけてんかうとうせいず
- 赤染衛門馬津驛あせぞゑもんばつりやく合あひに宿圖しゆくず 名古屋府なごやしほ
- 那古野古城なごのやふるじ 信秀城中のぶひで之の矢狭間やせまと切開圖きりひら
- 御官舞樂圖ごくわんぶがくず 魚棚賑合いしほのねりあひ 御祭禮全圖ごまつれぜんず
- 龜尾天王社かめおのてんわう別當りつどう安養寺あんやうじ 天王祭片端試樂てんわうまつれかたはたしがく 名古屋山三宅址なごやしんさんぢやくぢ
- 芭蕉翁の古事ばしやうおきな 花井白古事はないしらく 櫻天満官おうてんまん道磨碑みちまろひし
- 清正普請場址せいせいふしんばぢ 驛馬會所りやくばあひ土屋店つちや 福生院ふくせい
- 烏犀圓店うしげん 廣小路ひろこうぢ 柳藥師やなぎのり
- 紫川むらさき 御旅所ごりよ 若宮八幡宮わかしほ
- 阿弥陀寺あまた 木佛涅槃會もくぶつねはんの圖ず 性高院しやうかう
- 府城ふぢやう 愛智郡解あいぢくげ
- 地理疆界ちりきやうがい
- 御宮ごみや別當りつどう尊壽院そんじゆいん神主かみ吉見氏よしかみ
- 將軍家御靈屋しやうぐんけごりやう
- 伊藤吳服店いとうごふく
- 植木市うゑき三藏圓店さんざう大丸屋店おほまるや
- 覺正寺かくしやう
- 朝日神明宮あさひ
- 若宮祭の圖わかしほまつれ
- 朝鮮人應答の圖しやうせんじんおうたふ

極樂寺	大光院	烏瑟沙摩明王緣日泰の圖
總見寺	閩山和尚の古事	清壽院
大須真福寺	馬の塔の圖	七ツ寺
善篤寺	浄久寺	光真寺
二子山の古跡	妙善寺	日置八幡宮
延廣寺	東輪寺	犬御堂
稻荷社	大泉寺	洞仙寺
閩森八幡宮	古渡橋	川口屋館店
元興寺	道場法師の傳	為朝塚
		千本松
		古渡
		南方鐻
		神森
		同境内茶屋の圖
		西本願寺掛所
		那古野山

有圖無解似圖無此
 解詳而有此圖展玩
 初知一帙裡宛然八
 郡舊名區

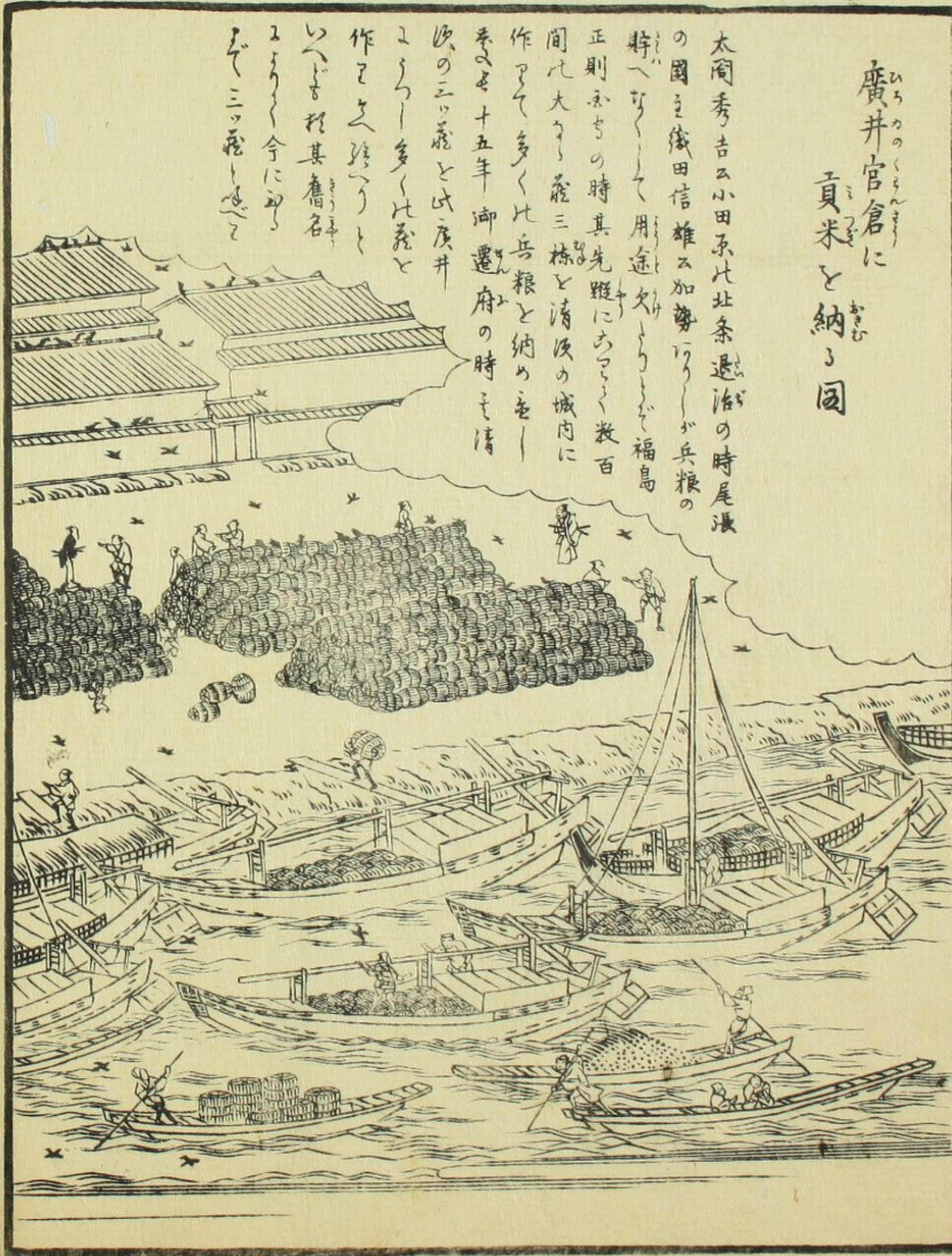
魯菴石川嘉貞題
 迂菴丹羽輔之書



輔相

とらりこめ
尾張米
池とらり
水乃
あかこれハ
ソいの
くまより
らまら
やまら

香夜



廣井官倉に
貢米と納る圖

大岡秀吉公小田原北条退治の時尾張の國之儀田信雄公加勢より兵糧の時へりて用途欠りしを福島正則公の時其先蹤にあつて救百間此大岡三條と清波の城内に作りて多く此兵糧と納りてを奉りて十五年御遷府の時清波の三の條と比度井より多く此兵糧と作りて多し其舊名より今に御りて三の條と比度井

香夜

抑當國ハ東海道小屬して南海に依りて大日本のうち東西の

半東ハ松前蝦夷に至りて三百余里
西ハ大隅薩戸に至りて三百余里より和名類聚抄に尾張國國府
在中

島郡行程上田六千八百二十町七段三百十步正公各二十
萬東本箱四十七萬七千東雜箱七萬二千東海部阿
中島

七日下四日奈加
之萬葉粟波久
利丹羽波
速春部加須
我倍山田夜萬
太愛智阿伊
知知多阿伊
知

延喜主稅式に尾張國正稅公廨各廿萬東國分寺料二萬

東支珠會料二千東に記せり又丹峯和尚が類聚往來

慶長二年の板本易林が節用集日本國正統圖記等

に尾張國云云地厚土肥種生千倍里多勝日本國大

上國也後々此書も日本第一上國也と記せり

類聚三代格の仁壽三年六月八日の格に尾張居上國といひ官職秘抄藤原
抄拾芥抄等の古書にも尾張と上國なりと記せり職負令に法水の度
契とけりて大國上國中國下國と四等に
分る尾張ハ其上國に居るがなりかく日本國の内より縁を

とる上國也なり褒賞せりるハ此國地肥て五穀菜蔬と

りもさし禽獸魚鼈材木器皿錦繡絹布其餘の萬物

小至るまで民用一も缺くものなく豊饒他國に勝る殊に四方
八達中央の地うらやまなり

國號の起るハ尾張風土記の残缺に尾張國者經世穗曾績

古之所領行也神日本磐余彦天皇
神武天皇東征之時討

伏湯貴首人歸化之場海部佩室臣奉射天皇天種子

命以三角石弓及玉太羽矢射殺佩室臣討終於海部氏

姓因此號其國謂於波里乃國謂尾張者音之訛也と云

と尾張國號の濫觴之又惺窩先生のかけり職原抄に頭書

小日本武征東夷而還於尾張所帶之劍在熱田熱

田明神是此劍本自大蛇之尾張出劍也此劍留此國

故曰尾張國と云々又凡そ新治今治小治字書に壘治
也と云り

なごとの田畑と壘開きより起る地名とて今の春
日井郡小針村ハ國の中央小なりて延喜式に載り山田

尾張國號の濫觴神武天皇東征



治服梅山筆

ちつとに未と
 所小下をを
 のけんと思いな
 いさふさるる
 てえのけんぬ
 二つあつる
 いし春びき
 かくさあそ
 へんあふくれ
 よみり
 ところ
 柿本人麿

宋集
 春してハ
 りめれふか
 ち
 おもと
 めい
 三上





了雅
印



赤津衛門馬津の
驛舎に宿る図

何れ又同集に系いで九日に... 尾張守 大江匡

... 臣 衛朝

... 又現存和歌六帖の...

攝政太政大臣の... 治田の...

... の古ければは...

名古屋府 名古屋真福寺 大須觀音

定勘決記の奥書に于時貞治第三曆黄鐘中九日於尾

張國那古野庄安養寺壇所忍寒氣書寫了と云

昔ハ那古野ト云ク...

國君御居城の後ハ名古屋ト書テ廣大繁華の一都會

ト云リ東海道より美濃路へ通る本道其うちを...

熱田の突出町より下小田井の松原町まで三里が程街衢立

往還ゆゑ京江戸上下の旅客常に...

三都も劣らぬ名府なり 府内の街衢多く...

府城 足利家の連枝尾張守高経の子孫斯波氏當國の守

護たつる... 春日井郡...

長十五年清湏の舊城と廢して此名古屋ニ新城と御營

築有る... 東照宮...

侯二十人加賀侯 松平筑前

筑後侯 田中筑後

肥前侯 鍋嶋信濃

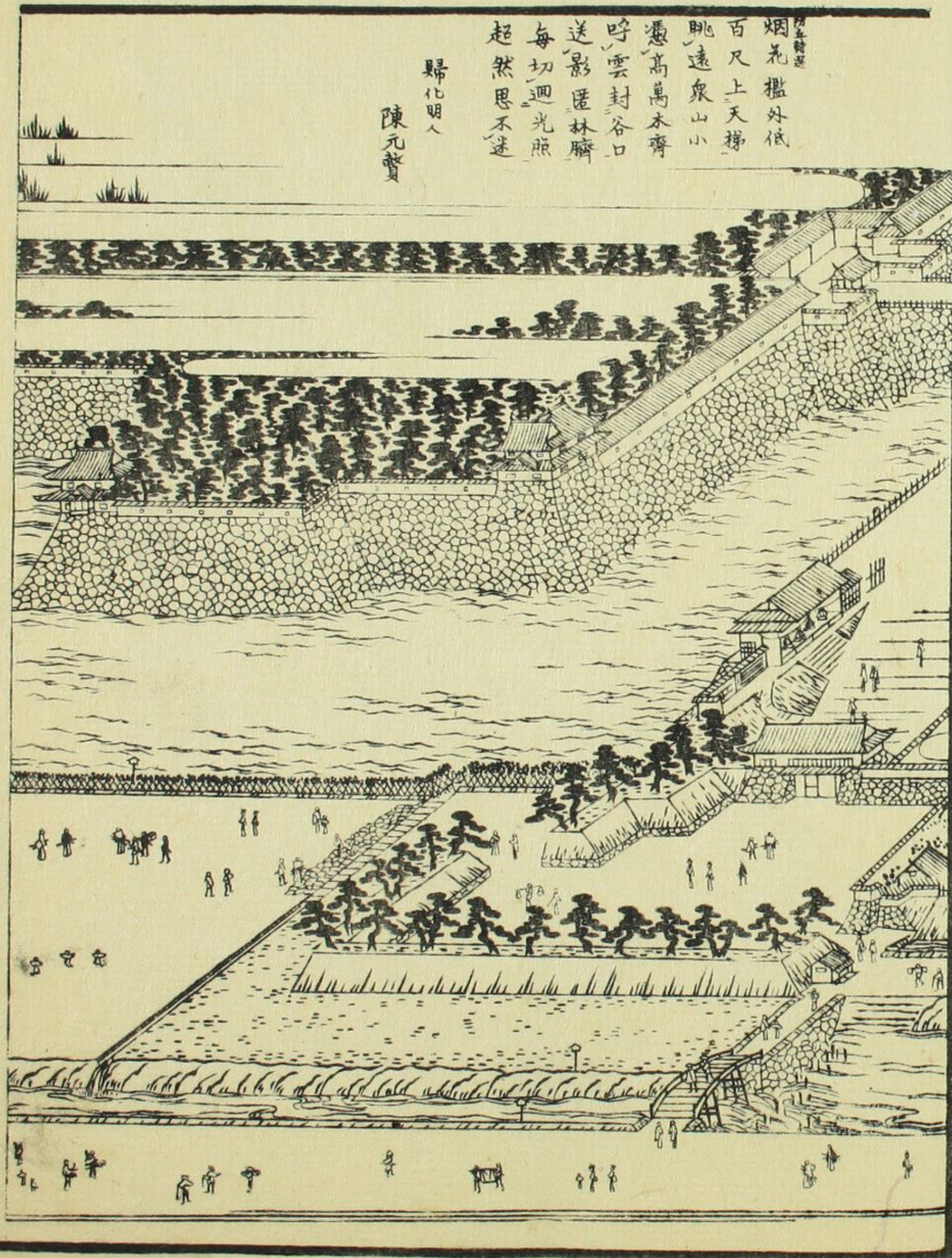
豊後高田侯 竹中伊豆

豊後佐伯侯 毛利伊勢

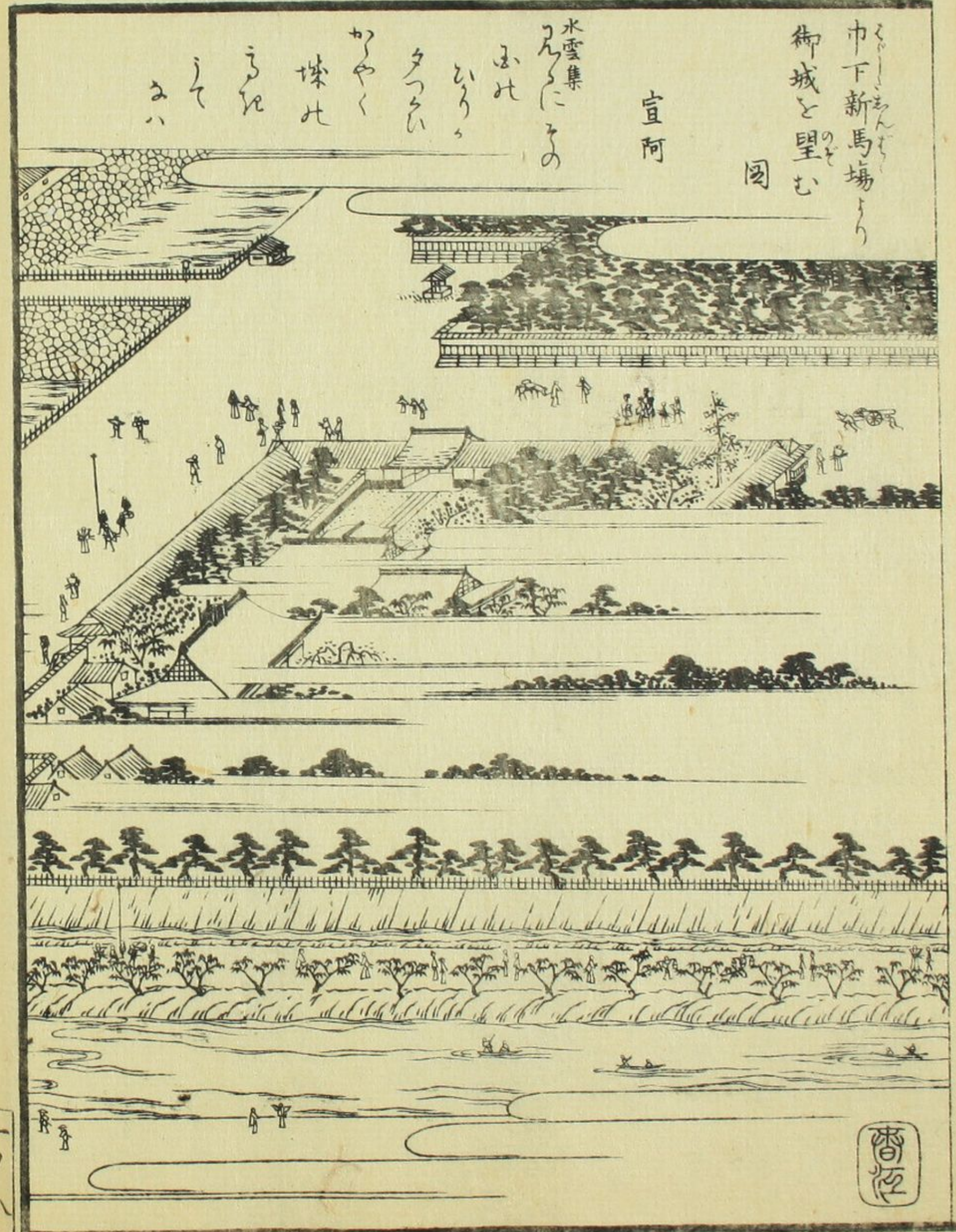
飛驒高山侯 金森出雲

豊後日出侯 木下右衛門大夫

...



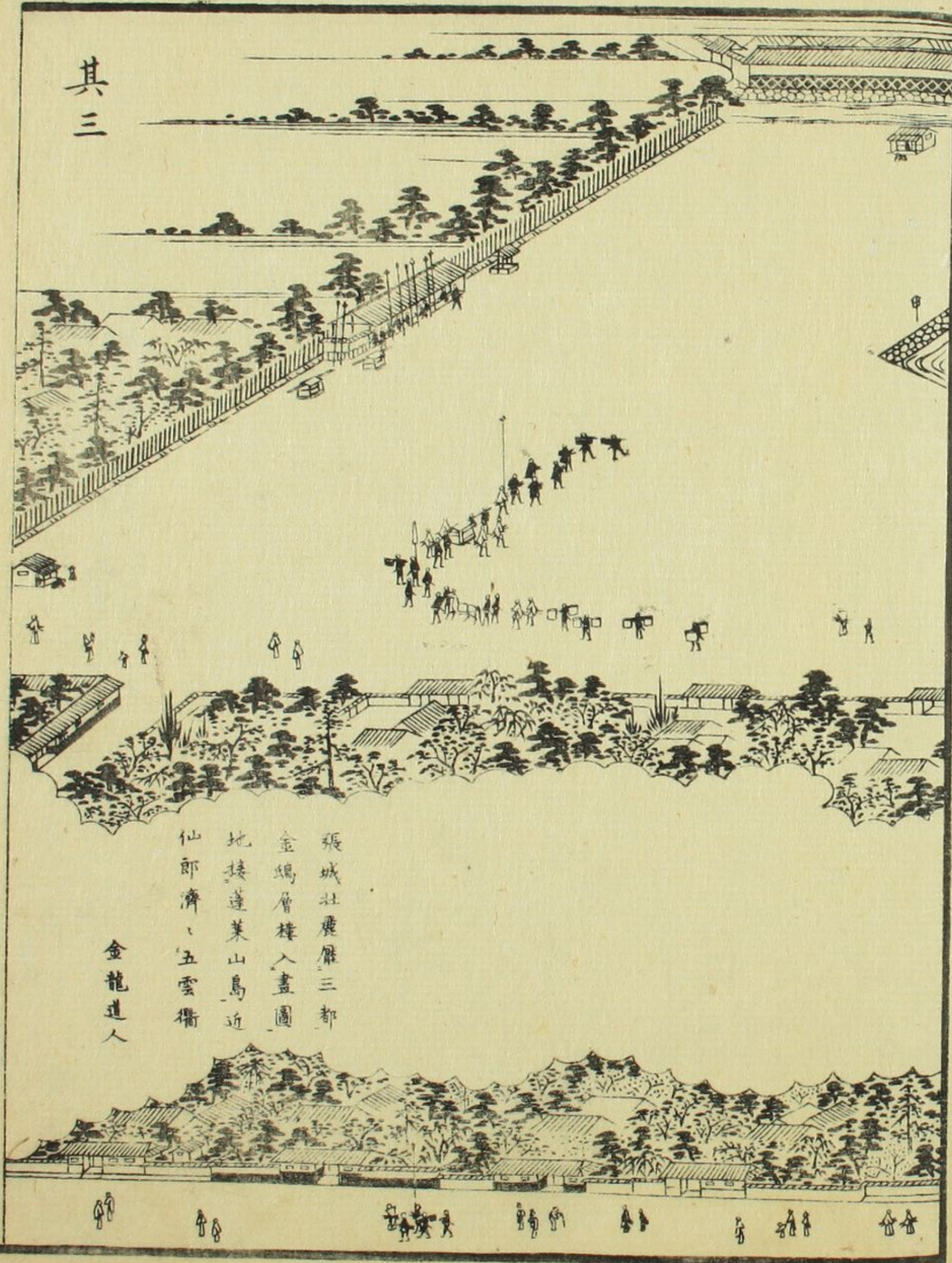
烟花檻外低
 百尺上天梯
 眺遠衆山小
 憑高萬木齊
 呼雲封谷口
 送影匿林臍
 每切迴光照
 超然思不迷
 歸化明人
 陳元覽



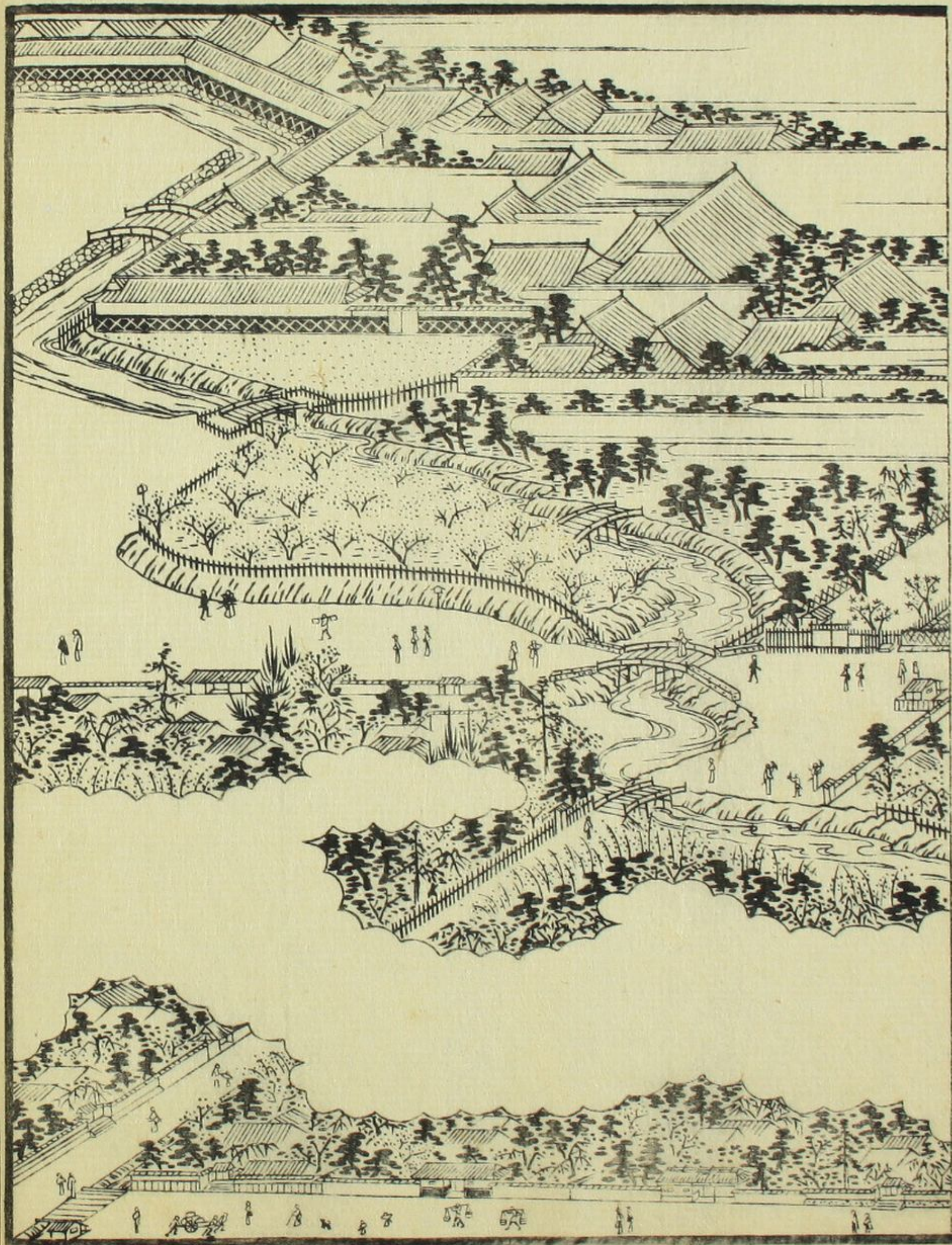
水雲集
 宣阿
 巾下新馬場より
 御城と望む
 図
 ふれ
 いろ
 夕つゑ
 かく
 城此
 うて
 二ハ

香

其三



張城壯麗三都
 金嶋層樓入畫圖
 地接蓬萊山島近
 仙郎濟、五雲衛
 金龍道人



俊讚岐侯 生駒左近 土佐侯 山内五佐 長門侯 松平長門 阿波

侯 蜂須賀阿 伊豫侯 加藤左馬 肥後侯 加藤肥後 播磨侯 池田

衛門 安藝侯 福嶋左衛門 紀伊侯 淺野紀伊 知行高總計六

百三十八萬七千四百五十八石三斗の衆大力と以て普

請せし五重の天守閣ハ肥後侯正所望し一手と造

營つりし高數十丈碧銅の瓦とみく葺きかきぬ黄金

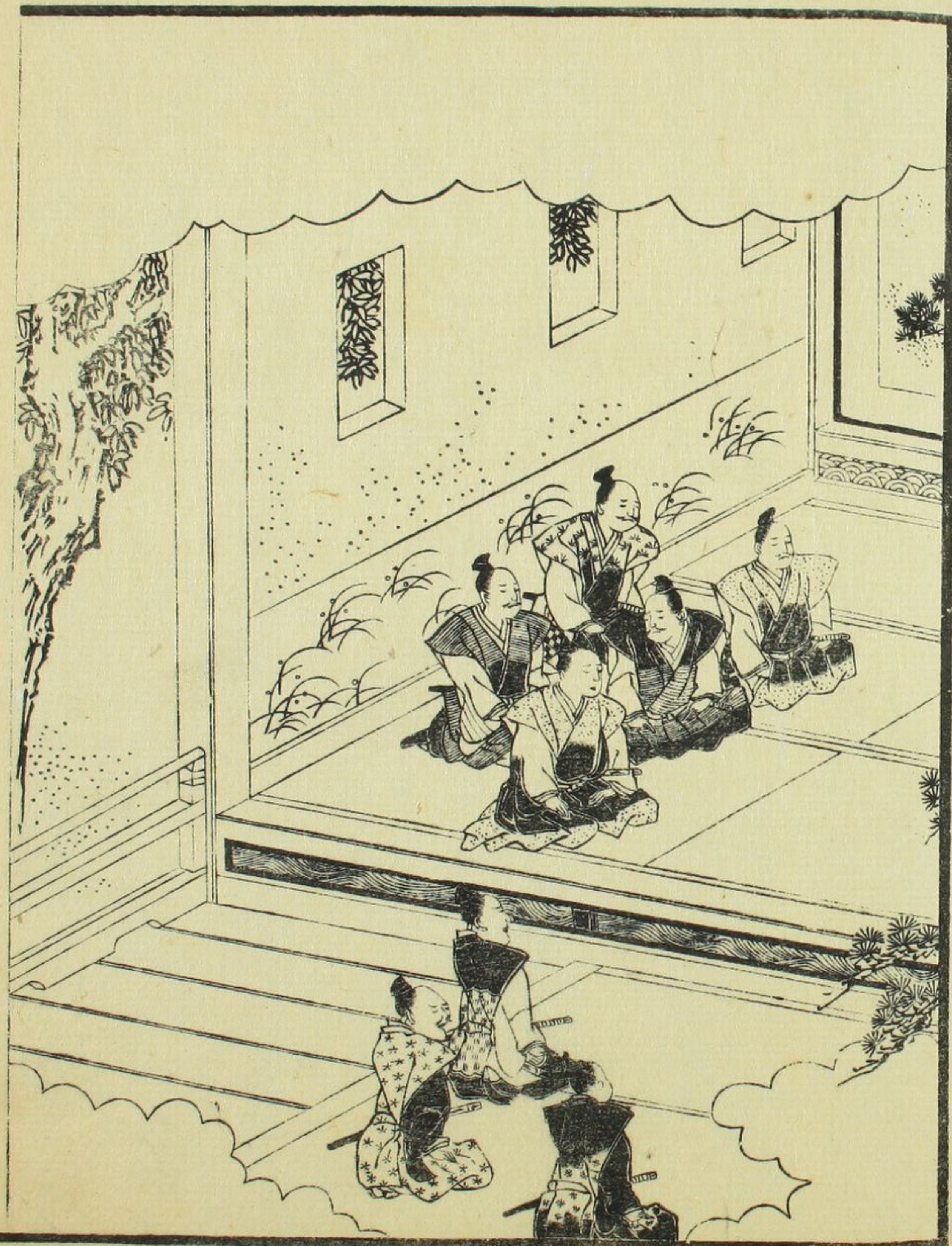
とて造まは文餘れ競と上層のあはれ置きけり今に至

るまで空に聳え日と映して衆人の目と駭くは實に無

那古野古城

今此御築城以前にありて弘治の頃を城ともなく
なりしその古城の始末 後相原天皇の御宇に参河國那古野の
地頭大河内備中守貞綱とて一人ありて吉良家被官たりしが
近年自立して威を振ひ駿河の今川修理大夫氏親と合戦す大
河内ハ尾張の斯波治部太輔義達と援いとをひく遠江の引馬
今川の城は楯籠り氏親一萬餘の軍兵と率ひ永正十年三月速
江へ渡向あり又義達大河内と援けて深嶽に出張ありしが今川の家

臣朝比奈十郎恭以爲に敗軍す同十一年三月大河内重ねり引馬と取
かゝり又尾張へ出馬と清いば義達進發して大河内共と
引馬に籠城より氏親又三万兵とて同年六月城を石まき攻撃しけ
まば八月十九日終に落城して大河内貞綱其弟巨海新左衛門尉道
綱以下千餘人討死し義達ハ降人となり普濟寺に入り剃髪し
向後駿河と對して引馬とむひ起清文と雷めり尾張一掃國
まけるかくて義達ハ隱居し子治部太輔義統家督たりしが大永の
けり氏親尾張の那古野に城を築きて末子左馬助氏豊の義元と入
まき清須の斯波義統の押へて義統の妹氏豊に嫁して東西隔り
つまりぬとて海東郡勝幡の城主織田彈正忠信秀の清須三奉行今川
氏豊と共に連歌と好み互に贈答せり或時小田井川の洪水は使者過
ちて連歌の懐紙と入まじり文箱と流失せりあ家本意うり事に
おどい其後ハ互に會合し信秀那古野の城中に至り一間の居所を乞
得て五三日或ハ十日程で逗留し連歌茶湯を以て遊ばしり享祿五
年の春例の如く信秀滞留ありし本丸に向いて窓と切開きしり
今川の家臣是と怪しみ客人として有るが御館は矢狭間と切
ころ心を得ねとせしり氏豊聞入まはは人限りて別心ハあはれ
大樹覆いし柳の丸のくけは風流の窓もそりめりて更に
りけるは三月十日信秀俄ハ大病と傳り清須勝幡の家人と呼ば集
りてひりめりるを夜に入りて今市場の方より火事ありて城中
立祀は若官社天王天永寺安養寺に火がかりて火の子と城へ吹つきり
城の東南の方より勝幡の兵士即置の城主織田丹波守と調合せ鯨波
と造りて攻寄せりし柳の丸も開の夢と合せて火と放ち内外より
めけり今川の家士不意の夜討に殺し討死す氏豊ハ藥師寺刑
部丞と以て助命とをい母方の縁と便りて上京し信秀ハ計畧と以
てまやすくのりてやぐりて城に移るが天文三年吉法師九如長
の誕生



の翌年南の方古渡に新城を築きて信秀引移り那古野に信長の居城
なり同廿三年七月十二日清須の家臣織田彦五郎信友斯波義統と
弑して猶清須よりあつと翌弘治元年四月廿日信長兵と率て彦五
郎と討ちて其城よりを那古野に信長の叔父孫三郎信光の居城と
なり其年十一月廿六日信光もまた其家臣坂井孫八郎を弑して
弑心りて信長は追つて後終つて廢城なり同三年正月信勝もまた
長手記同宇津山記遠山信春が惣見記木村高毅が續武家聞談尾陽雜
記鹽尻のよるえとを考
考畧抄してとあり

東照宮御宮

御郭内の三の
丸に御鏡座

國祖源敬公大僧正天海

跡南
光坊を請

待しとい元和五年己未九月十七日此御宮と創建しといて
中央に贈太政大臣正一位源朝臣家康公の御神像と
安置し奉り左に山王權現右に日光權現と配享し治
へり○御本社南向祭文殿渡殿中門瑞籬御供所鐘樓神輿
殿御寶藏御井鳥居樓門何れも善美とせり或は朱栴
丹青と施し又ハ金銀銅錢と鏤め莊嚴の美麗りといひ
○御本地堂 茶所及び殿士三菩薩十二
神將四天王の像と安んじ護摩堂 不動及び四天
の画像と

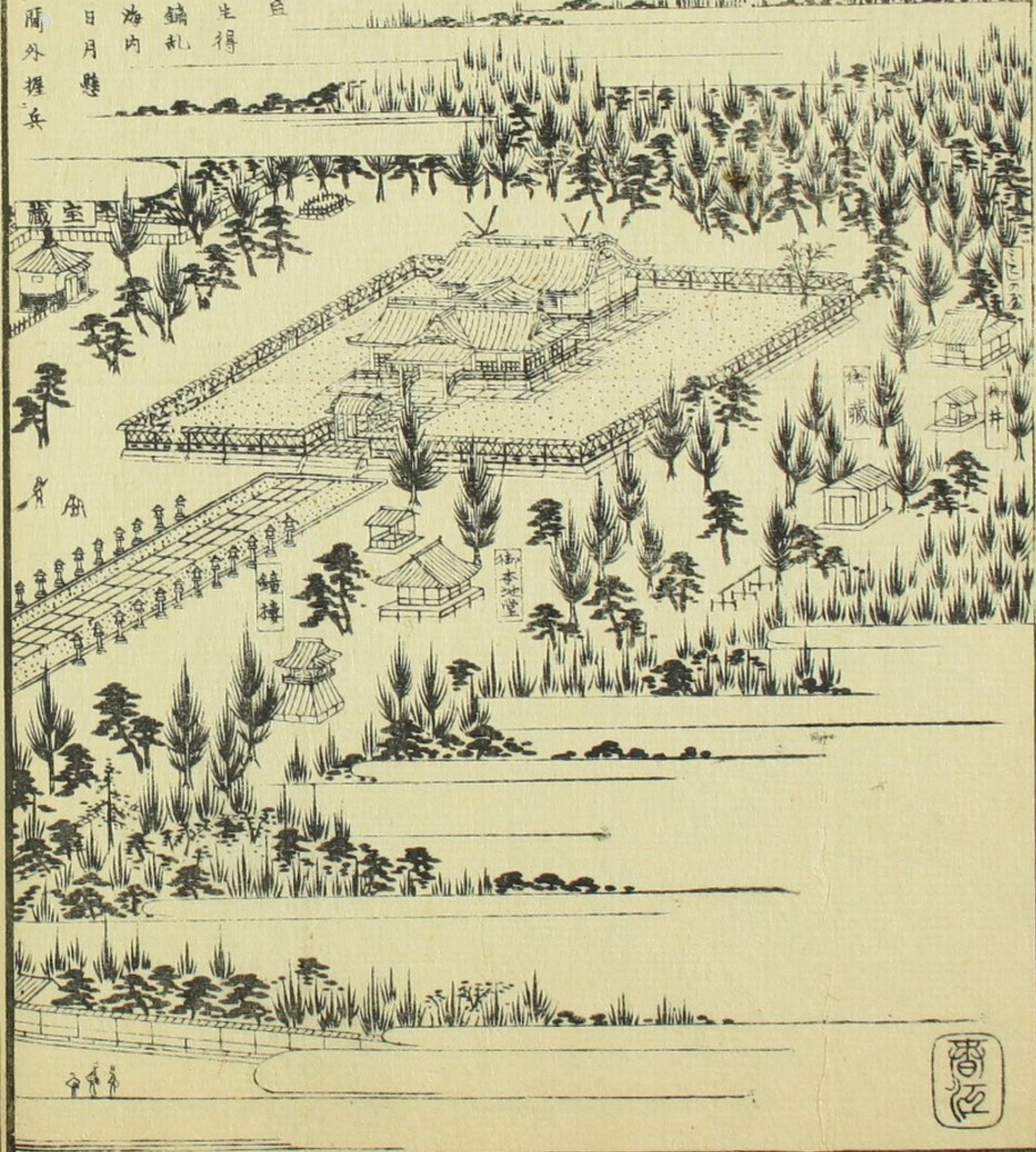
御神寶

御太刀三口圓行正恒宗近又歌仙の色紙三十六枚ハ青蓮
院法親王の御筆なり又牛玉一顆り其外數多り

御祭禮ハ毎年四月十五日三基此神輿と祭
文殿へ渡り神供と奉り十六日神饌と調進し早朝に舞
樂と奏し同夜御神前より社僧論議し十七日曉に御
供と奉り罪人行赦の義ありて後車樂及ハ町の警固
と引渡りかゝりて神輿三基末廣町此頓宮 御旅所
御城下十
神幸き 御馬 社僧 御馬 末寺の僧十人 御馬 御城下十
社の神主より供奉し警蹕の官士前より二騎後に二騎其
餘徒行の諸官人も多くてあつて四千余人りて善美華
麗とせりそのりて嚴重端正かのびたハ又化は比類稀
る行粧なり神輿の前より樂人歩行りて音樂と合奏
し神輿通御の御道よりハ兩側より竹矢来と結いて往
來と禁り家よりハ濡掃してより砥のあつて矢のめり

三の丸
御宮の圖

不敷桓文業
能收種蟲質
鼓行持節哉
蠶食盡理糧
霸定尊周日
功成責楚年
宗臣陳畫策
勇士荷戈鉞
賊皆消膽蒼生得
息肩七奔鋒鏑亂
三捷捷書傳海內
風塵靜台階日月懸
帳中修典禮隔外握兵

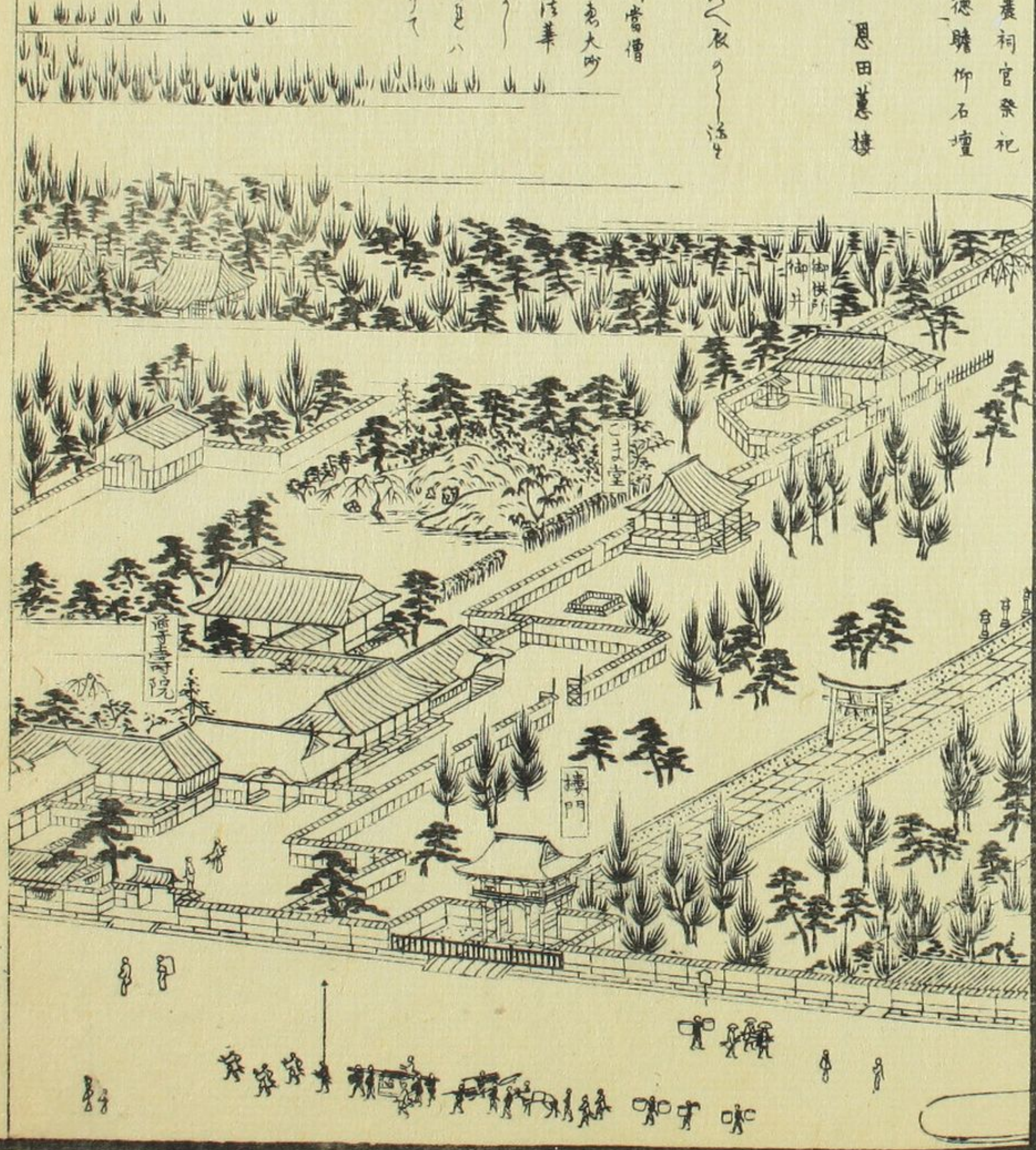


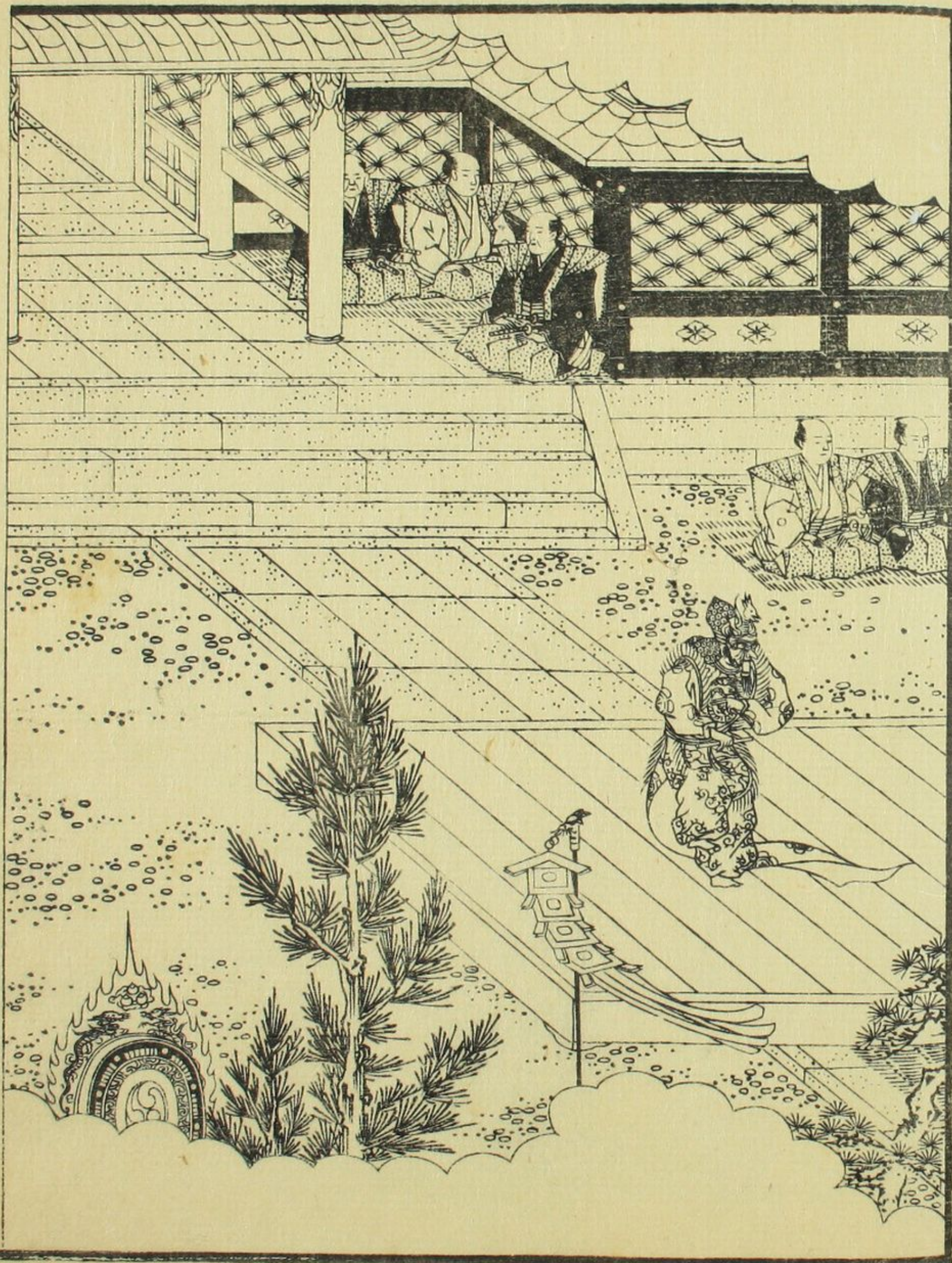
香江

前
權寮廟丹青慶祠官祭祀
度小人欽感德瞻仰石壇

恩田慈樓

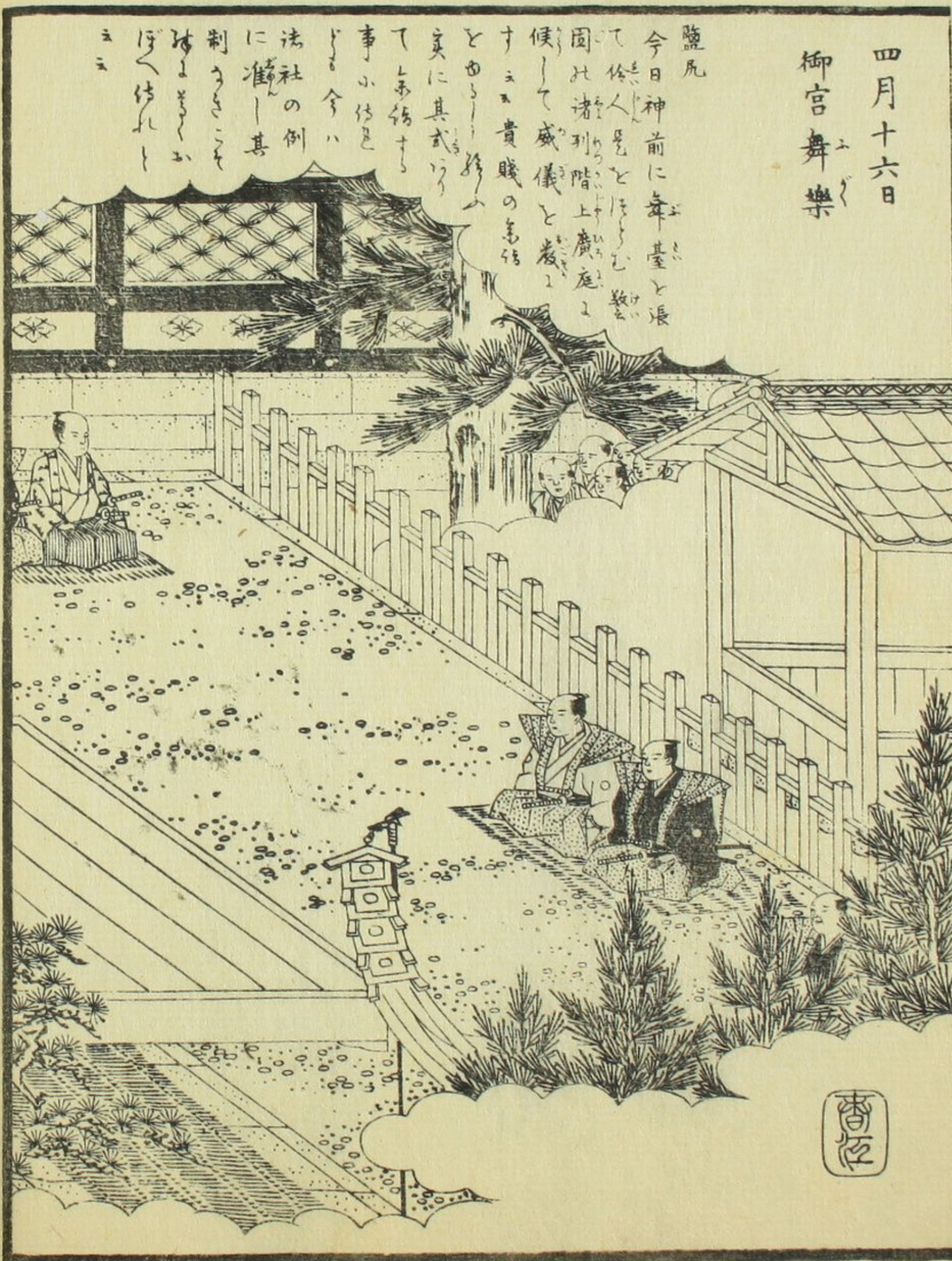
曠野真
眞享つらけ衣つらけ
東殿宮比別當僧
正のけ坊と慈老大少
遷居執事活華
八澤比けつら
まゝにやうふま
種つらけつら
序品の心と
よぬる花此
らけつら
むし
越人





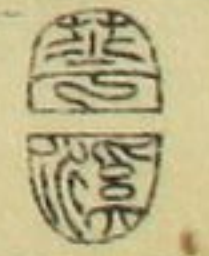
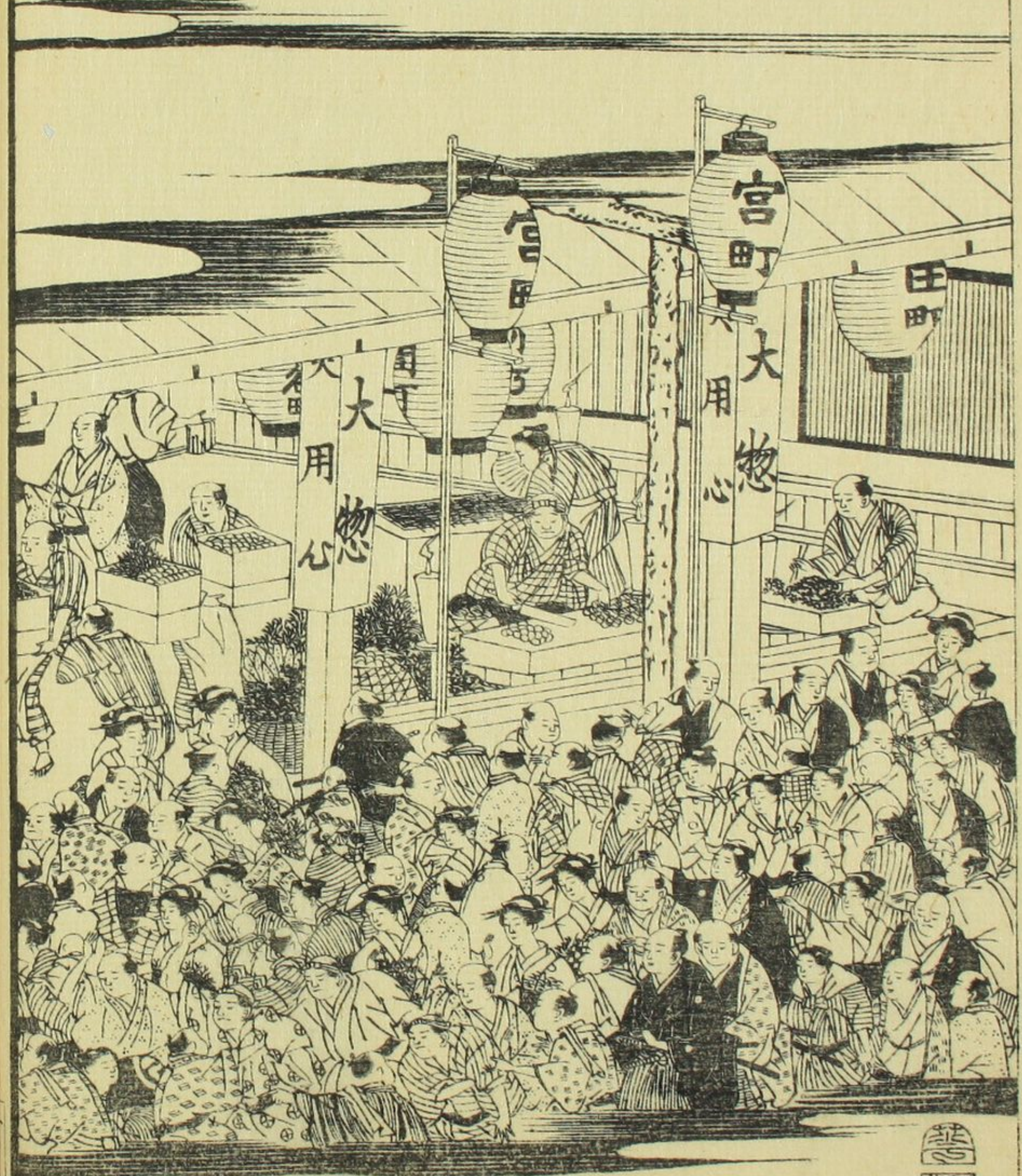
四月十六日
御宮舞樂

鹽尻
今日神前に舞臺と張
て俗人等とほしく
固此諸列階上廣庭
候して威儀と後
す云々貴賤の多
とありしは
實に其式
てしあは
事小は
ども今ハ
法社の例
に準し其
判り
けく
云々

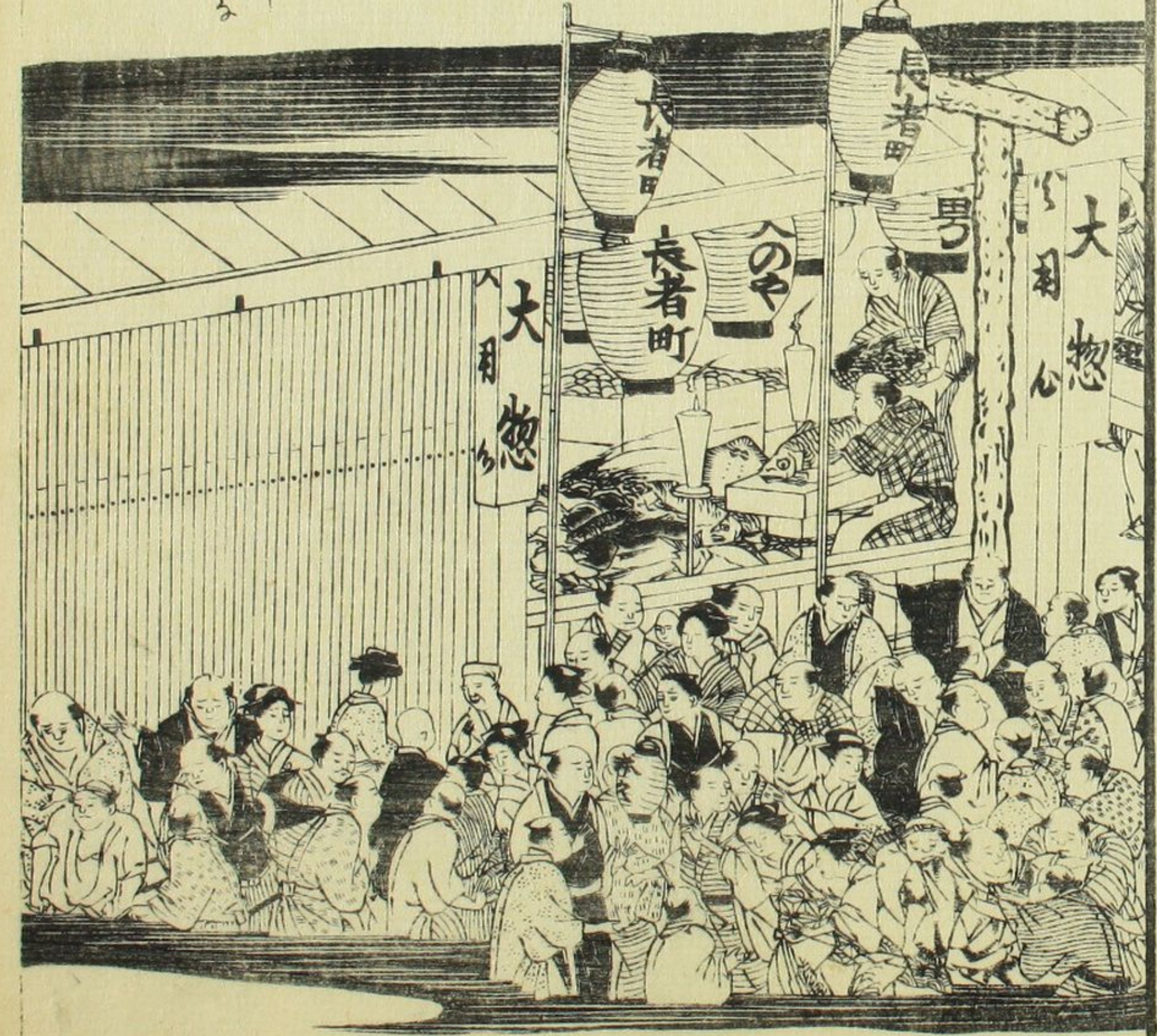


香

四月十六日 魚夜 棚の賑合



此も數町のる兩側此
 家ごに御祭禮附町
 の女當重浩と製す
 よとほひ燈と張り燭
 と耀しく見ぬ此羣
 集ハ老弱男女僧俗
 ともに到りきり徹夜
 此賑合ことと勝こと



なるくも
 多分下りて
 真のくも
 黄山

大道もさかづ磨ける鏡の面も似るてお例の棧女も八幕と
張る屏風と三毛纏もさきと拝見の男女貴賤少長
さうくおむく小華美と競へるも太平のさうて 神徳の
さうけさき弥増しぬ 神輿還幸しうて後ハ家さうて我後
さうて矢来と取拂ひ店くのかざりをかへ復らさうて又おえ
比諸人老弱男女お羣つて往來扶しと押合ハ賑合さうて
神恩の餘澤さうて昇平の瑞象上下万歳と謳ふ慶びいせ
尊くぞ免ゆる猶御祭禮の首尾次序等委しき事ハ画図
小像さうてさうて略す画者筆力比精詳細密至さうて盡せ
見る人思いと潜め心と留さうて

天長山尊壽院神宮寺

御宮の別當

天海僧正の開基しうて天

台宗さうて寛永四年神宮寺と号け叡山の玆祐權
僧正と以て別當しうて山門の日藏院及び當國春日

井郡野田村の醫王山密藏院と兼帶し上乗院と名

のさうて其後世僧正に任し尊壽院と通称しうて

神主吉見氏

さうて京都の人しうて岡崎左近菅原直勝

とさうて勅にさうて東照宮の祠官とさうて姓名を

改めしうて吉見宮内太輔幸勝と号し正五位下小叙し代

神主職とさうて

將軍家御代々御靈屋

御宮の西隣

亀尾天王社

御宮の東隣

醍醐天皇比延喜十一年三月十六日

勅さうて此地小鎮座あさしうて當社縁起さうて天

文元年三月十一日那古野合戦の兵火と焼亡しうて同八年

再び造立し慶長十五年御城御官築の時御郭内に

さうて他と遷しさうて議定しうて神慮さうて

かさうて神君比思召しうて神前さうて御闌とさうて

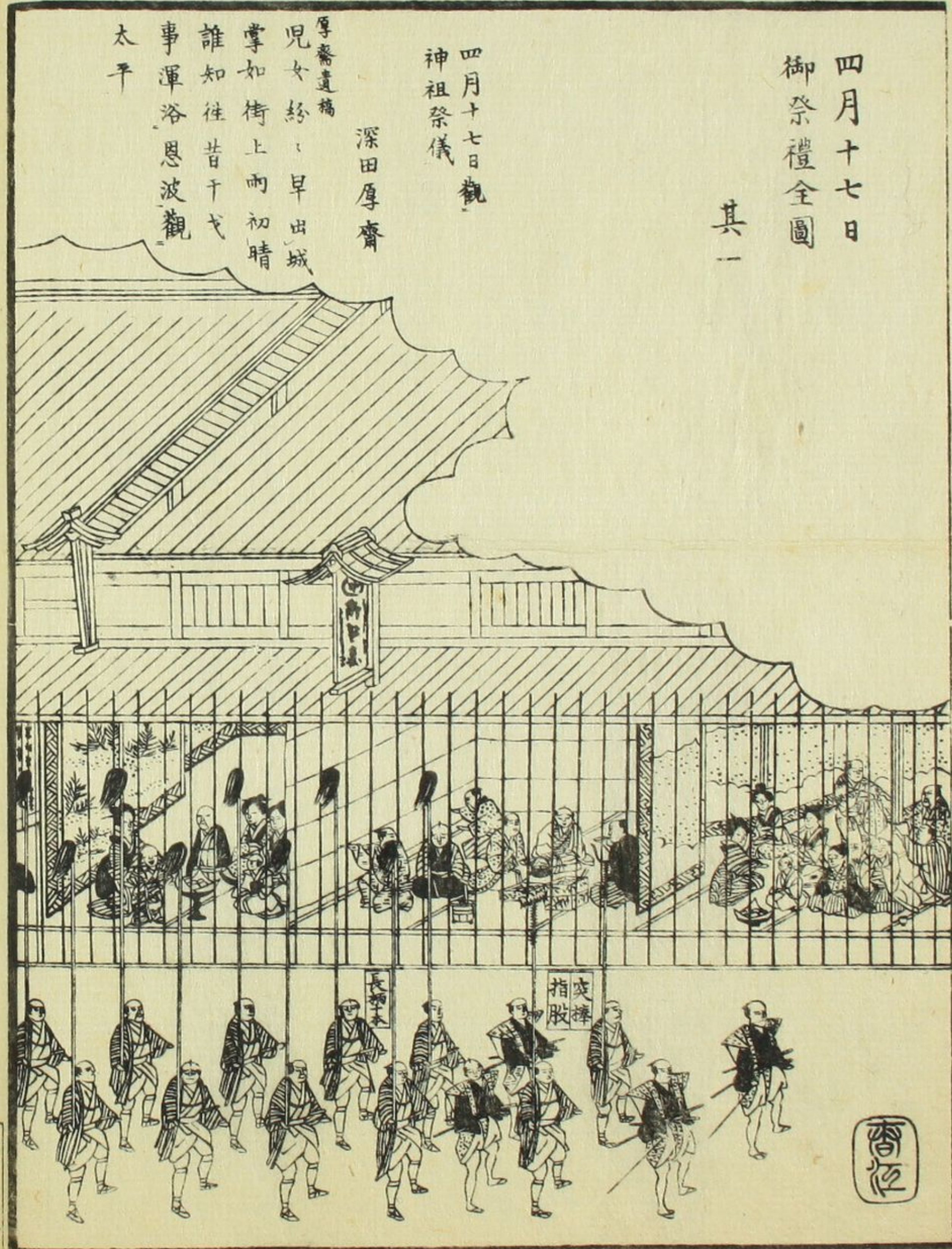
四月十七日
御祭禮全圖

其一

四月十七日觀
神祖祭儀

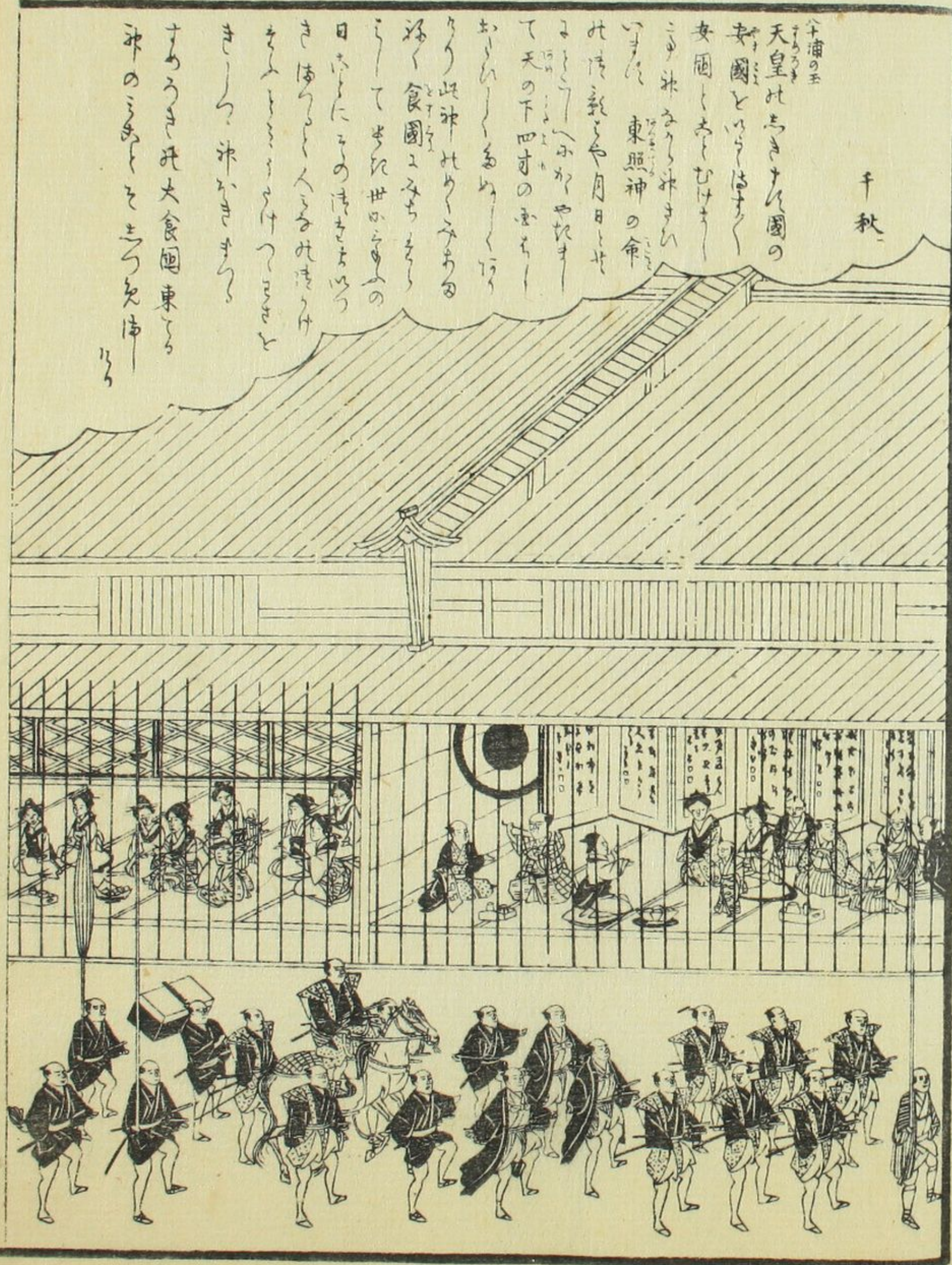
深田厚齋

厚齋遺稿
兒女終々早出城
掌如街上雨初晴
誰知往昔千戈
事渾浴恩波觀
太平



千秋

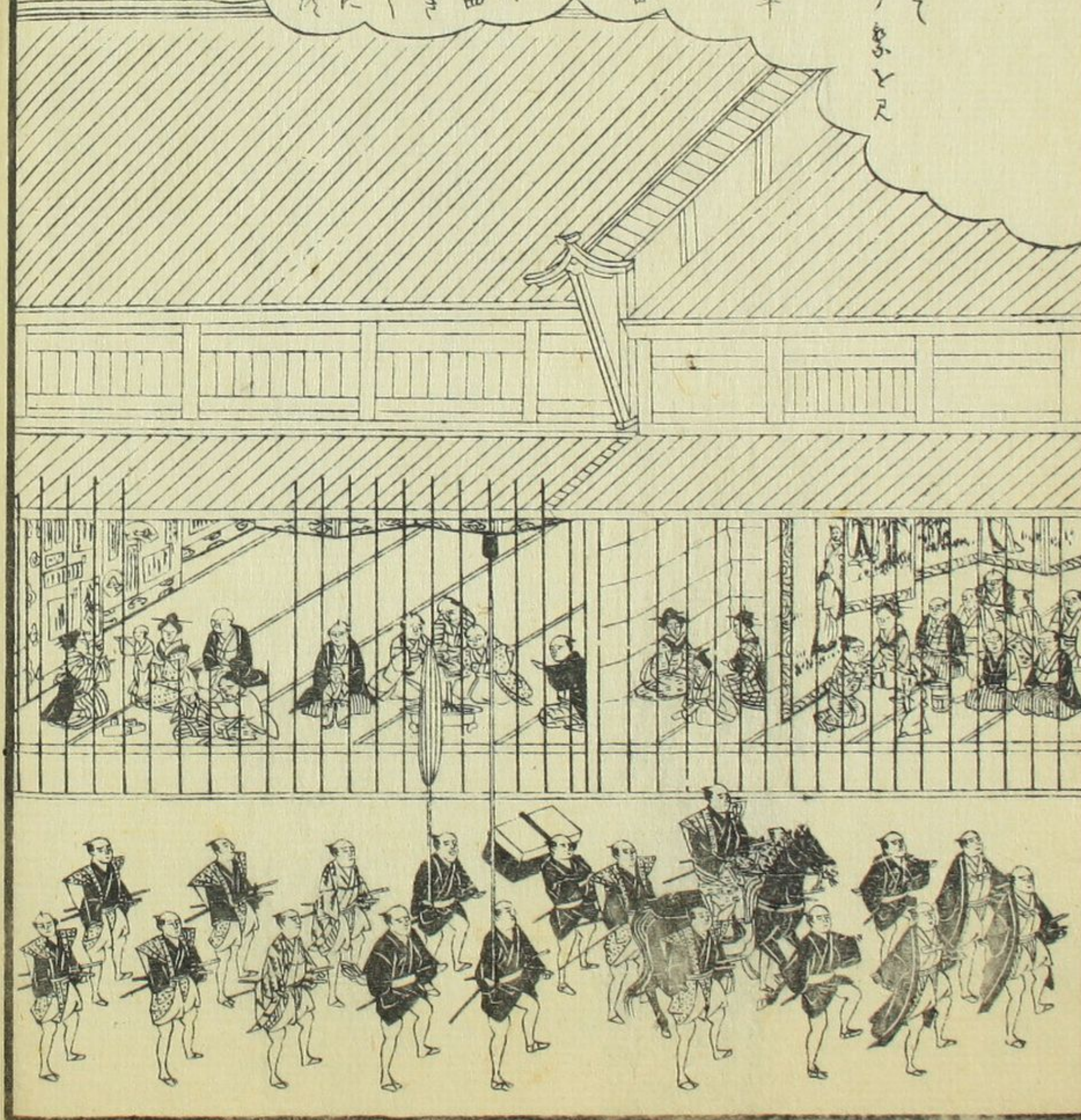
千浦の玉
天皇此まきすの國の
女國といははすく
ニシキなるし林まひ
いすけ 東照神の命
此は新とや月日とせ
て天の下四寸のまき
おしんくもぬくは
くし神れりくみあむ
浴く食園ふみちと
こてまは世のまきの
日いたにそのはまよいつ
きはりく人されはつけ
をんまきとけつてまき
きしつ 林まきまき
すあうき大食園東と
神のまきとまきと



十七日名もあま
東照大神此時象と尺
奉りて

稲掛大平

結神の草葉
新藪此より凡そ廿
小ねとて三つ此
國ゆきても行きて
おまてて天皇の降
之此すは天の下四
方の國内とて此き
くの活りてまはる
下包野ニ雲の雲に
万代とまのまの
東照神のみこしハ
外こよや因一は
泪とあま此尾
張れ君のびり
ま由ちとや乃
里は城のちも



いつとほつて
まよきいすは海
此のよのきり月
神此よのきり月
く月かむく月
けくく清人のい
まは海らうけのた
やんは

は

東照神此余の神
ふゆきいすは海
と里人のちも
けはつてこれ
その川わ車と
見まはるり
きを形よりの
人らきく人
森ここの
のちいつみ
ぢしり

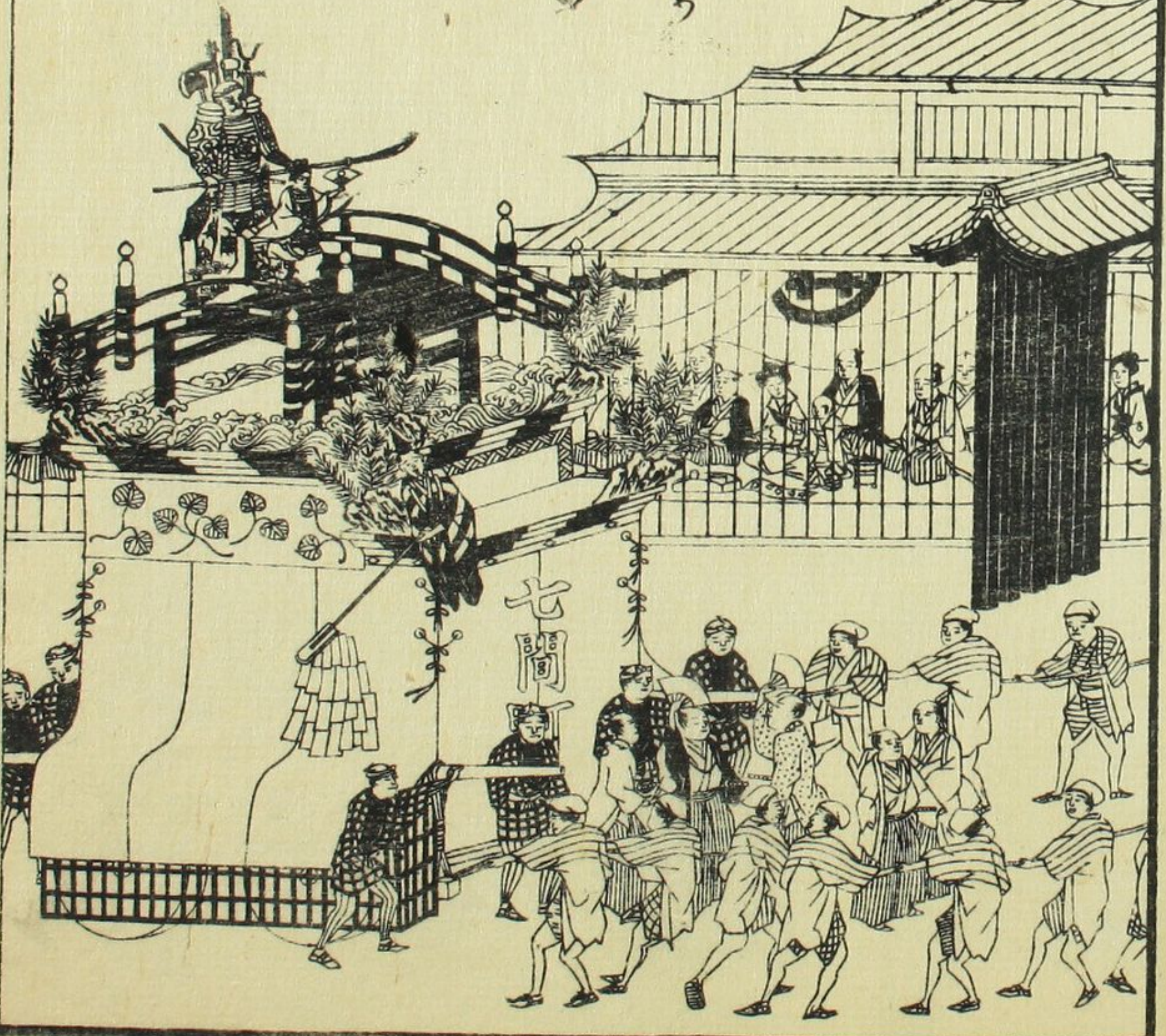
其二



其三

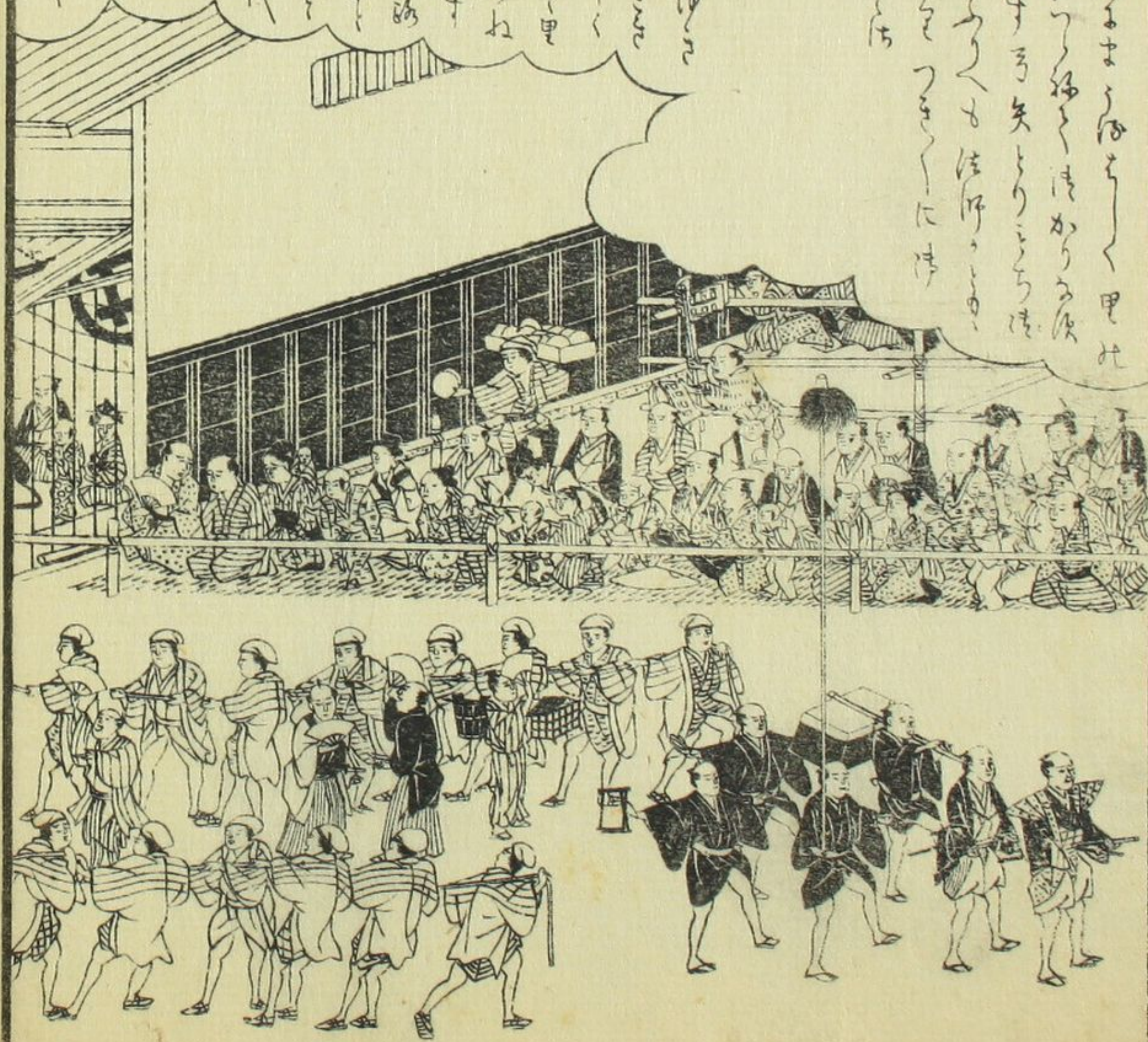
神系と 汐画
まこと 日おや
まふこや
あやつゝの
まけい
うららめ

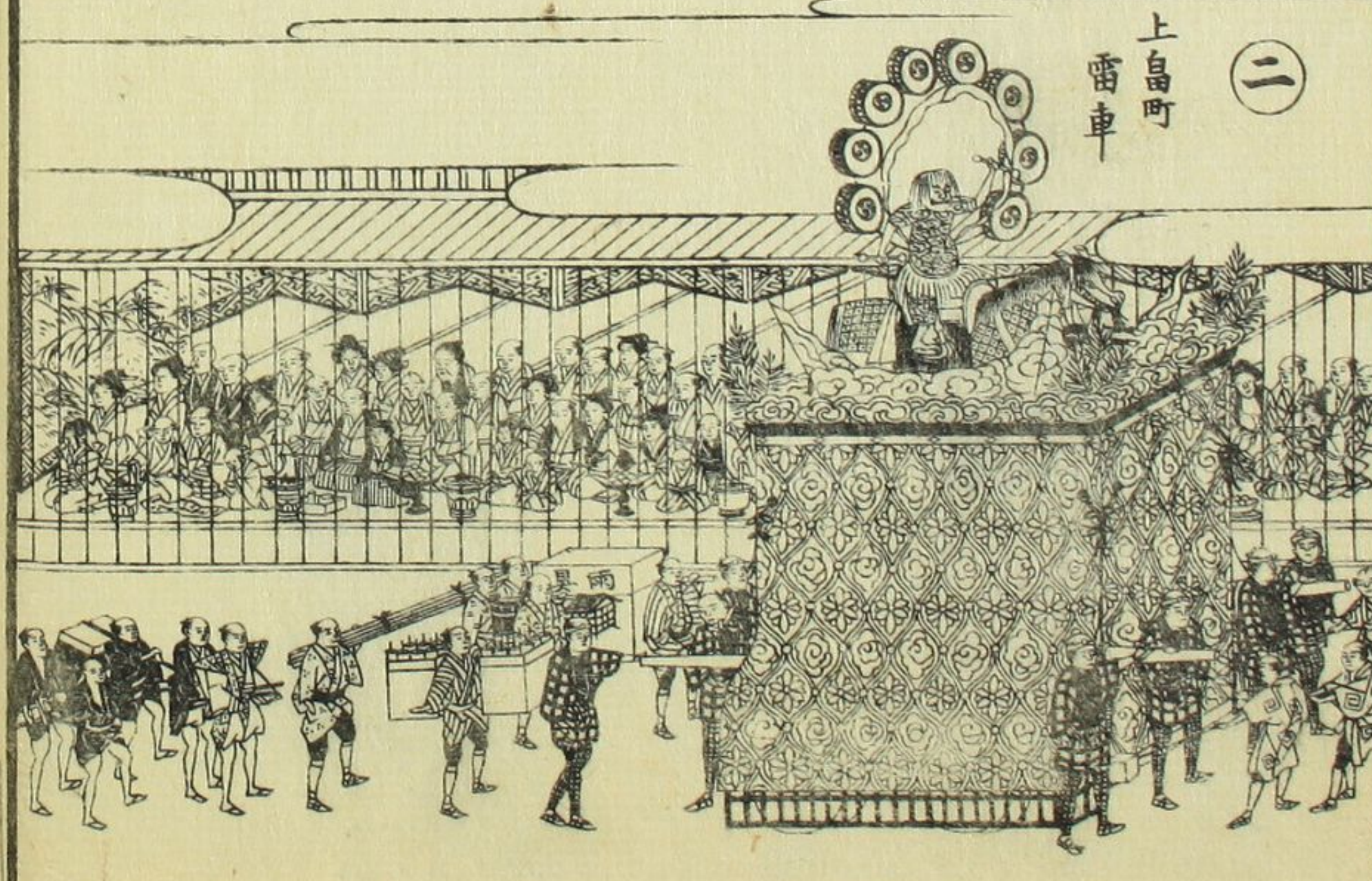
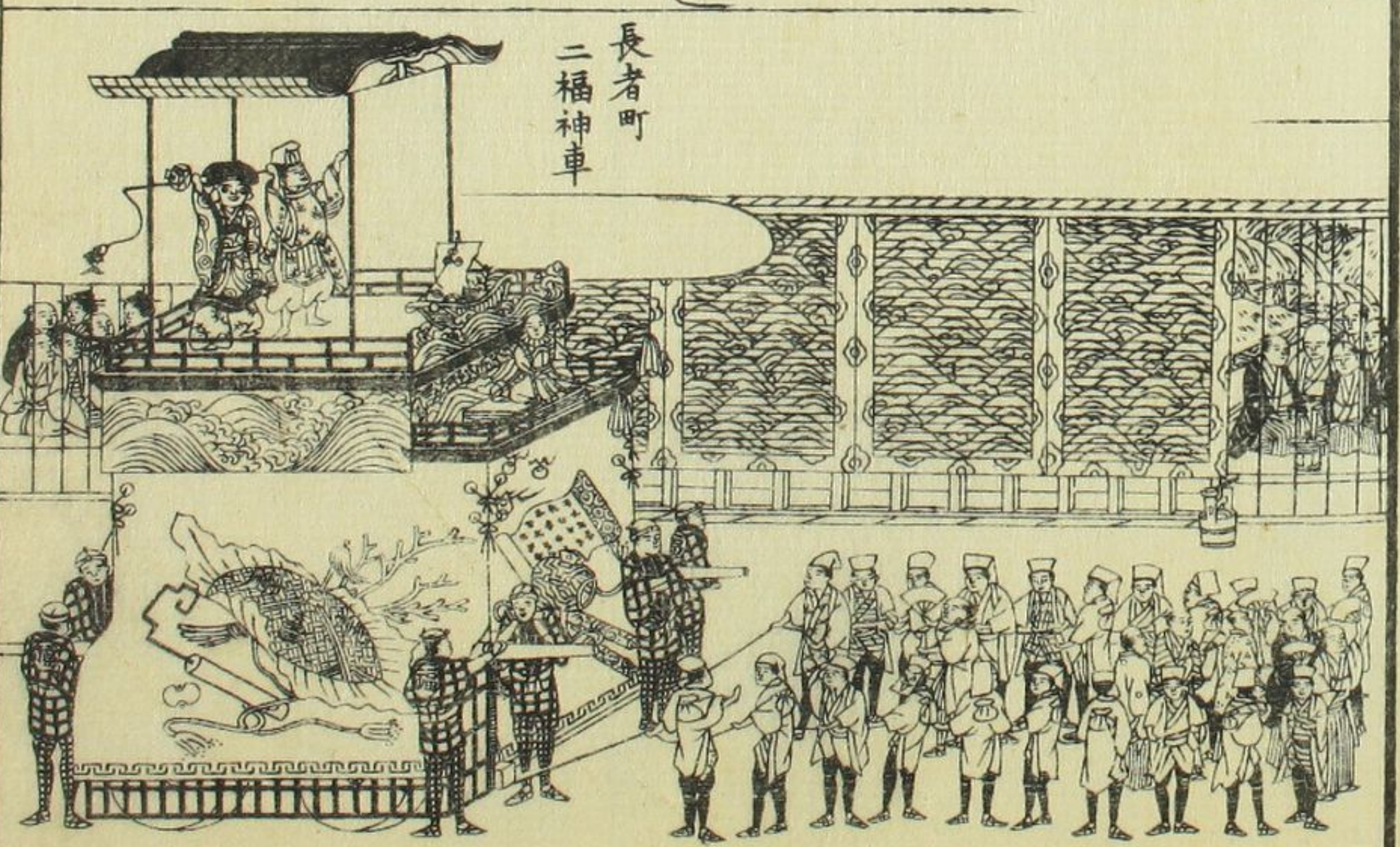
あやつゝの
まけい
うららめ
あやつゝの
まけい
うららめ
あやつゝの
まけい
うららめ

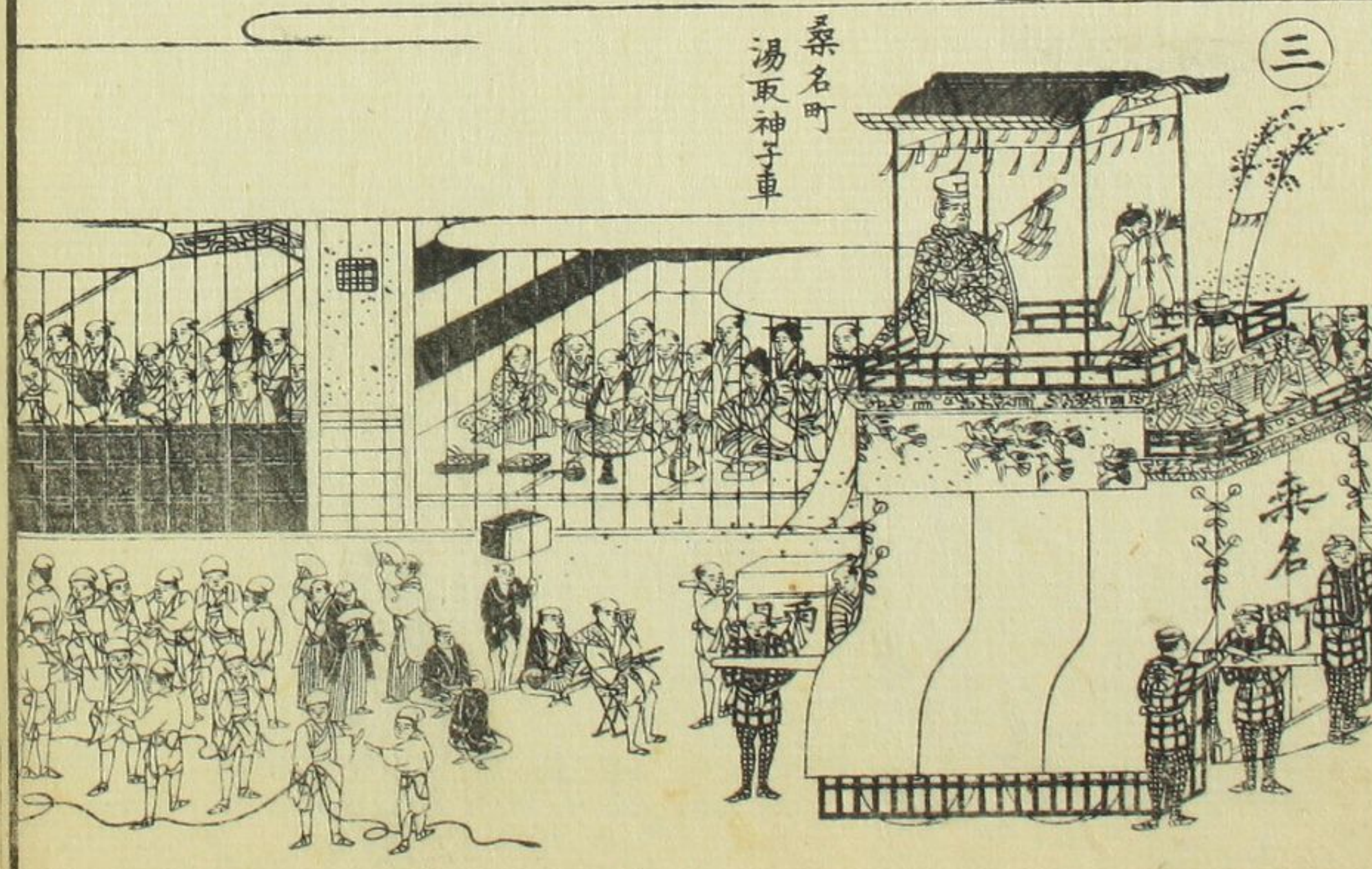
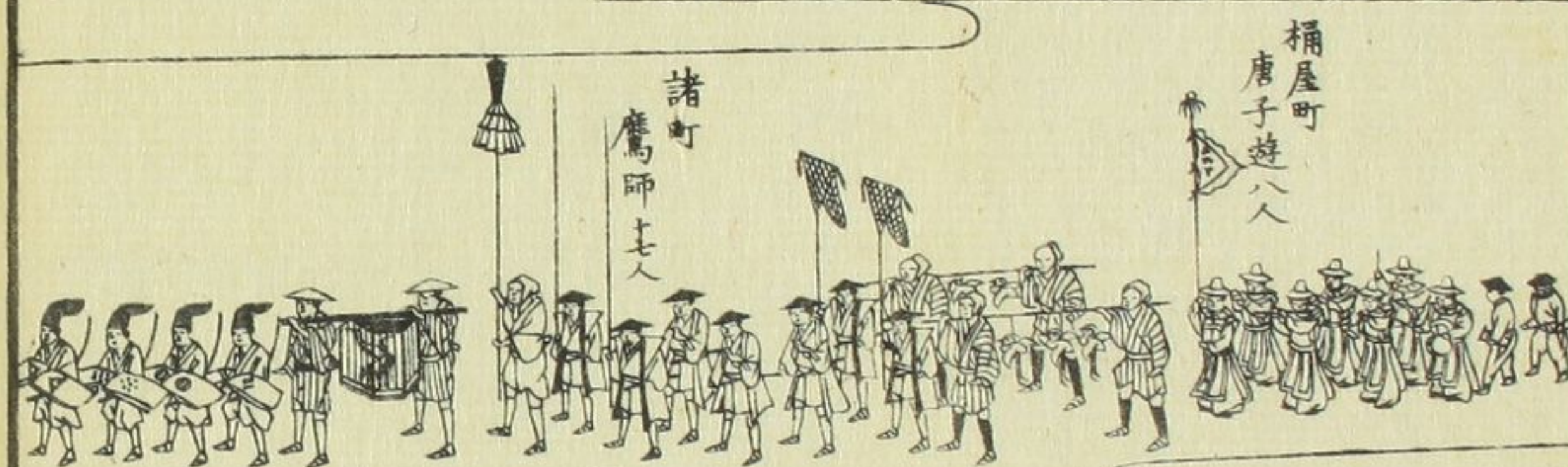
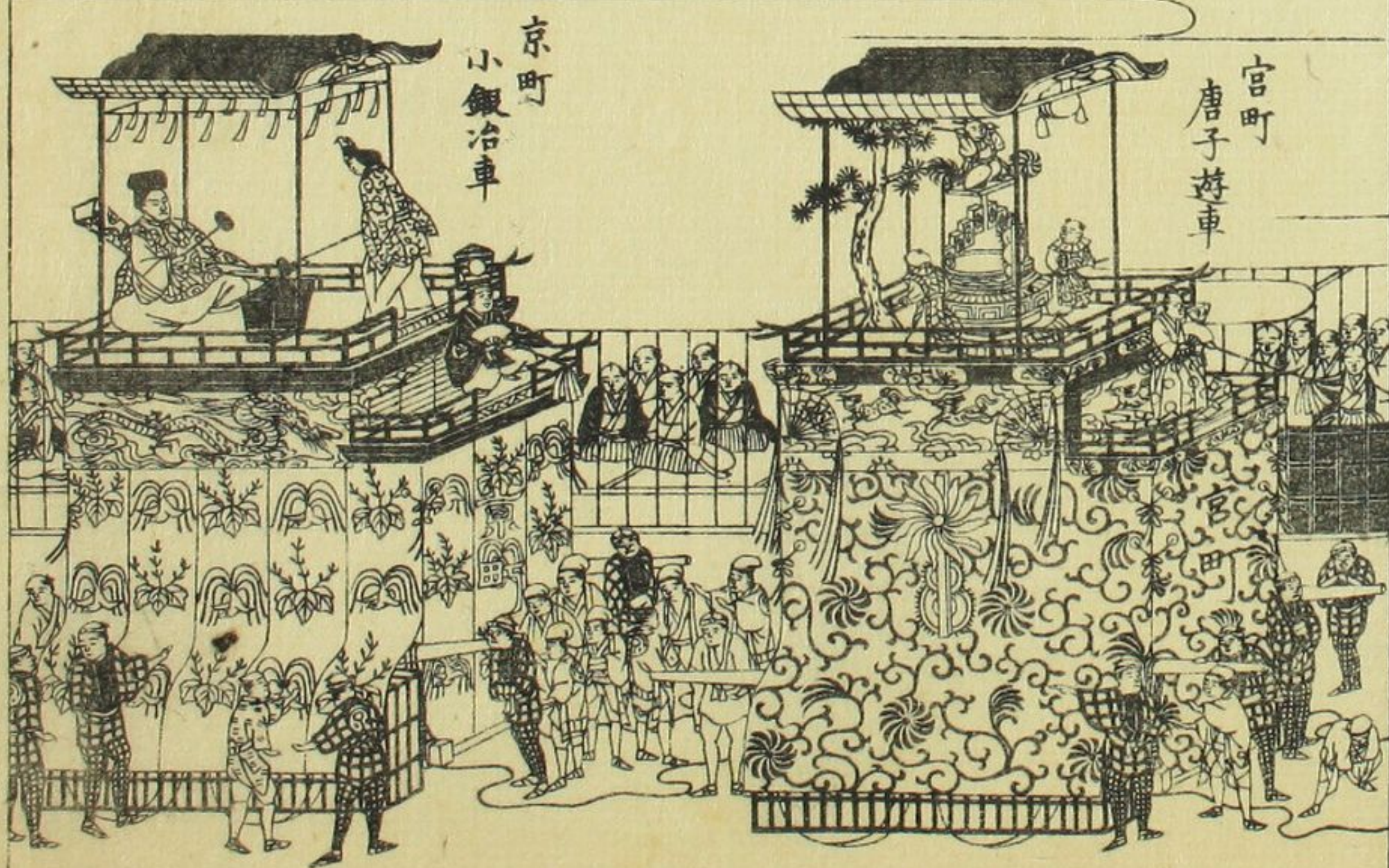
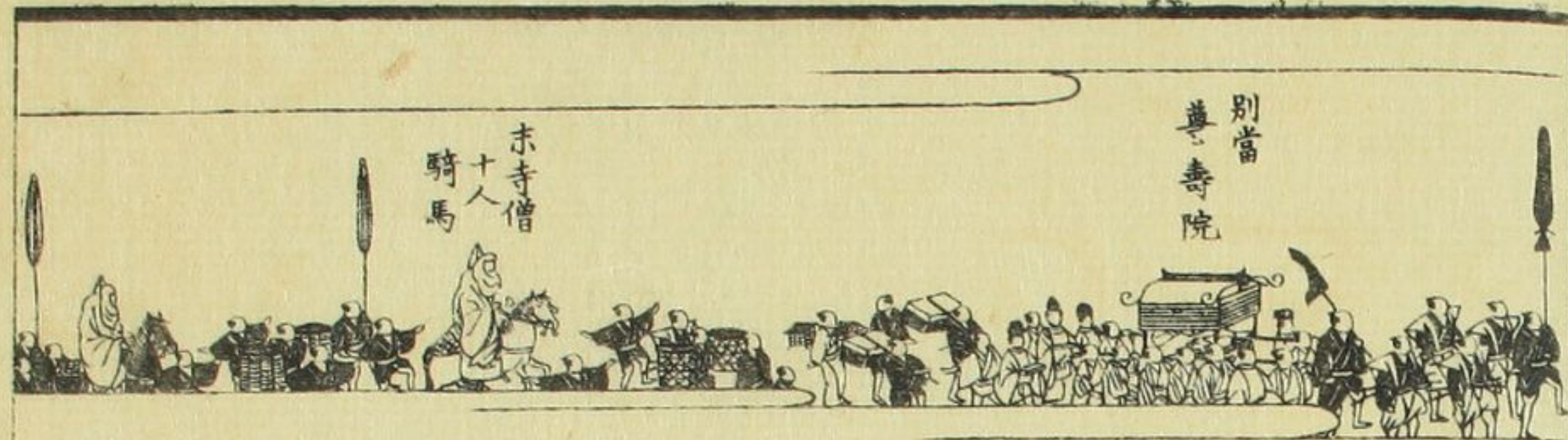


てすまきくにいきゆるはまはるはるく甲れ
ろりかなひもろもろひつろくはかうる
やとよたすあつとさすけろ矢とりもろ
津もさけさつとさすけろ矢とりもろ
まらあく馬たさつとさすけろ矢とり
もほふふんるさつとさすけろ矢とり

却りまほろここの里れゆる
とほろ大崎とろつろくか
や神の津幸とろつろくか
ろりゆる見ると里人もあはれ
人もまろろも袖引つろ
まわこのなれちまろたさ
きあひさハにつらひて大崎
のやひらとみまろりに東
まろつろつろりおん
まろつろろは色ハやすほ代
のろりかろろろろろろ
くもまろろろろろろ
まや此大津のろろま
まけきみろつろに天のろ







其七

(七)



大和町
唐人二十八

淀町
指南車七人

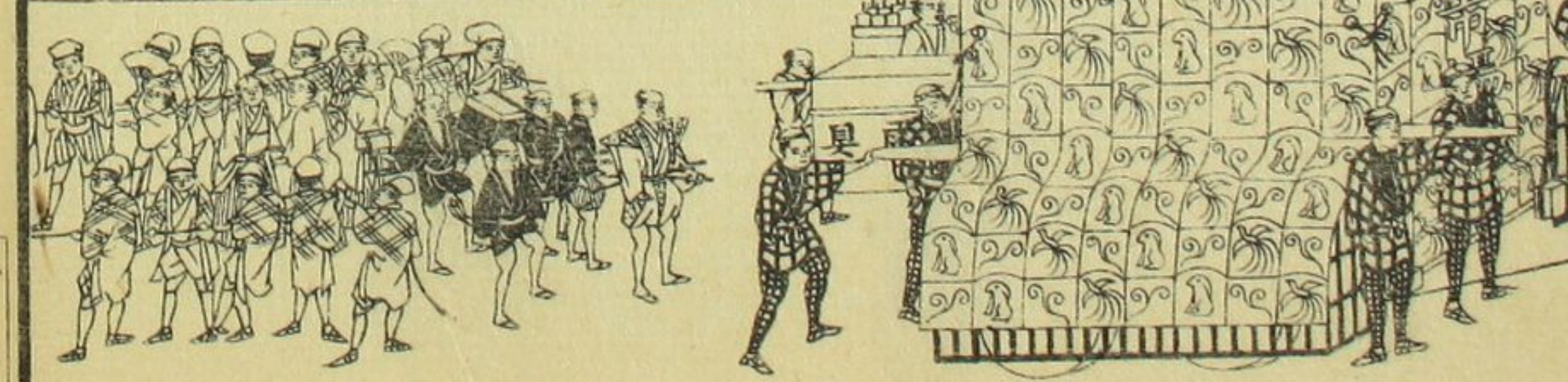
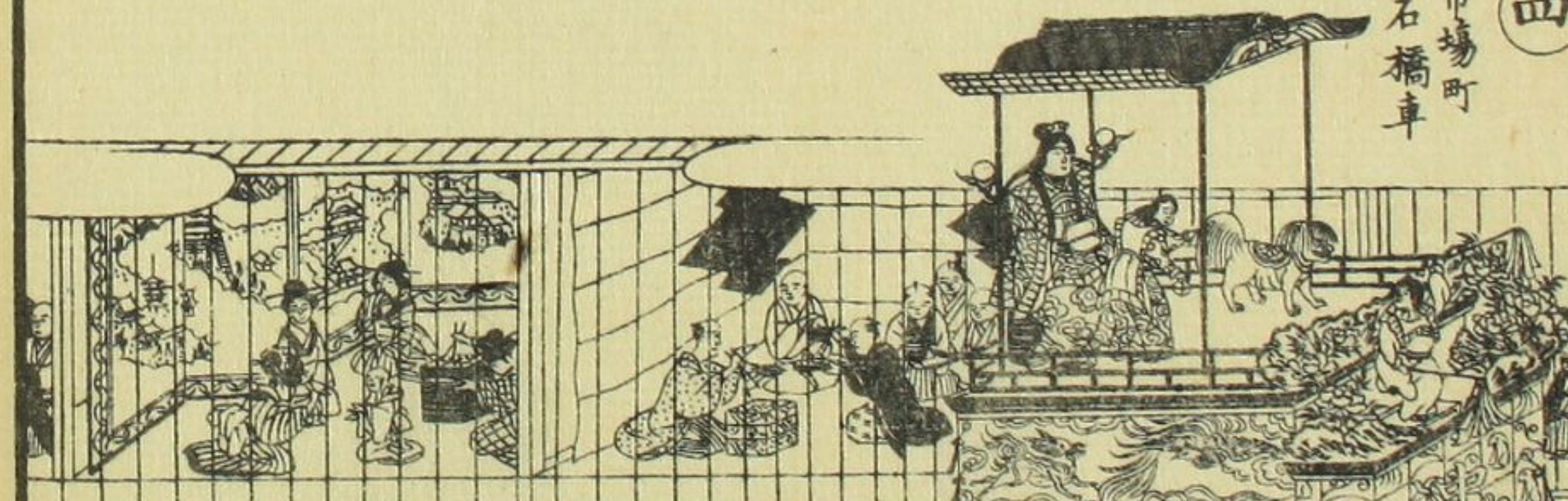
伏見町
中巻六人

上御園町
刀指子供主人

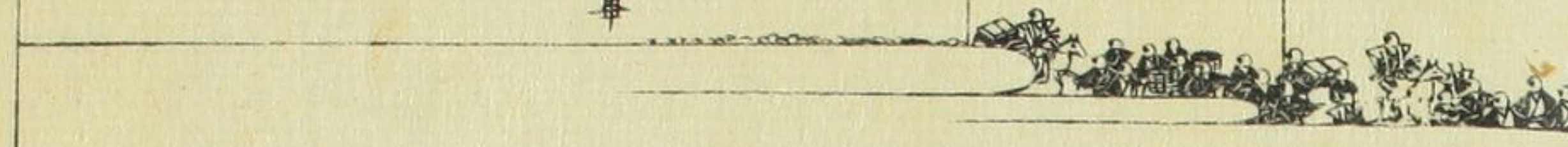


(四)

中市場町
石橋車



御行列畢



下ミソノ町
主人

長島町
武者大江山人
十三人

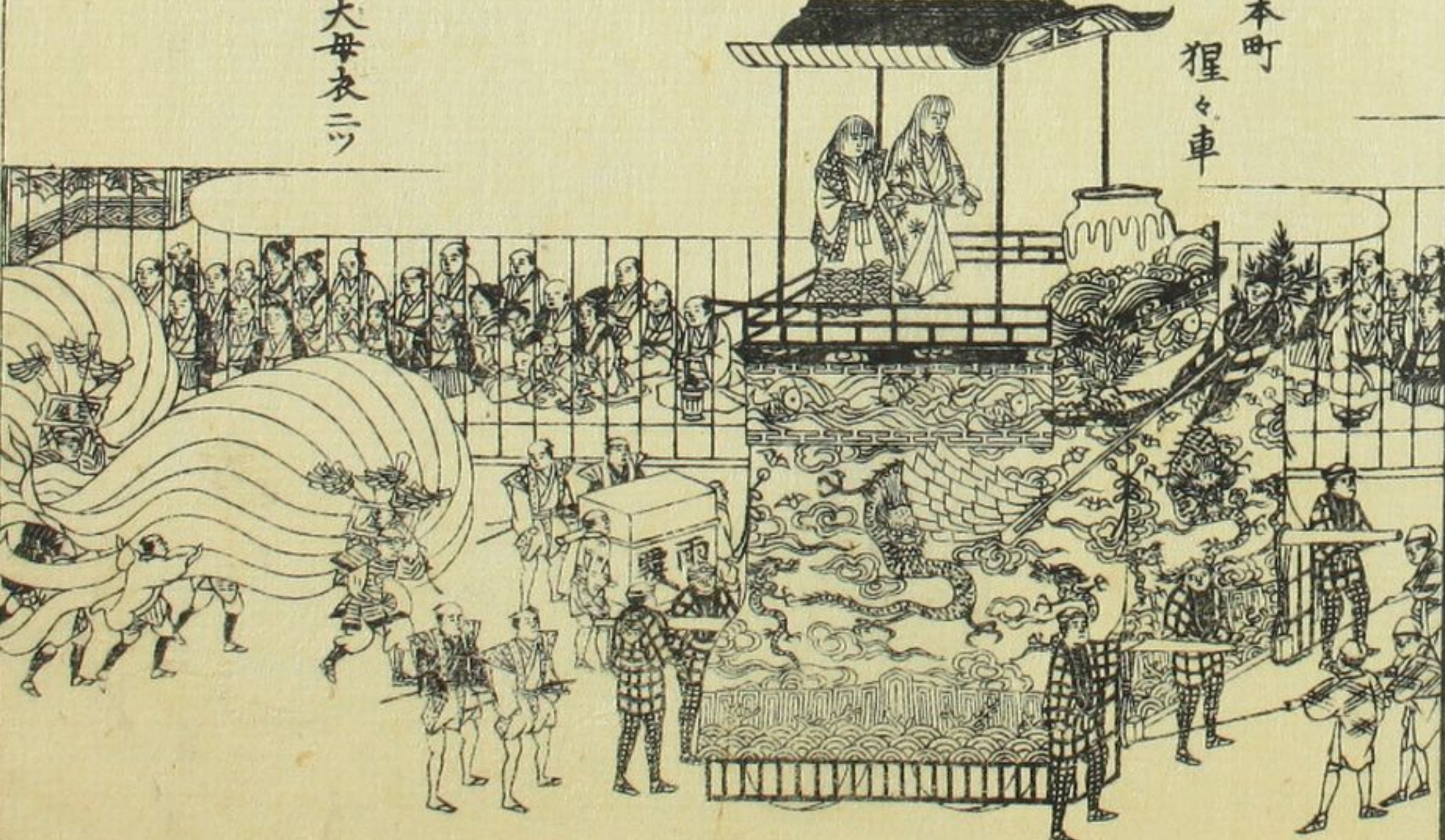
福井町
富田町
小母衣十一人

(五)
小櫻町
業平東下り
十五人



本町
狸々車

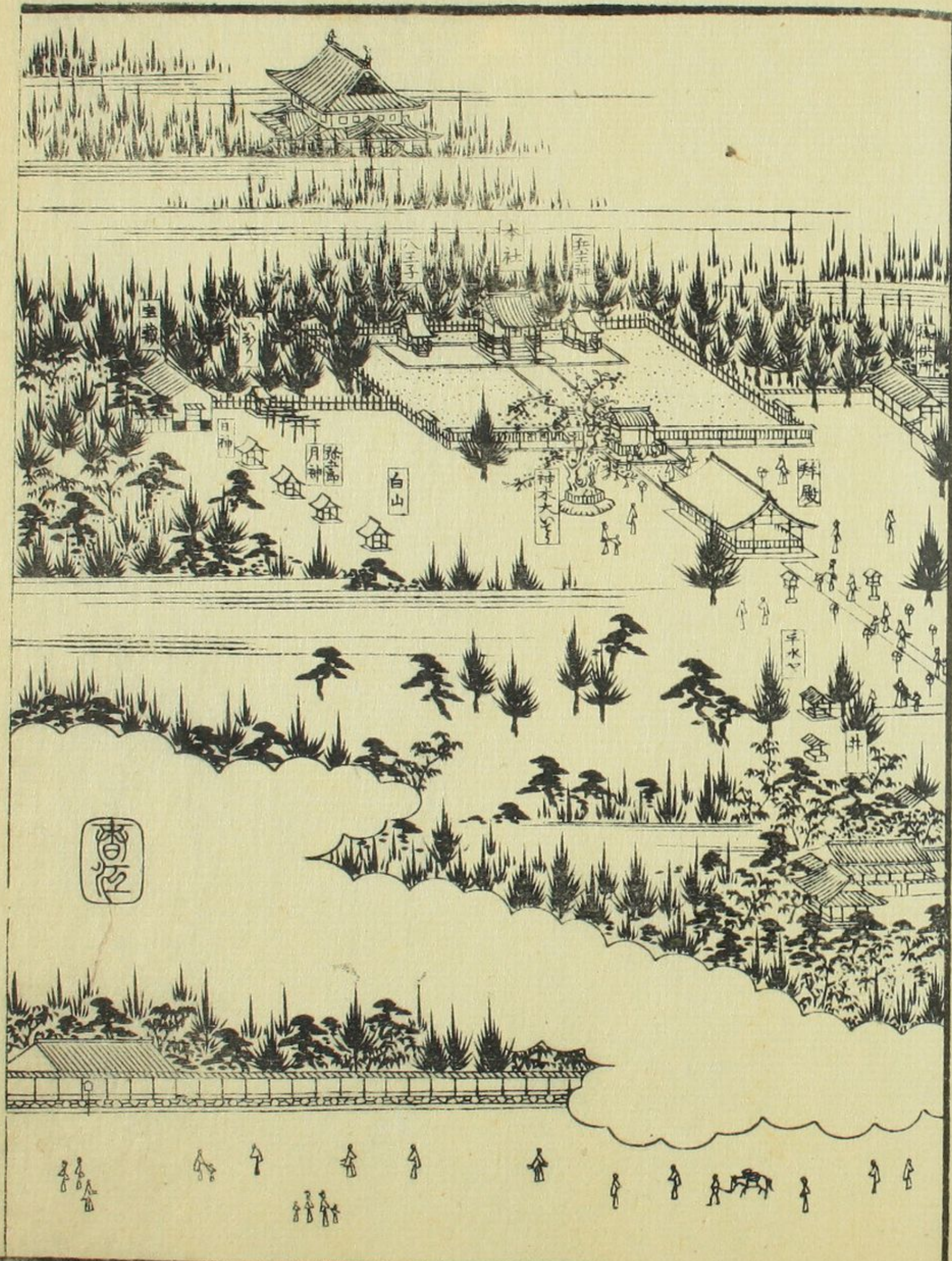
大母衣三ツ



他よ遷り給りし御闈再三下りて往昔 神君御
 若年の時は天王坊に三年ごりごりたしゆき其御
 志しきみより終り外へ遷地しゆくやいぬかくて御
 城擁護の鎮守府下の氏神といふいふ事なり
 常に絶了 本社 南向祭神 拜殿 額と掲ぐ画ハ官脇有慶
 瑞籬御供所 寶蔵御井鳥井攝社 八王子社ハ本社
 年巳己十一月十六日 源敬公新に御造営より瑞籬の外ハ未社ハ
 稻荷社 日神社 月神社 弘五郎社 白山社 等々
 孫樹 拜殿の西にありて 嬭姑の婦人咒詛せん
 ひまじりより後木のなかへ 神寶 雪舟十六羅漢の屏風
 進状等 敷通其外神佛此画像多し 拜殿の鯉口ハ元龜元年八月廿四日の文字
 見え本地堂の鯉口ハ大永八年戊子正月日鑄之
 祠正体鏡形面中画牛頭天王上画婆利女左右画八王子 東日奉施入牛頭
 天王御正体勸進沙門勝尊并縁阿弥陀佛正安二年壬寅四月十一日
 例祭六月十五日の夜片端御園御門より東の方に車
 樂と置き 數多此挑燈とかく又ハ祭よかより所く

より 小山車と曳來る是と見舞車より其外府下此
 子供等が笹に小挑燈とほめて捧りありさほ皎く一月に
 映ぞ 數千の紅燈白日と欺き 貴賤の羣集潮の湧かぬ
 一實に夜景の壯觀之又十六日朝前夜此車樂は能人形
 とかごとて引渡す兒の舞ありて古雅なる祭式之

亀尾山安養寺 天王の別當より天王坊と號し真言宗
 京都仁和寺明王院と兼帶伊勢國多氣郡長
 松山安養寺と同派より開山惠日國師ハ禪密兼字此
 知識より 後園の假山樹木の位置自ら幽致なり是古田徹の好みて
 存せり 龜尾山の額ハ明人陳元贊の筆安養寺の額ハ
 朝鮮人雪嶺の筆之塔頭常林坊南坊西坊の三字あり
 瑜伽境在大城間緩歩乘春試一攀浴水文會會荇
 帶滿園芳樹結華鬢香雲編覆三摩地彩石嵌空九
 奴山幸有閣黎憐翰墨優遊共得樂餘閑
 名古屋山三宅址 名古屋藏人高信の屋敷跡三の丸の内西南の方



龜尾天王社

冷泉村々此社を
 聖蹟とて修りありし
 時奉納此懐紙に

年早此はゆりか
 いづきま

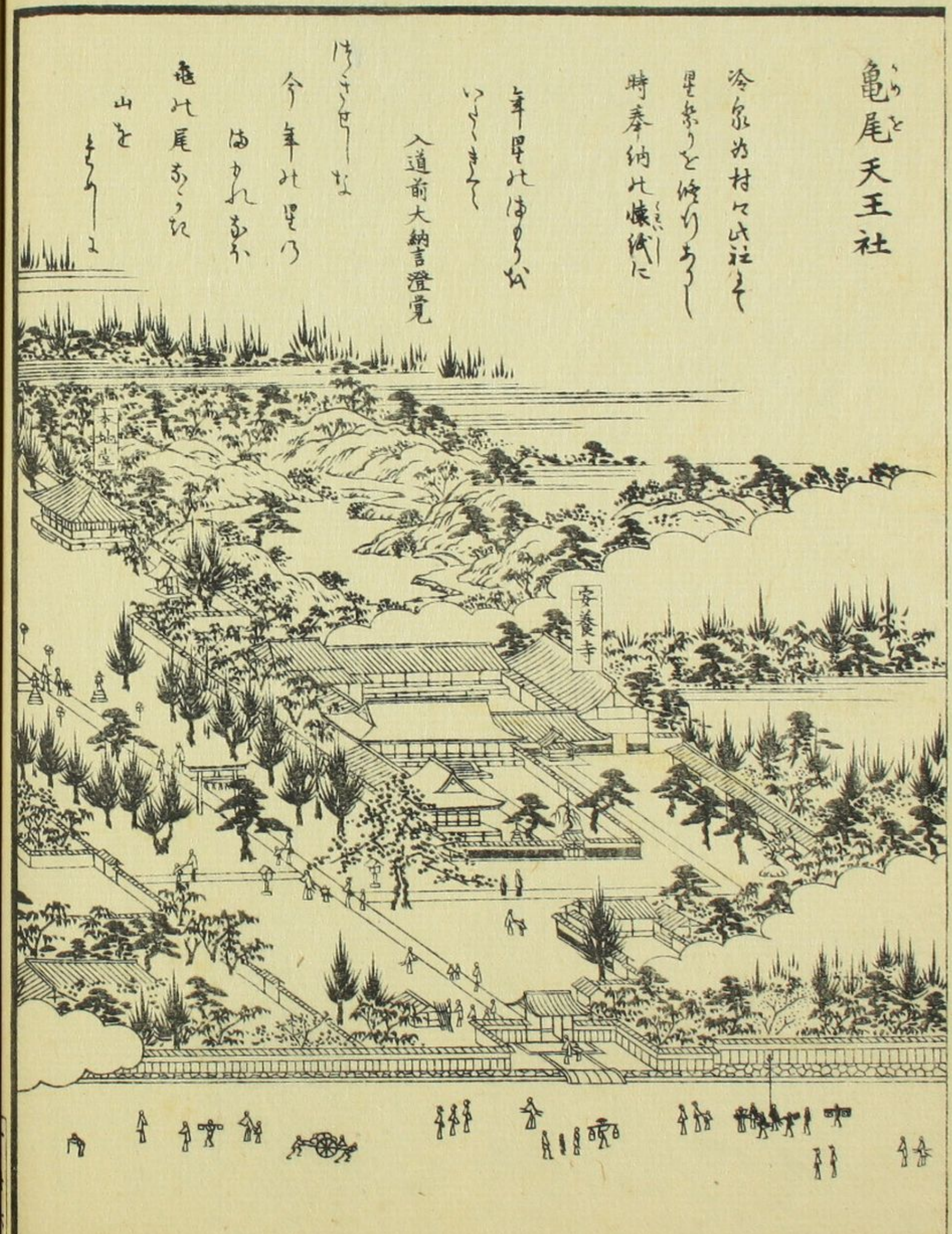
入道前大納言澄寛

今年此里の

ゆかりあり

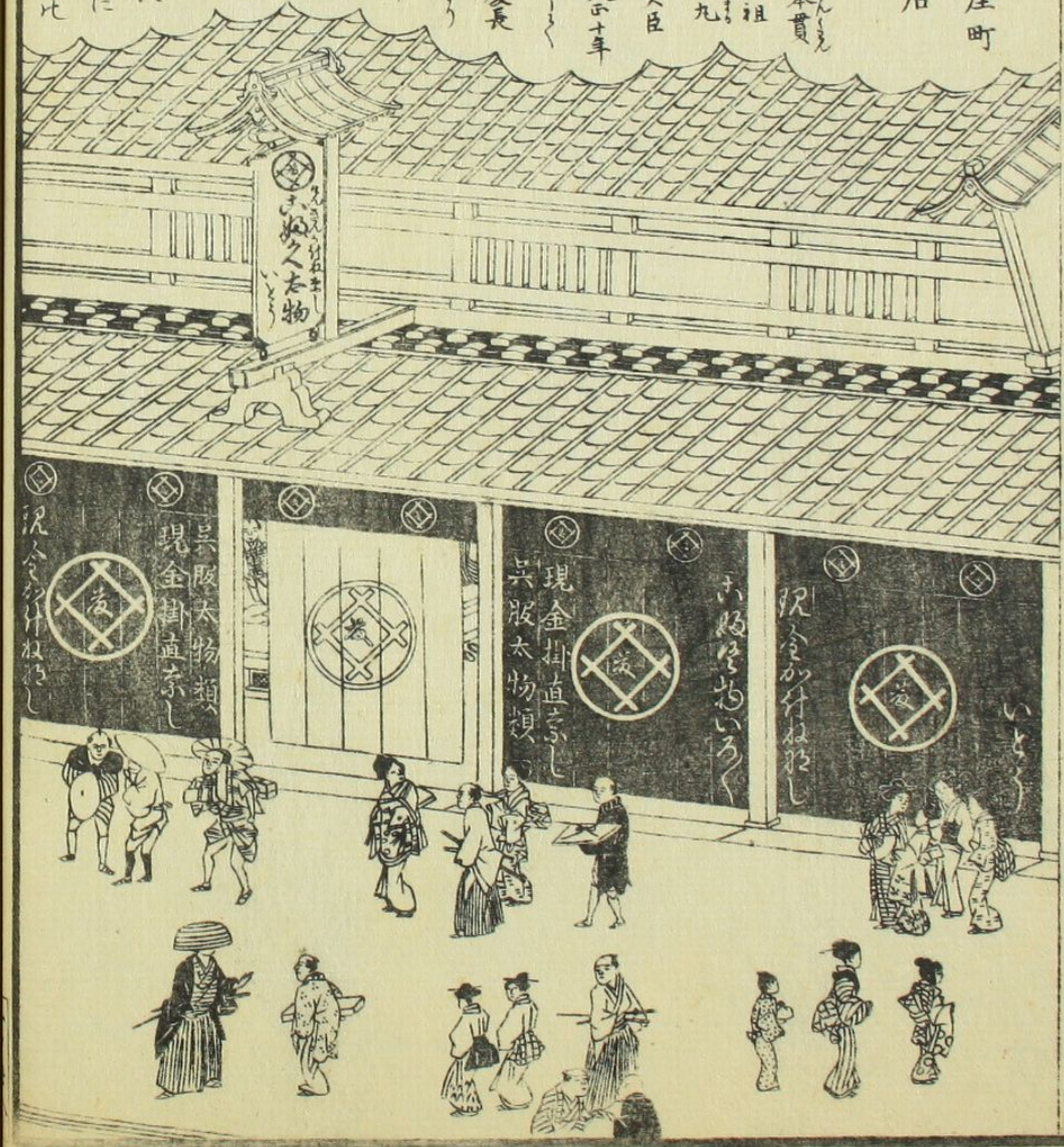
龜尾尾あり

山を



京町通茶屋町
伊藤呉服店

此家ハもと尾張本貫
の武士リテ先祖
源左衛門 幼名 蘭丸
去茶丸ト 信長ト政大臣
別人トシ 信長ニ官仕テ天正十
公亮逝の後浪人トシ
清波ニリテ 慶長
十五年の寺遷府ト
名古屋ニ移住シ
萬治二年より呉服
屋トシ 江戸上野
度小治トシ 明治
に出店シテ 家
富教代茶屋トシ
須山王の社拜殿ニ
カキ 古き 様画比



扁額 後に 奉懸
御神前慶長八癸卯
威伊藤蘭丸トシ
則其家人トシ 時此
寄附トシ



香

少きり又那古野古園に名古屋山三を愛しつゝも同ト所より蔵
 人高信ハ今川麾下の士より一様といひ前の人なり
 古屋因幡守敦順の子山三郎後九右衛門といふ母ハ織田刑部太
 輔の女山三郎浪人の後出雲の巫子といふ女と具ハ京都三系
 ありて女歌舞妓とす其後大坂より淀殿に悪名ハ沙汰あり
 一より森家の系園に森侍從忠廣朝臣の母ハ名古屋山三が妹といふ
 又又此園が子舞世ハ名高信長公豊太閤の御前より出雲高貴の門
 入る態とせり其体天冠といふ白衣と帯ハ水晶珠敷と首ハ掛
 髪と垂玉佛号と唱ハ鉦といふて歌舞せり凡ハ山三於國ハ
 二人歌舞妓の姿と仕女ハ諸人の知らぬあり

芭蕉翁雪見の一軸

本町一丁目書林風月堂が家に珍藏す風月堂二代目
 十二月芭蕉翁此店にまより雪代降出け即吟の句と夕道と号す貞享四年

書林風月と雪代降出け即吟の句と夕道と号す貞享四年
 雪代降出け即吟の句と夕道と号す貞享四年

いさ出で雪見よりみよる

丁卯臘月初 夕道何より贈

そのま

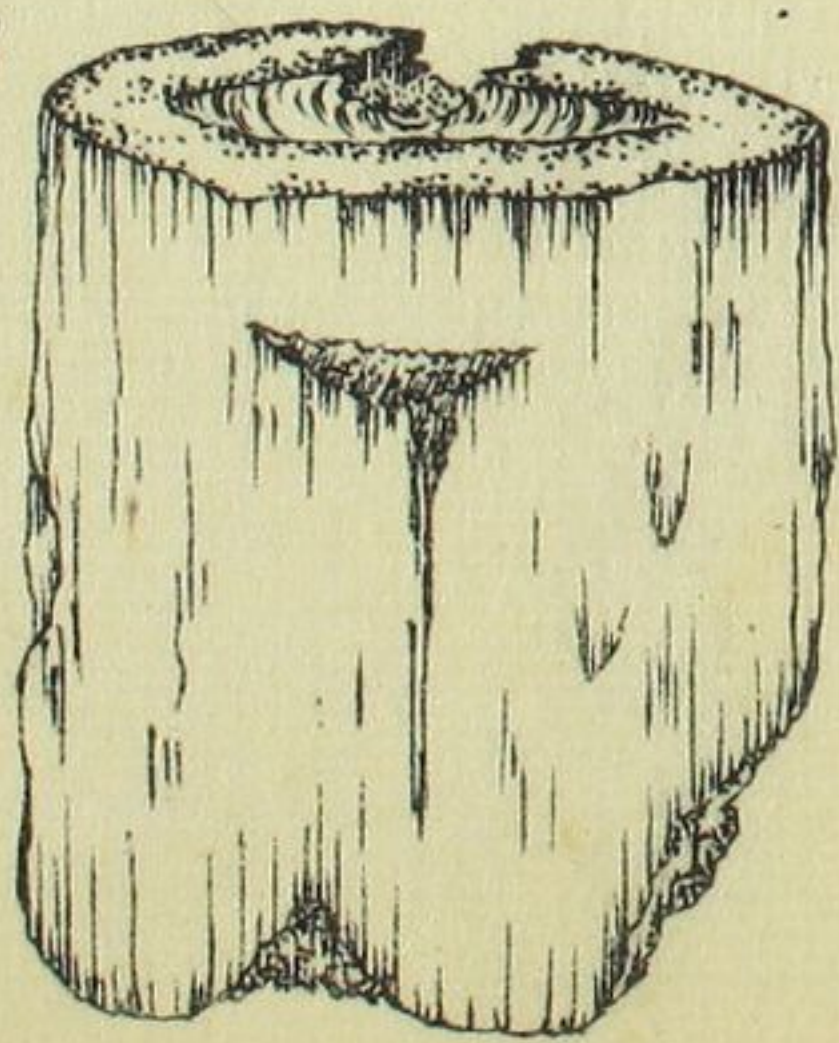
その後也有家ハ一軸と見らる一時

手の跡や雪代見たりんぬ世さ

花井白の古事

本町一丁目の唐本屋に家にな年久しくお修へ白のりて
 年春のの歩をみる赤梅壇の上品とて近隣者
 未だ知音の万へも配多しと森川某故あり冷泉為村ハ奉
 夏衣と名づけけい

おげろ 夜に	かきハ	かきハ	かきハ
日敷より	まきハ	まきハ	まきハ
うすハ	うすハ	うすハ	うすハ
すハ	すハ	すハ	すハ
初尾	初尾	初尾	初尾
まハ	まハ	まハ	まハ
冬ハ	冬ハ	冬ハ	冬ハ
期ハ	期ハ	期ハ	期ハ
なハ	なハ	なハ	なハ
玉ハ	玉ハ	玉ハ	玉ハ
うハ	うハ	うハ	うハ
合ハ	合ハ	合ハ	合ハ



香木ハ... 澄鏡... 都にのげをては... 雪見...

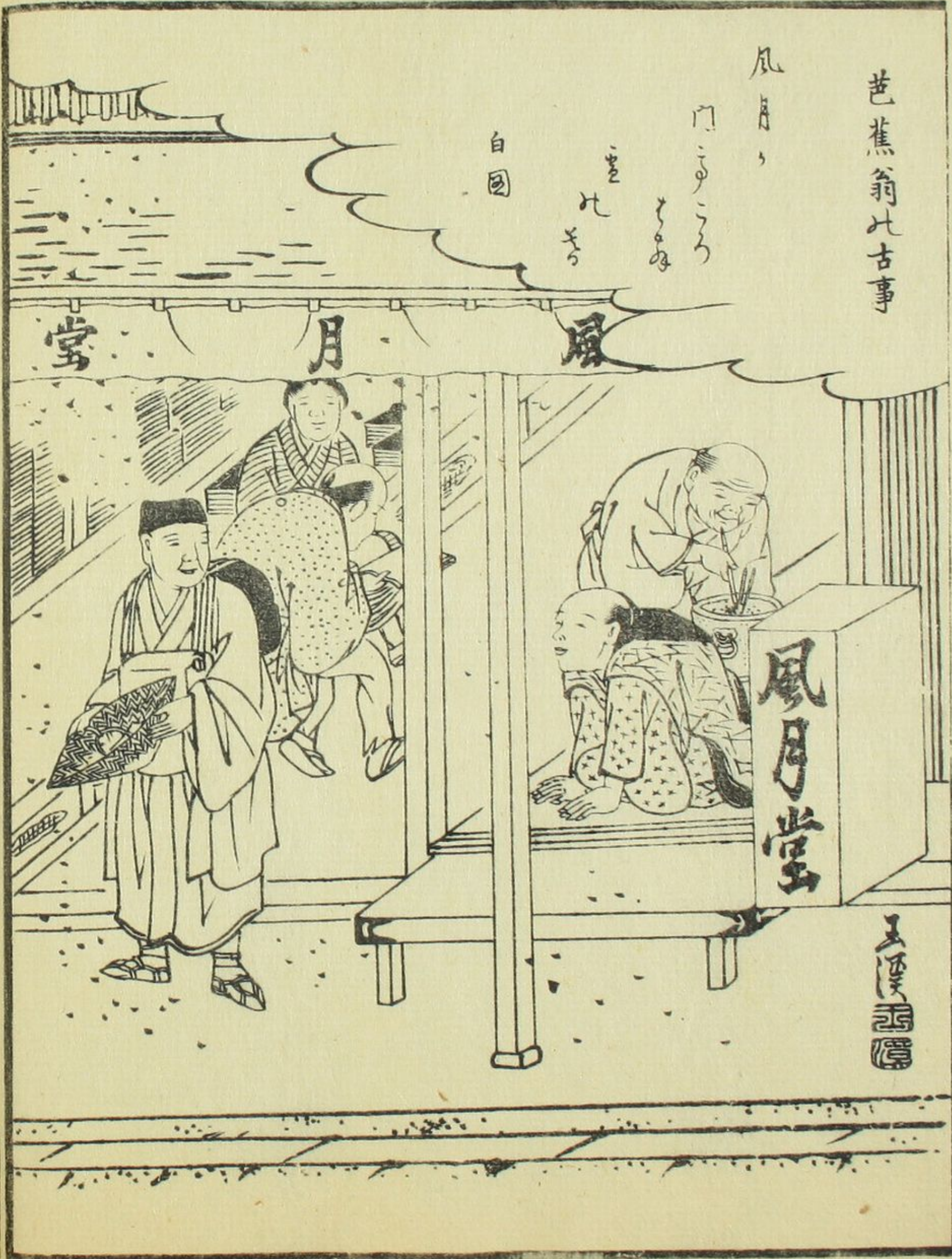
芭蕉翁此古事

風月

門

此

白



櫻天満宮

小櫻町本町西
入南側小あり

織田信長後守信秀つひ小天満宮を

信作一我時系初北野へし糸泊りけり一夜の夢に菅神

枕上よ主給ひ我は梅松院小ありの年久し今汝が住

國よむ之よ諸民此安全と守らん告給ひいばいと此梅

松院よ至り其旨と語りて梅松院も前夜より夢

の靈告小符合ひて彼院の靈宝あり御自作此并像

と信秀に附与しけりと天文九年より社と創建

して安んじ万松寺此法もてりが慶長御遷府の時

万松寺と今此所へうつされり御闌の神慮はほせは

社ハ縁ありてふいませり

の大樹ありて桜天満宮と称す別當櫻花山靈岳院ハ

曹洞宗とて則万松寺の末刹開山ハ清庵宗仙首座之

樹ハ万治三年正月の大火に焼

失して今ハ其名のミ少あり

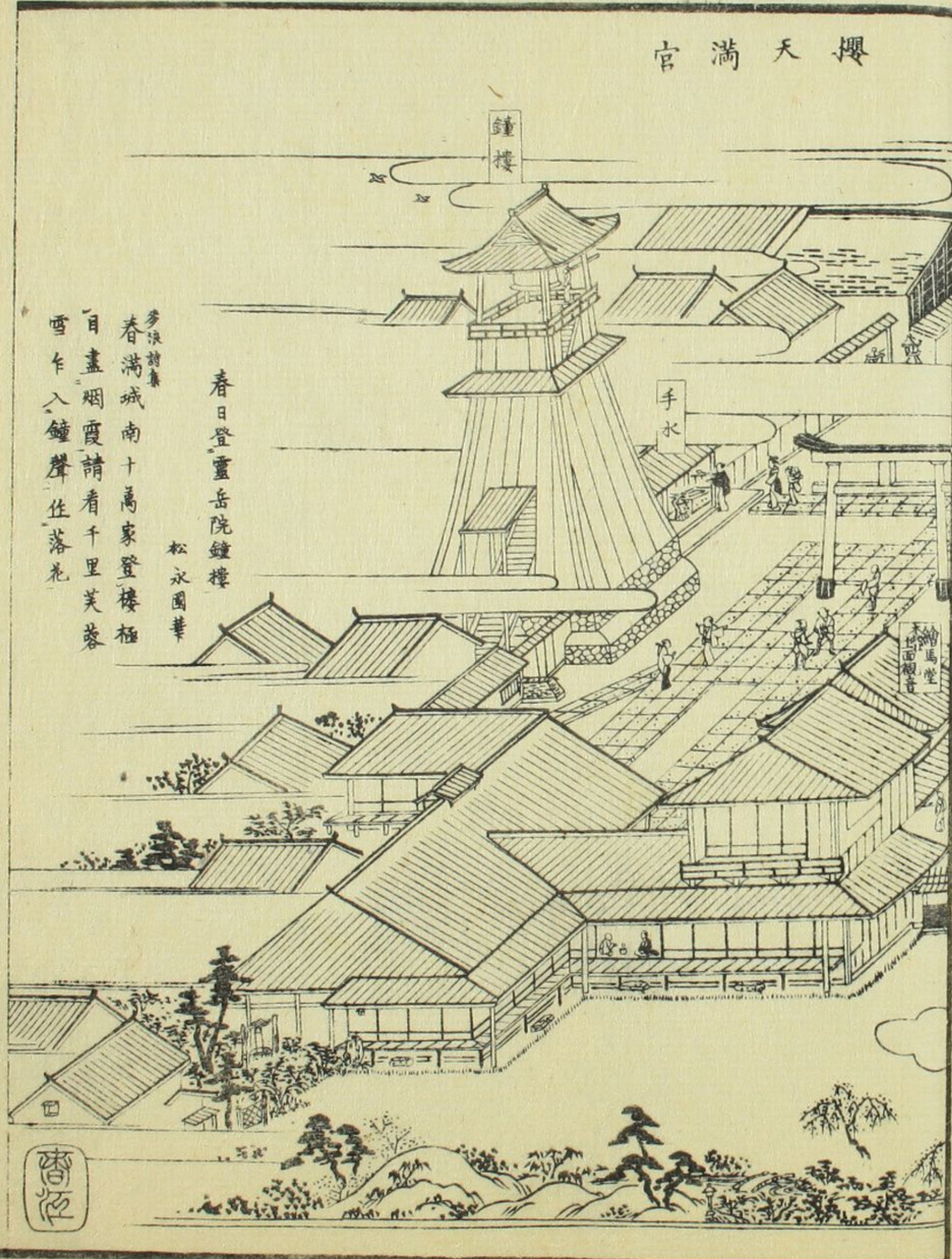
本社菅神御自
作の神像薬師堂

本尊智
大師の作

入道前菅大納言のかまき縁
起ありてふ文ハ大同小異あり

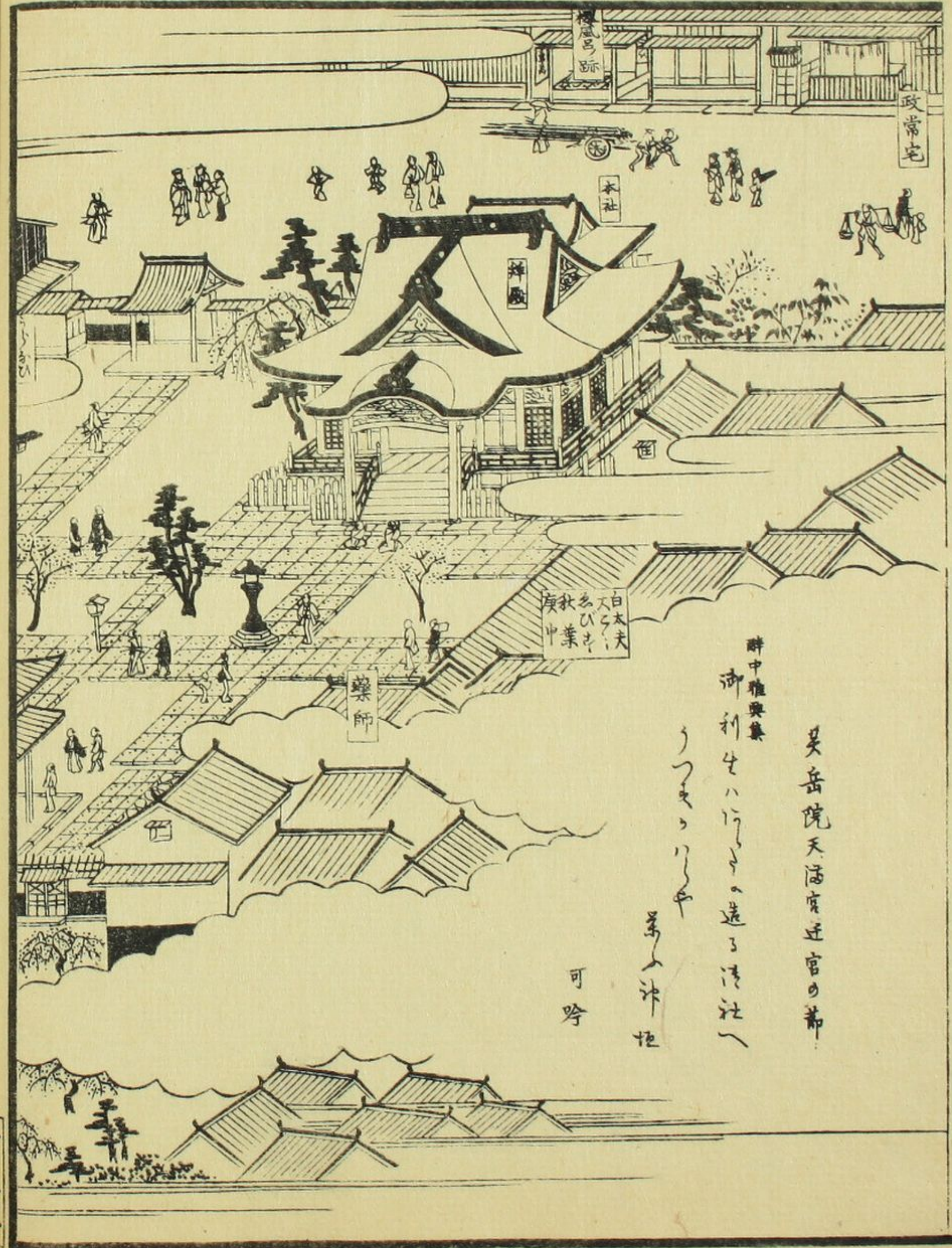
神木ハ櫻

櫻天満官



春日登靈岳院鐘樓
 松永國華
 夢溪詩集
 春滿城南十萬家登樓極
 自盡烟霞請看千里芙蓉
 雪乍入鐘聲佐落花

香煙



吳岳院天満宮遷官の節
 群中雅興集
 御利生ハ行々ハ遠く清社ハ
 うつた、りや

美人汗地

可吟



子日此此

小松ハハ

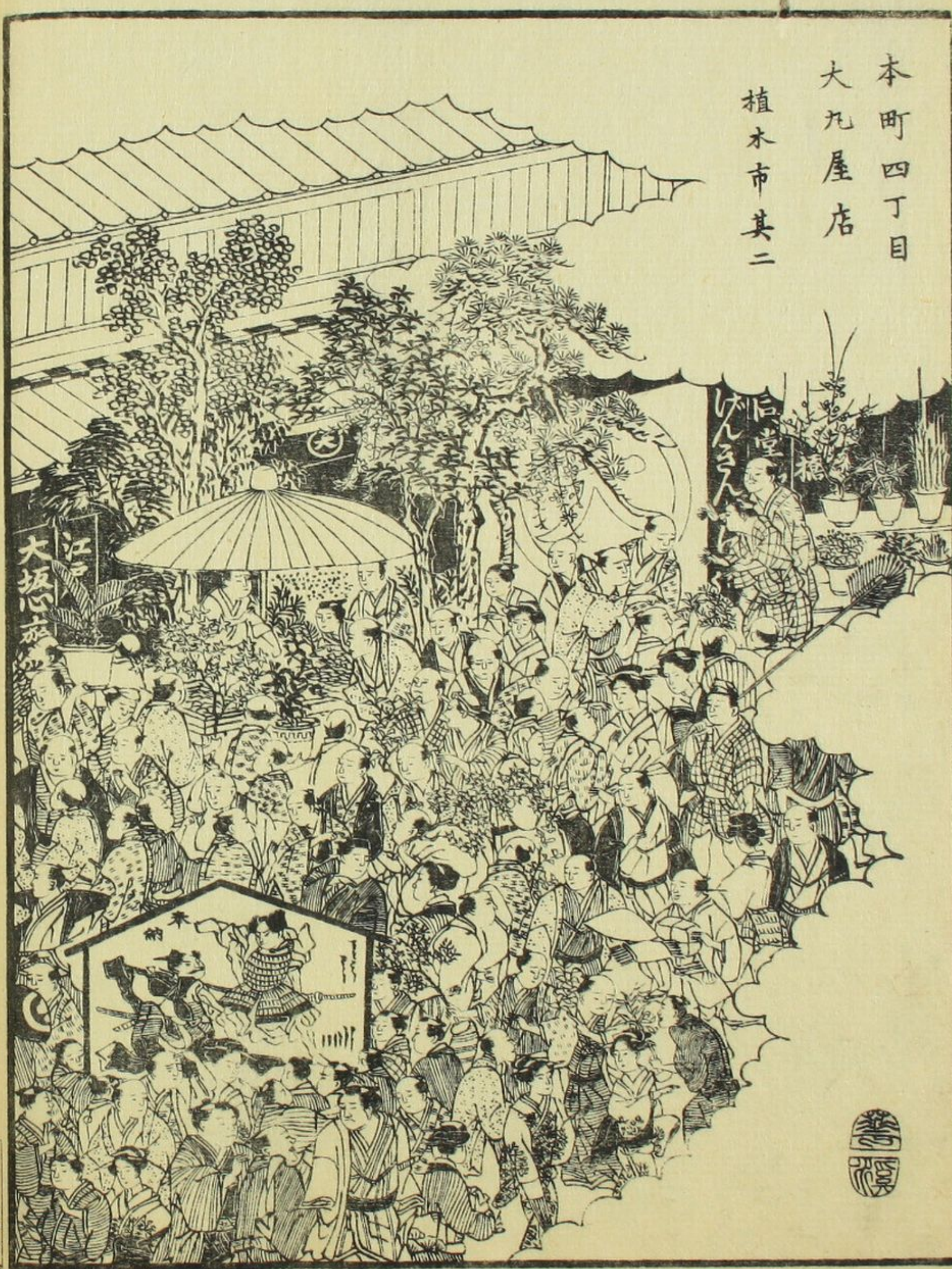
大坂久物

天祥の市

双蝶園

大坂久物

同堂



本町四丁目

大丸屋店

植木市其二

后堂

大坂



末社 數祠 拜殿 繪馬堂

又天保七年に至りて諸國凶作歩つき米價高直うて飢渴及べし
のすくなく其比府下の志り町人小所小掛り堂とて編類と
かけて日若千此金浅米穀或ハ衣類等去思ひくに貧賤を憂
と 國君の御仁政より憤發せりん同九年の春に施行の趣計
凡二万ある余及べりて連年の凶作より御仁惠の鐘樓萬治
下ご田及べりてい
三月より官命と奉して晝夜十二時は法をけりて町中に告
しむ故小時の鐘と稱し古鐘の銘ハ小出永菴の作なり
は燒失し今の鐘の銘ハ須賀安貞の作なり

尾陽城下鐘銘并叙
於乎擊鼓以警晨昏鳴鐘以紀子午乃古今之通典
也辛丑之春邦君出命新制一鼓揭諸譙門而準
挈壺之職每時擊鐘懸諸市街之正中而主時候之數
命有司鑄洪鐘懸諸市街之道如示於掌群僚得是
於是鐘鼓俱鳴而右晝夜之業所謂聲音之道
成官私之務黎民得是修利之業所謂聲音之道
與政通者其斯之謂歟敷於一時以垂於萬世鴻敷
之盛不可勝記馬因奉公命謹勒事狀于萬世鴻敷
作之銘銘曰授時四民
筍虛瀾浪和入感神
萬治四稔辛丑春三月數日
詞臣永菴小出立庭替首謹撰
水野太郎左衛門藤原則重

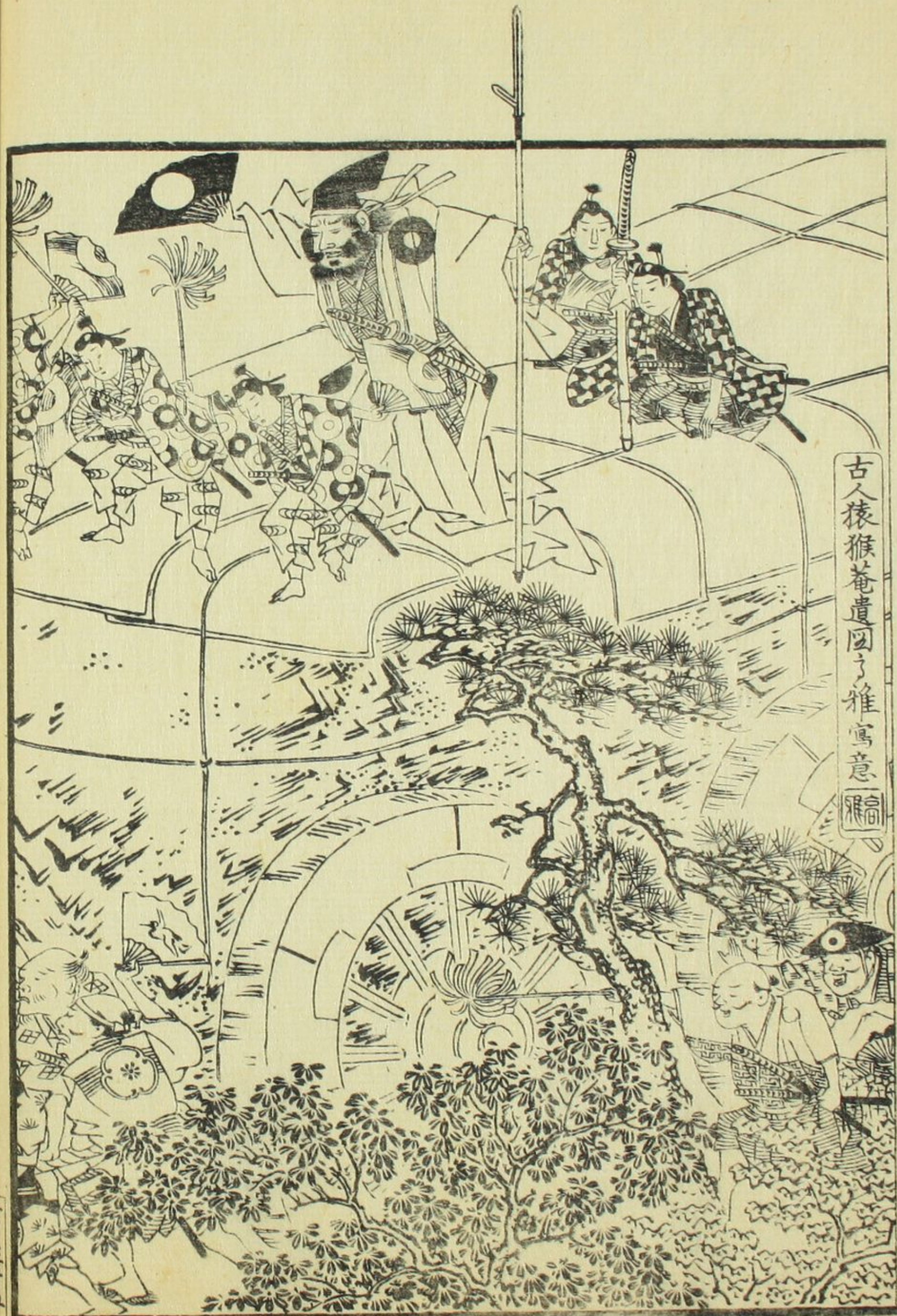
自在昔我先君叔置景鐘于菅神叢祠之南報時
耀民奮庸熙載以未仰其賢享其利者既百有餘歲
日叢祠罹濫災之殃縣鐘俱焚頃為烏有人咸始知
最爲欠事於是縣陰陽相變無滯無散修矣其聲
脫不翼然鉤之武昭嗣徽音以暢達于四境矣其聲
窅以緩安以號武昭嗣徽音以暢達于四境矣其聲
嗶先執後終日竟夕民之攸憂也然相慶曰禹聲文聲
孰先執後終日竟夕民之攸憂也然相慶曰禹聲文聲
也臣安貞奉命欽紀所以先民之攸憂也然相慶曰禹聲文聲
於億齡踵舊文之武以不贊銘辭于此者然
明和改元甲申冬十二月 須賀安貞拜替首識

神寶

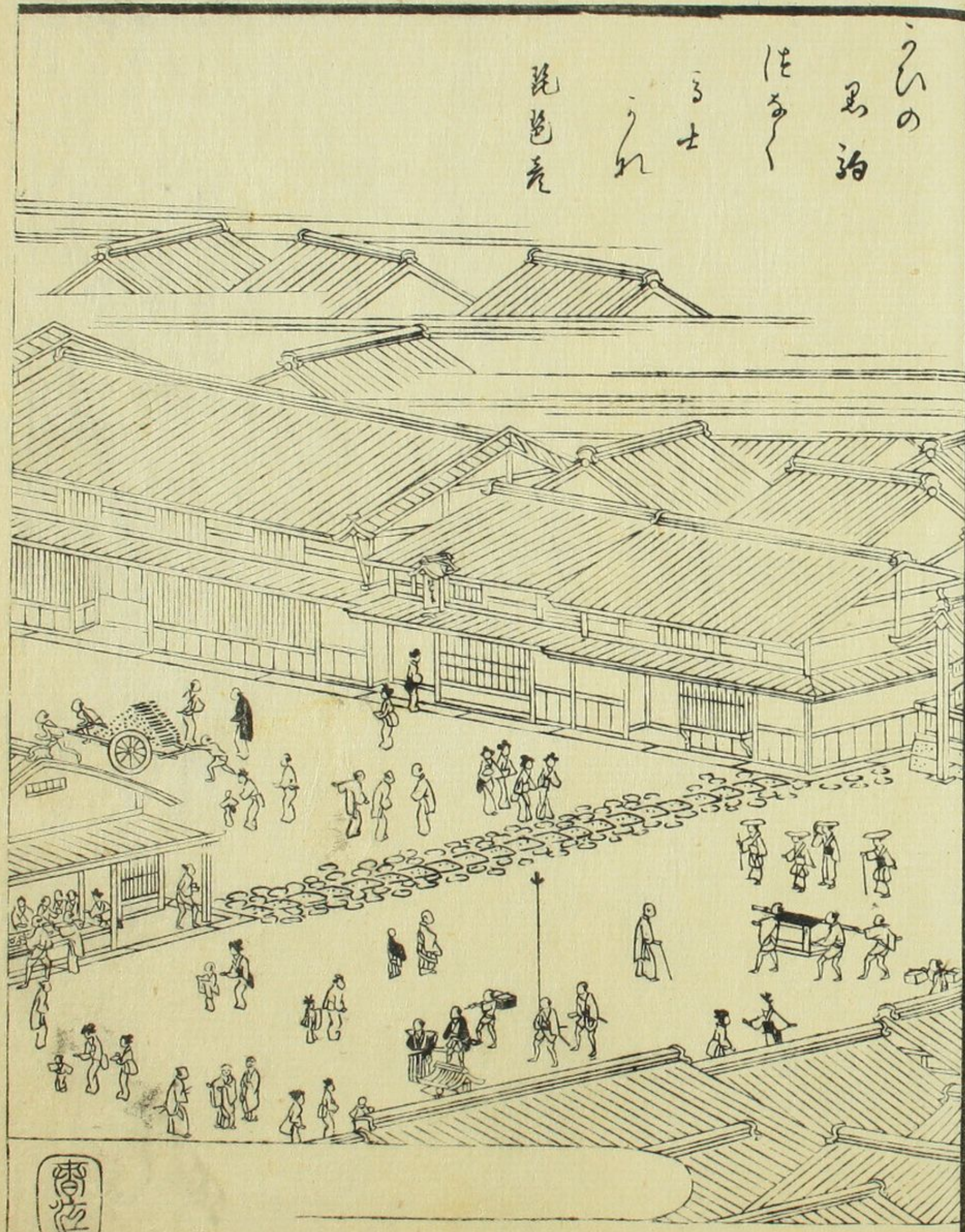
方丈佛間に安置せし十一面觀音ハ唐佛此銅像也又菅公十一歳の神時
書一天神縁起一卷との外 例祭 二月廿五日 神前に木船若と轉讀し繪馬
古書画古佛像等多し 堂に神輿をかきし日府下の寺子供等我
かきし日府下の寺子供等我
道磨 俗稱田中庄名津のり道全と号し和孝に長じて万葉集等此古書に通達
美濃國多藝郡榛木村の人なりがうに移住して天明四年十月四日死去



加藤清正
石引の囀



古人猿猴菴遺囑了雅寫意



ういの
 君泊
 住さく
 三士
 うれ
 花巻産

香



傳馬會所
 札ノ辻

ひ辻れ
 おまぐの
 れま
 まちま
 乃

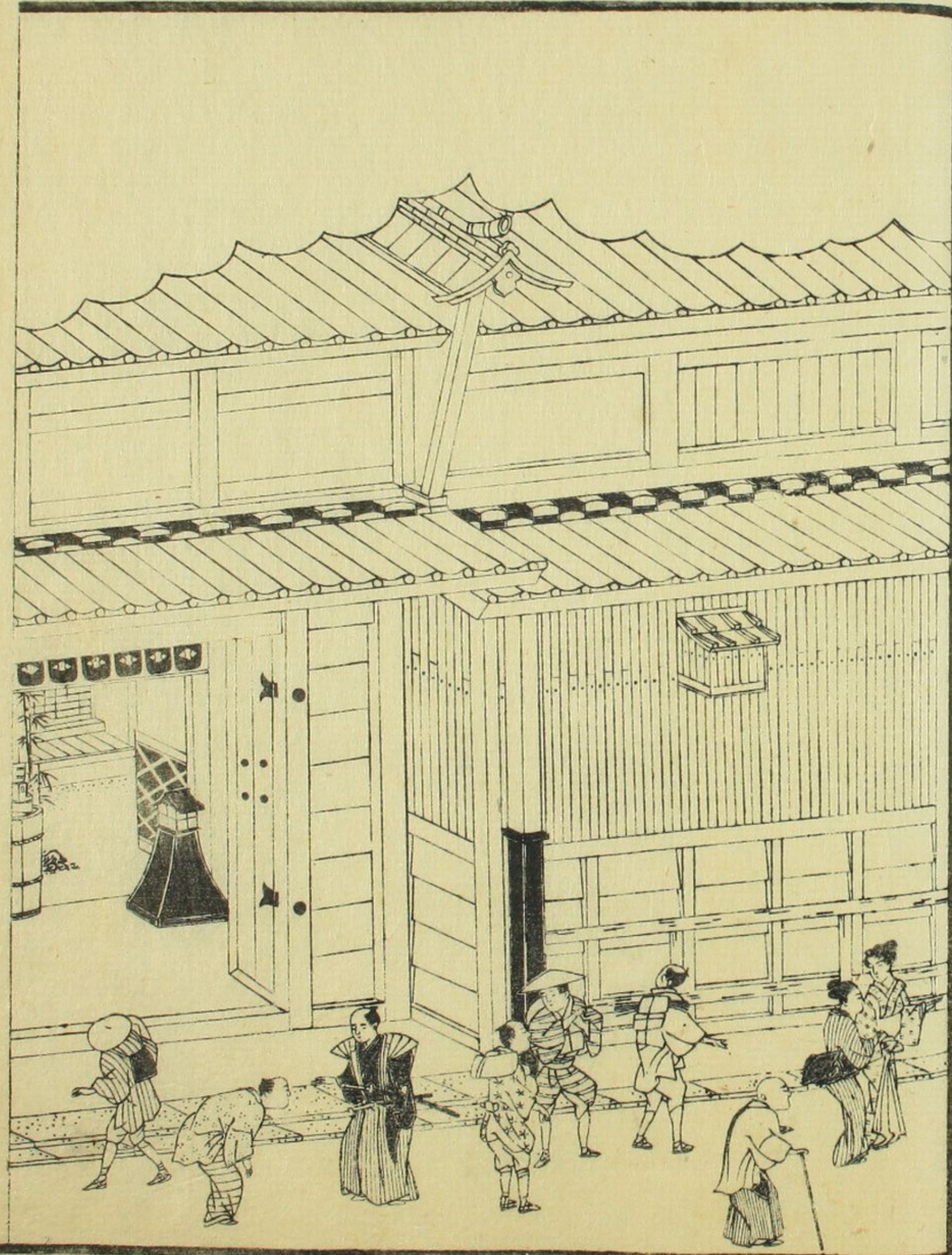
呉服店

土産店

叶
 叶
 叶

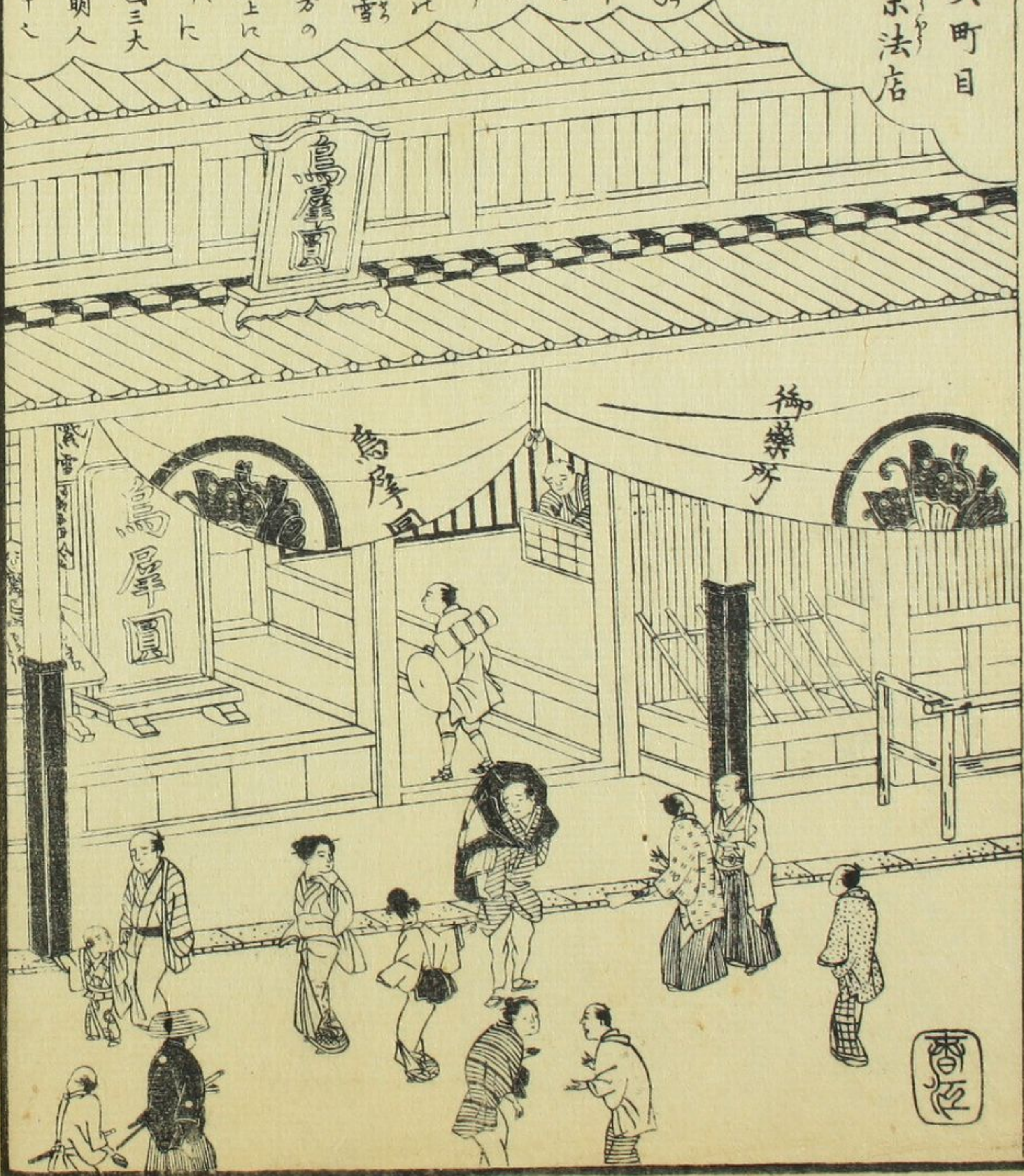
傳馬會所

飛騨屋



本町六町目
小見山宗法店

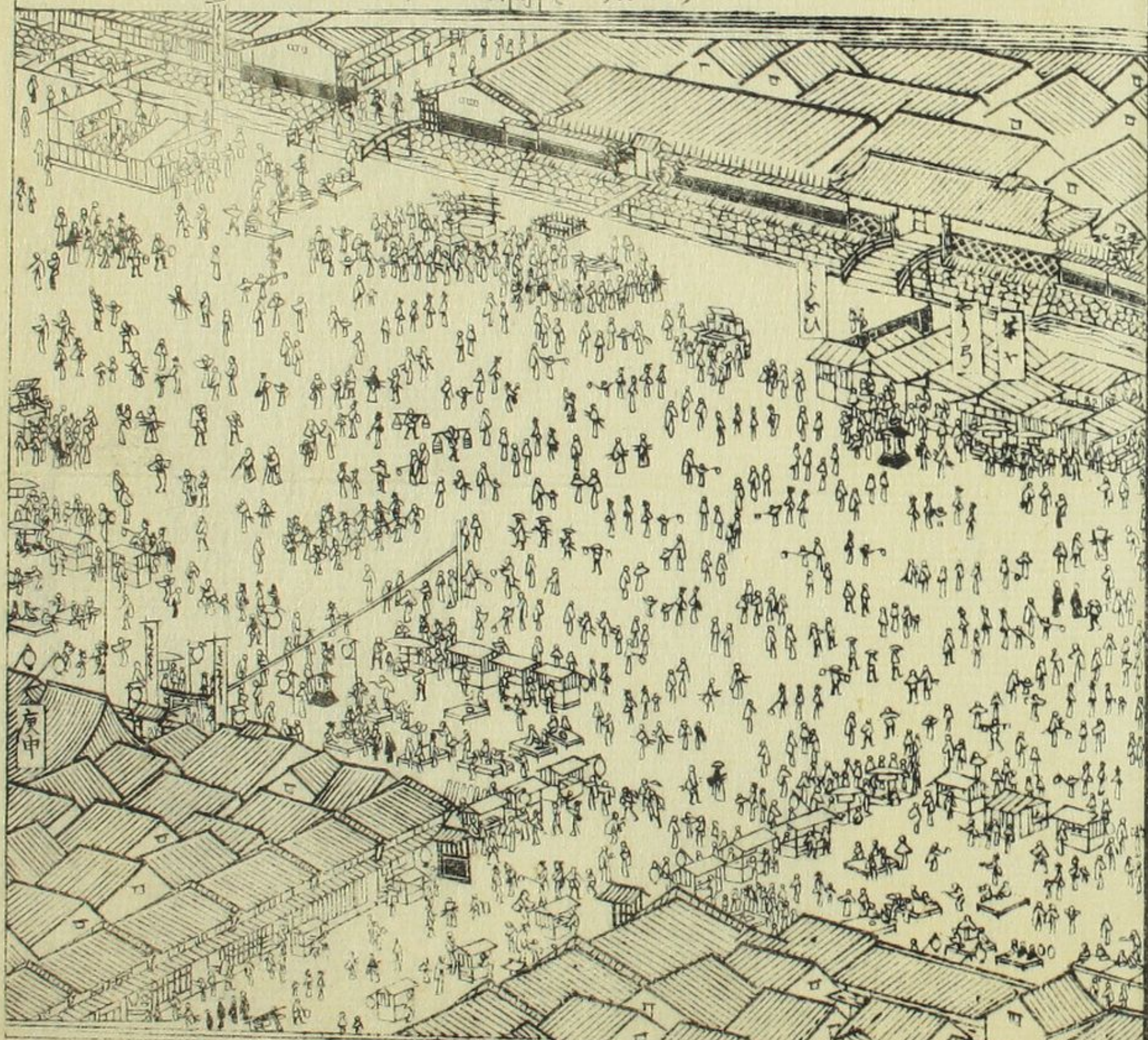
は家八代、
國君に極湯
一苗宇帶
刀と汗
の首魁
幕に賣死
鳥犀圓莖雪
等々御方の
秘藥や屋上に
掲げ店前に
主鳥犀圓三天
字は看板、明人
陳元贊の筆



香

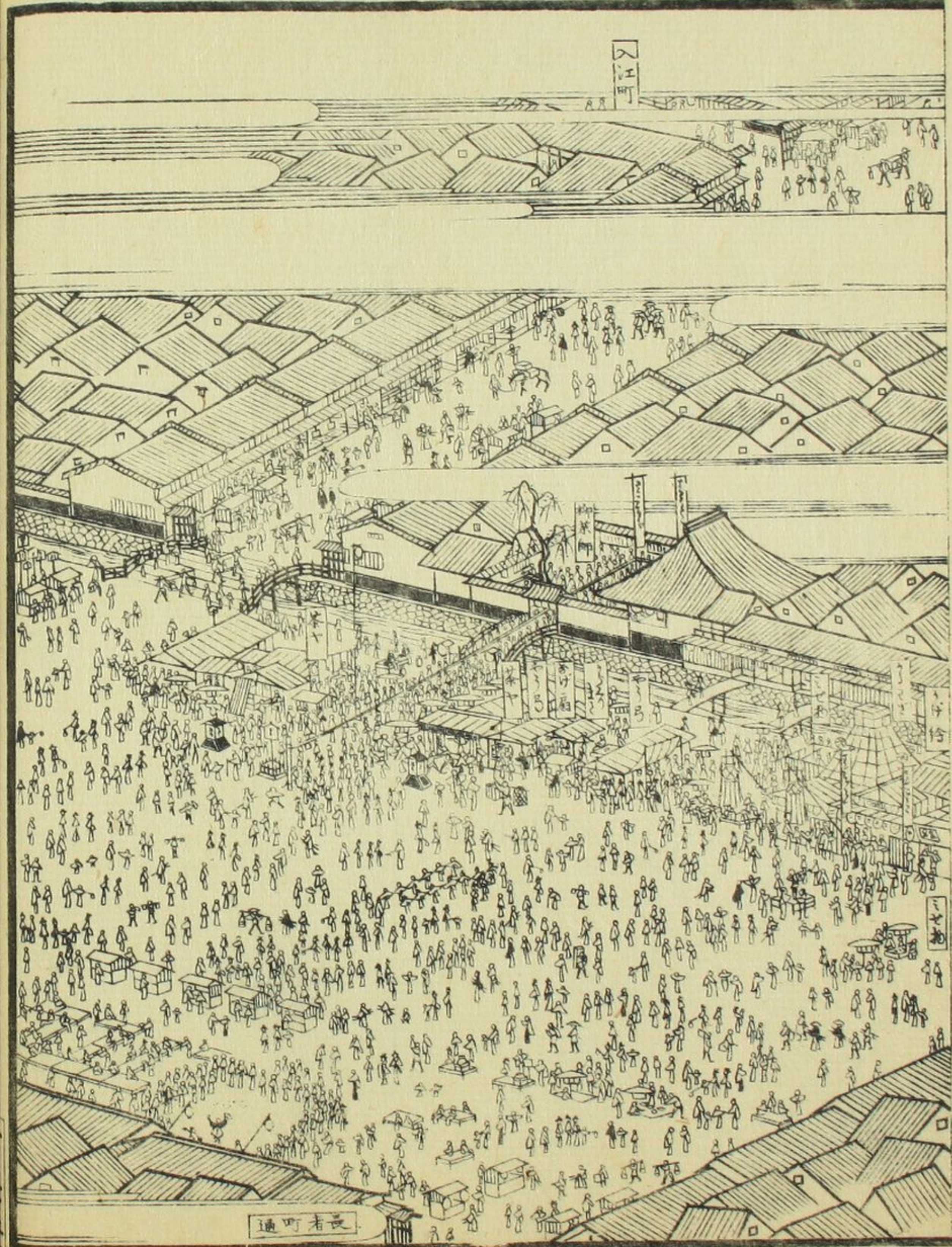
廣小路
夜見世

馬路
蕪株漫
遊録に
多の日
納涼の地
と廣小路
柳並みありて十坊
お茶をいじりて居
る所にて甚賑ひ
柳の葉所より
少路此色色江戸
西園茶研坊に
髪髻より云々

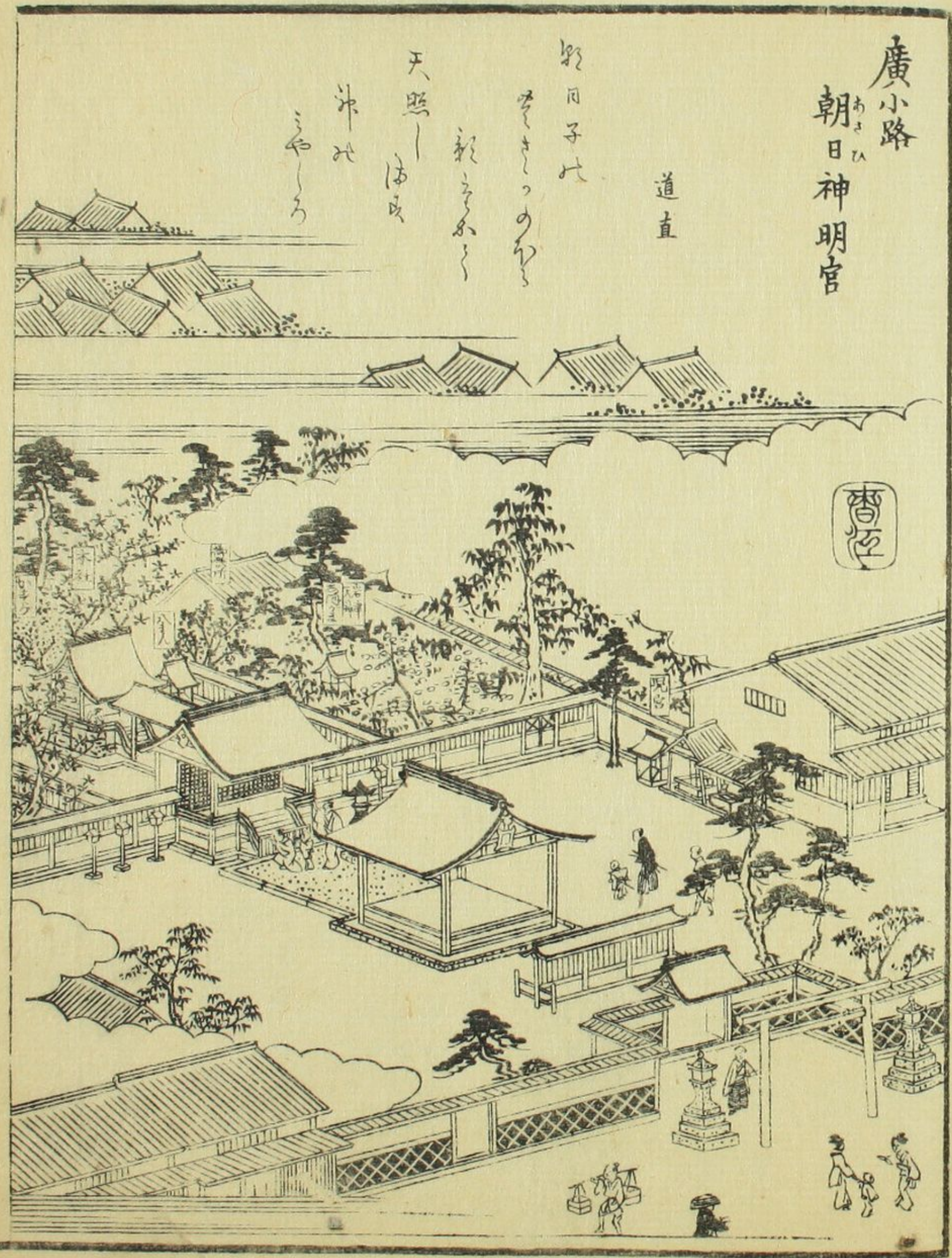


廣小路

夜見世



通町者見



廣小路

朝日神明宮

道直

朝日子

天照

天照

天照

天照

天照



廣小路

ひしな那古野北町とて是より南の方ハ

田野より故今と開帳札多く其餘

波うり東に庚申堂西に柳薬師などあり

もの諸見せお居合抜の歯をさし賣りて常にお

て往來人の足とむれり夏月納涼の夜ハ貴賤袖と

ついでて羣集して賣り夜店茶店の燈火赫奕として

遊興小夜の更夜と知らず實に夜陰の壯觀なり

古松山新福院

廣小路本町通の西にありて臨濟宗世小柳薬師と云はれ

せり毎年五月より七月の節

朝日神明宮

同七間町の本社天照太神天兒屋根命二座と相

殿にあはれ社とて春日井郡朝日村に鎮座しりて慶

長十六年御遷府の後此所へ遷せり

○例祭 九月十五日神樂 十六日湯立り

氏子の献燈ハ羅紗吳呂服等の水引とかけ門外の笠洋

すゑが華美と云はれ遠近参入の羣集言語もなかり

紫川 大久保見河石橋を渡りし小溝とあり 横三ツ藏傳光院の境内に古記五輪此

石塔ありし紫式部の墓ありしといひ傳へ其許と此溝川

の流るる所名付ありしと云ふ 紫式部の墓は古記にありしと云ふ古書より

女重此を鞠多に 叩きし川へ身と投げて身は死んで洗む小池 小池にて洗む

りく云々し今あり 別當の天台宗東漸寺 御興舎 拜殿 御供所 御井

御旅所 若宮横町にあり元和六年四月御造管毎年四月十七日御神祭に

若宮八幡宮 赤廣町の東側にありしと云ふ三の九天王の社此南にありし

宮 應神の若宮大鶴鶴尊 仁徳天皇 小ましくして八幡宮も相殿

喜年中再宮と加へ給ひその後安養寺と云ふ宮寺となす

僧坊十二宇とありしと云ふ天王坊もその内此一宇なりしと云ふ

志し天文元年此兵火よかりて神宮僧坊ももろ焼亡

しけるを同八年再宮ありしと云ふ社記小見をり又延喜

神名式に愛知郡孫若御子神社名神とあり此御社の事

なりしと云ふ若宮と云ふに云ふりりげ小少え又牛頭天

王の若宮なりしと云ふは若宮と云ふに云ふりりげ小少え又牛頭天

るく且若宮八幡宮の祿年久しと云ふて普く人の志し所

なりし社傳に隨て強て私意と贅せり ○本社 仁徳天皇 相殿

左應神天皇 拜殿 神興殿 末社 熊野社 稻荷社 山王社 例祭 六月十五日

右武内宿禰 聖十六日神興三の九天王社まで神幸神主 東帯 騎馬 供奉 母衣 夏二人 浴八

神 浴 旗 獅子 及び山車七輛あり中にも黒船の車ハ更にふかきりしれバ因して以て

想 傳 便 具 餘 六 軸 八 四 月 の 山 車 に 等 し 人 形 奇 巧 八 天 同 小

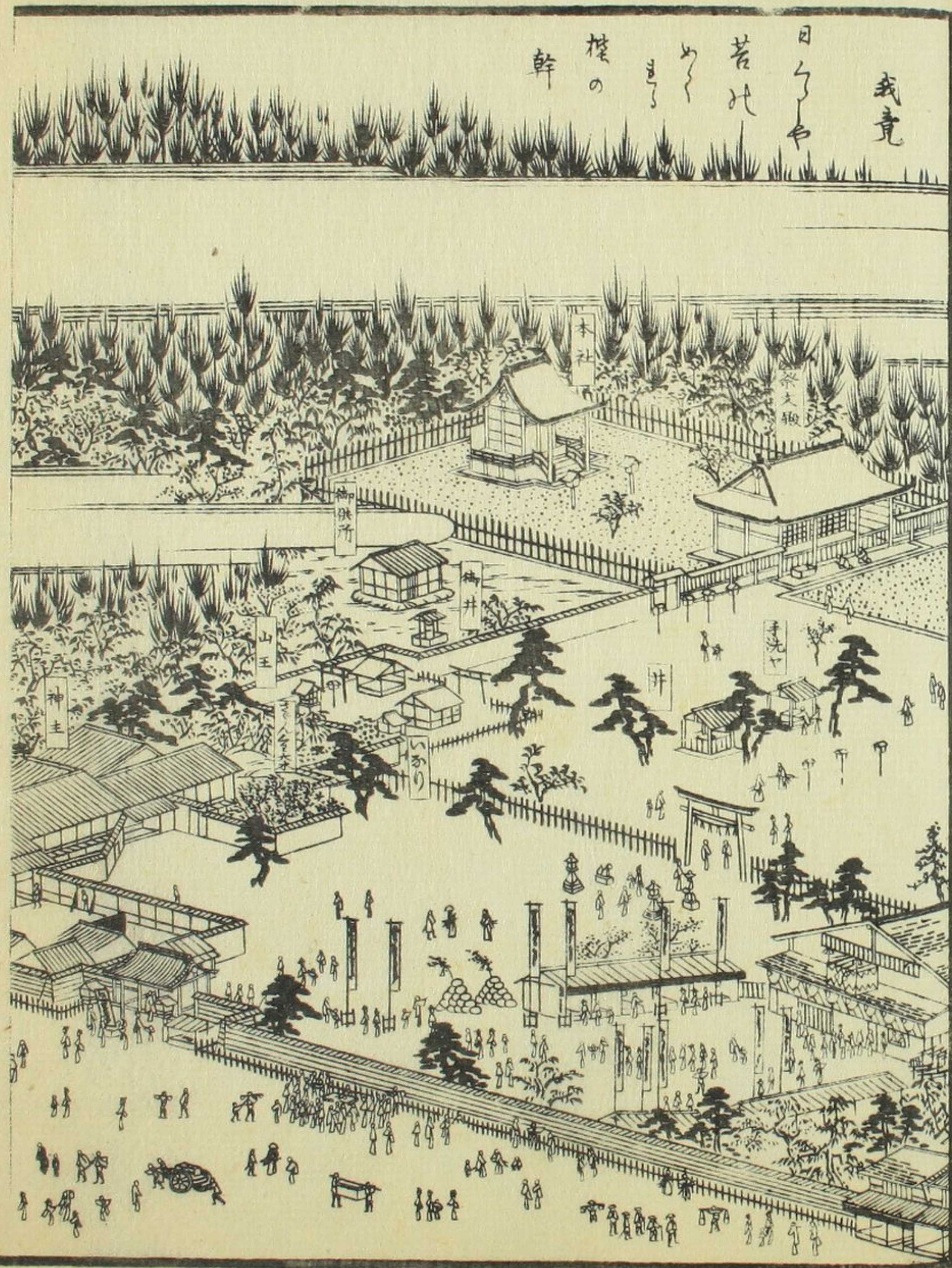
異 中 て 都 て 四 月 に 考 ら ぬ 大 祭 美 麗 の 行 粧 尋 常 此 神 事 八 月 祿 年 武

祭 け 八 元 祿 二 年 又 寛 政 元 年 に 於 ち 百 年 に 當 り 年 九 月 に 御 祭 式

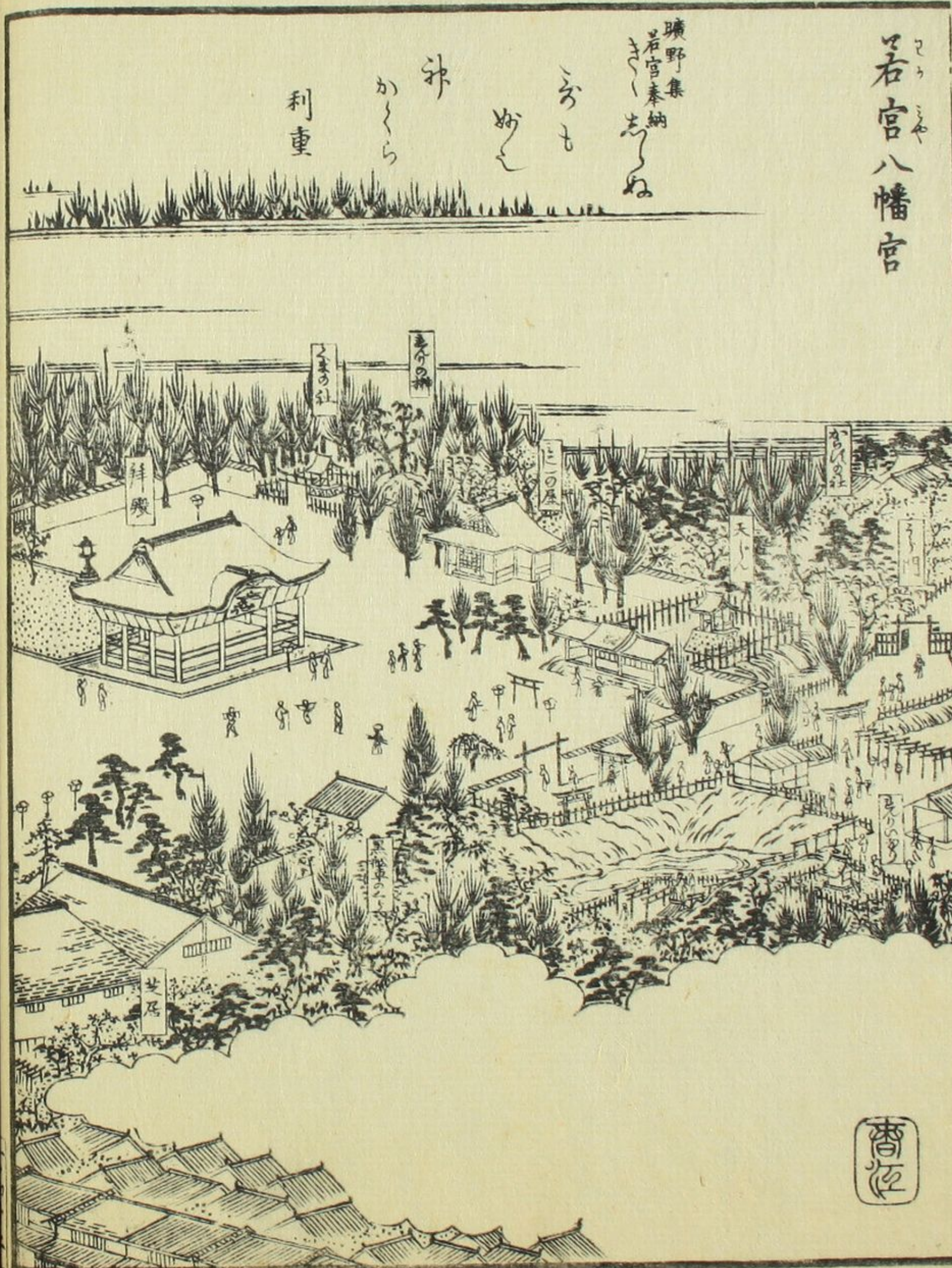
を 法 人 の ありしと云ふ 祠官 水室 芝居小家 堀内

仁徳天皇降誕至寛政元年巳酉凡一千五百

年城南若宮設祭奠陳雅樂賦此紀之



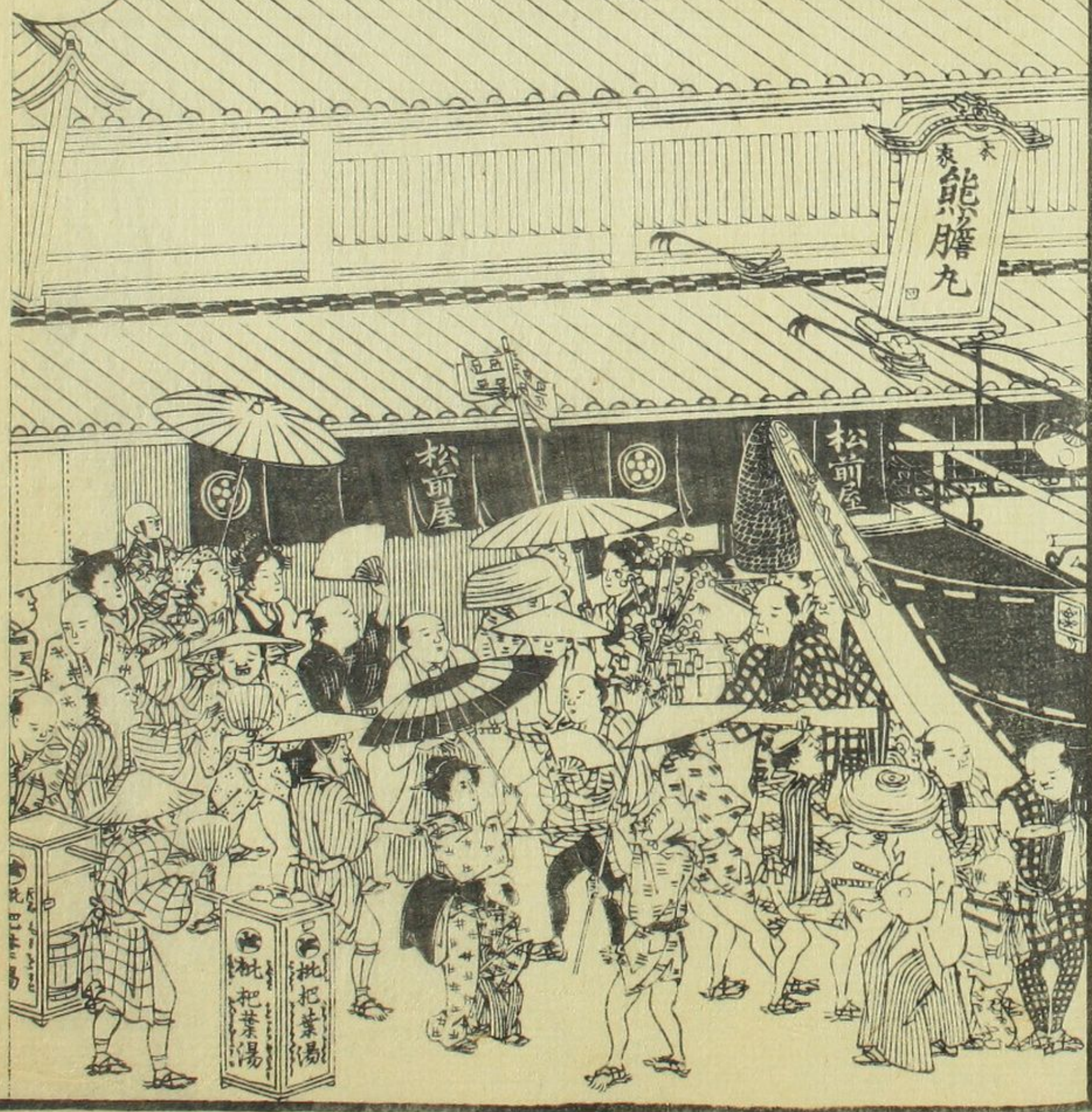
我竟
日々
若此
ゆき
榎の
幹



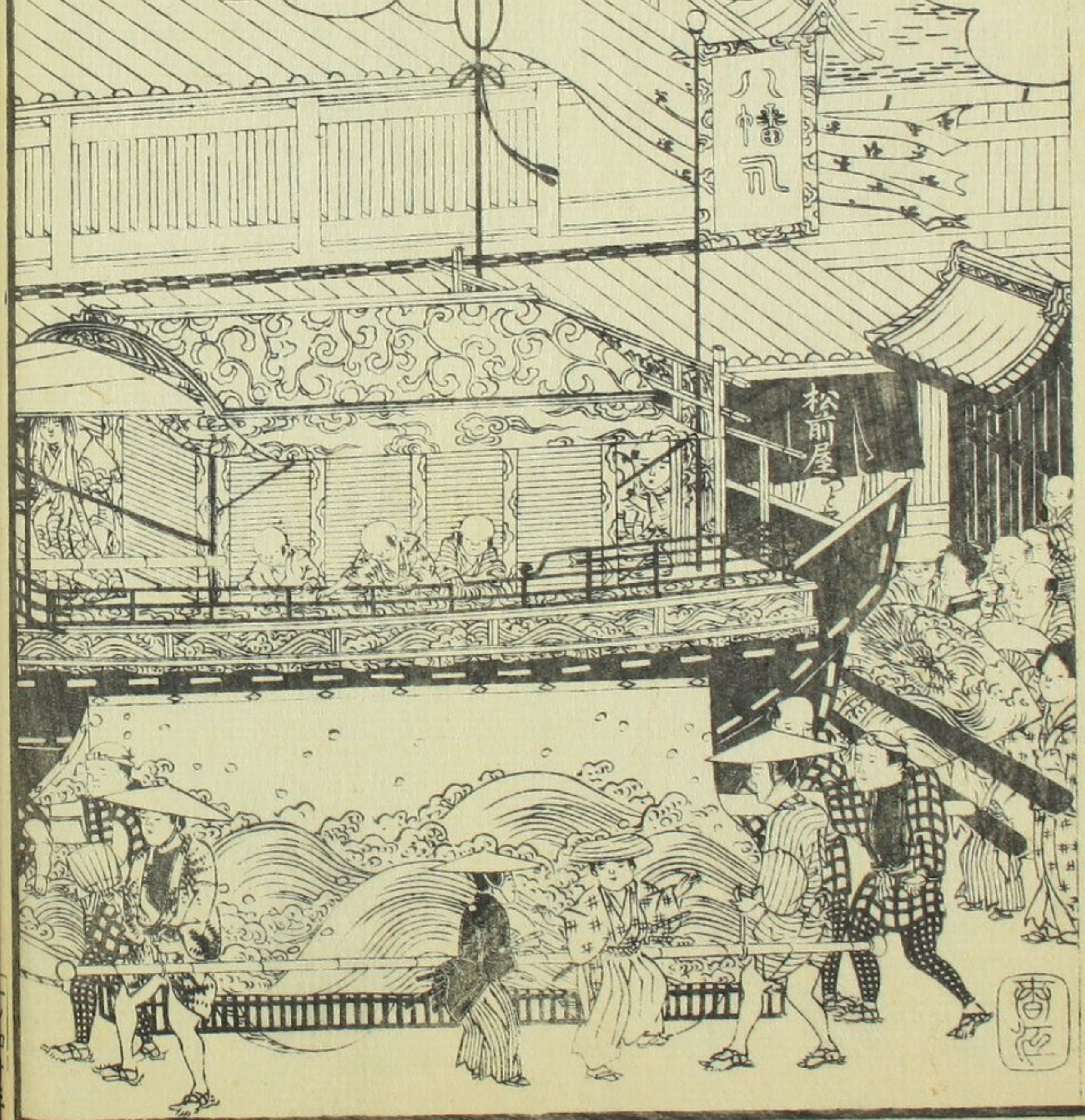
右宮八幡宮
磯野集
右宮奉納
きし
あし
ふも
妙
か
利重

香

と作
 笛太鼓の難
 一斗うま
 も花菱より
 て今ハ子供申
 樂の舞とあさ
 しめ又所
 船唄と
 け車 帰
 殺多れ 施灯
 としめて三
 とも一として
 引着るさぬ
 の水延ひの
 冥に五月の一



門前町
 松前屋
 店前
 若宮祭
 黒船車
 引渡十
 國
 當社に祭礼の寛
 文延寶の願より
 始り由若宮
 祭巨田記に見え
 りは黒船
 始ハ車長持
 の人に形



帝業曾羨統神靈乃在天
 本自每衣聖非唯讓國賢
 雁子歌相和梅花頌始傳
 甄子地營氷室開溝澆稻
 宣吉廟深松裡周墻列栢
 獨享祀殊顯若威儀更青
 慶初日浮簾幕流風迺管
 前殿角祥雲合階庭福草
 鮮太平多樂事援筆且成

上田仲敏

正覺山阿弥陀寺往生院 門前町西側にあり浄土 海東郡

新家村より移りて清須にありて慶長年中御

遷府の時ありて伊勢國多氣郡齋官村觀音

寺此僧信阿志願と興一寛文五年より信濃善光寺

の四給八願順禮所とて是は所とてなり三拾七

番とす ○本尊 三尊此阿弥陀ハ佛工春日の作服士ニ像ハ其体

像ありて 異形ありて佛像とも見えたりハ古き八幡の外 涅槃堂 元禄年中



阿弥陀寺
木佛涅槃會

の建立して長一文余の木像阿羅漢以下の八尊あり守夜神堂

年中の十王堂近年の塔頭源受院天正二十三年織田信長

波治部太輔義統と織清須の城に居り信長公軍兵と信

信友と謀爵義統の嫡子義銀と取立清須の城に居り尾

張屋形と称す阿弥陀寺の境内に一字と建立

大雄山性高院同町東側にあり浄土天正十七年 三位中将忠

吉君その浄母公寶臺院殿の菩提の浄母に武藏國埼玉郡

忍庄持田村に浄建立ありて正覚寺といひと忠吉君當

國と拜領し清須清須を城とし此寺とも清須小

寺領清寄附ありて慶長十二年三月五日 忠吉

君江戸少々かゝれしを清須に増上寺に葬り其浄

法号性高院殿と奉りて今此寺号に改め慶

長十六年浄遷府の時こにあり中興関山ハ満譽玄

道和尚あり○本尊 阿弥陀の立像 左右観音菩薩 寺寶 忠吉君御影像 幅

稱讚浄土經一卷 中將 姫筆 金屏風二雙 古法眼 元信筆 繡涅槃像一幅

比類稀なる大幅の例年涅槃會 塔頭稱名院 慶長十六年清須

二ハ本堂に掛置て諸人の結縁とす 塔頭稱名院 慶長十六年清須

樹り一行院 堂の本もハ北殿司の古跡あり

花臺一雨灑平蕪隔郭人烟忽有無清賞漫憐康樂 滄洲

句則遊何假少文圖簷前芳樹春相映檻外歸鴻暮 自呼閑坐更聞談浄理觀知長日在須臾

寛永十三年朝鮮人來聘の時性高院と三使の旅館とせ

と權輿とて來聘使通行毎に必は寺と休泊とす府

下の字士松平秀雲并出島臣此數輩韓客と贈答と

詩文垣麓集三唱和蓬左詩歸昆玉集後編等にの

せし名古屋客館の作ハ皆此性高院の唱酬なり

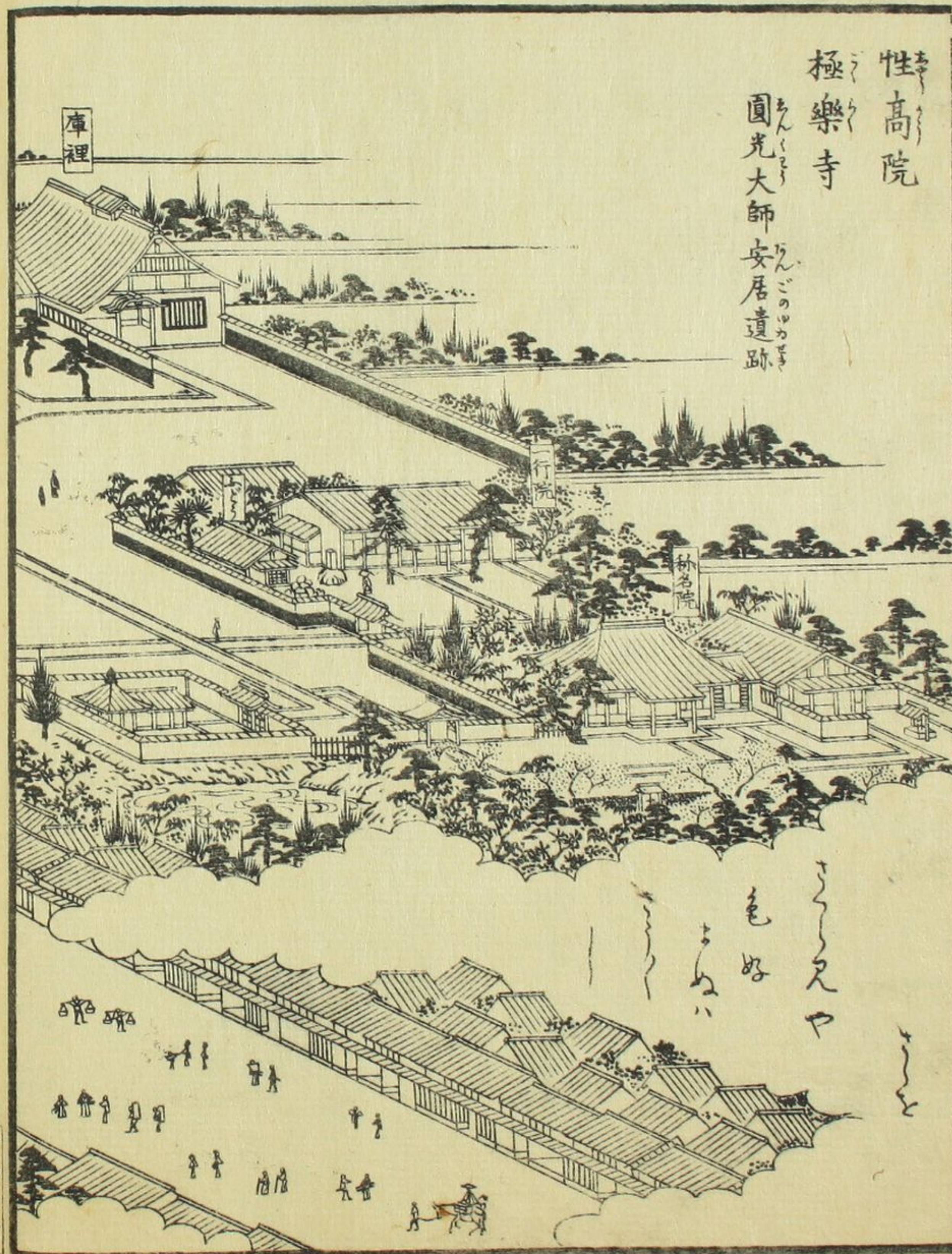
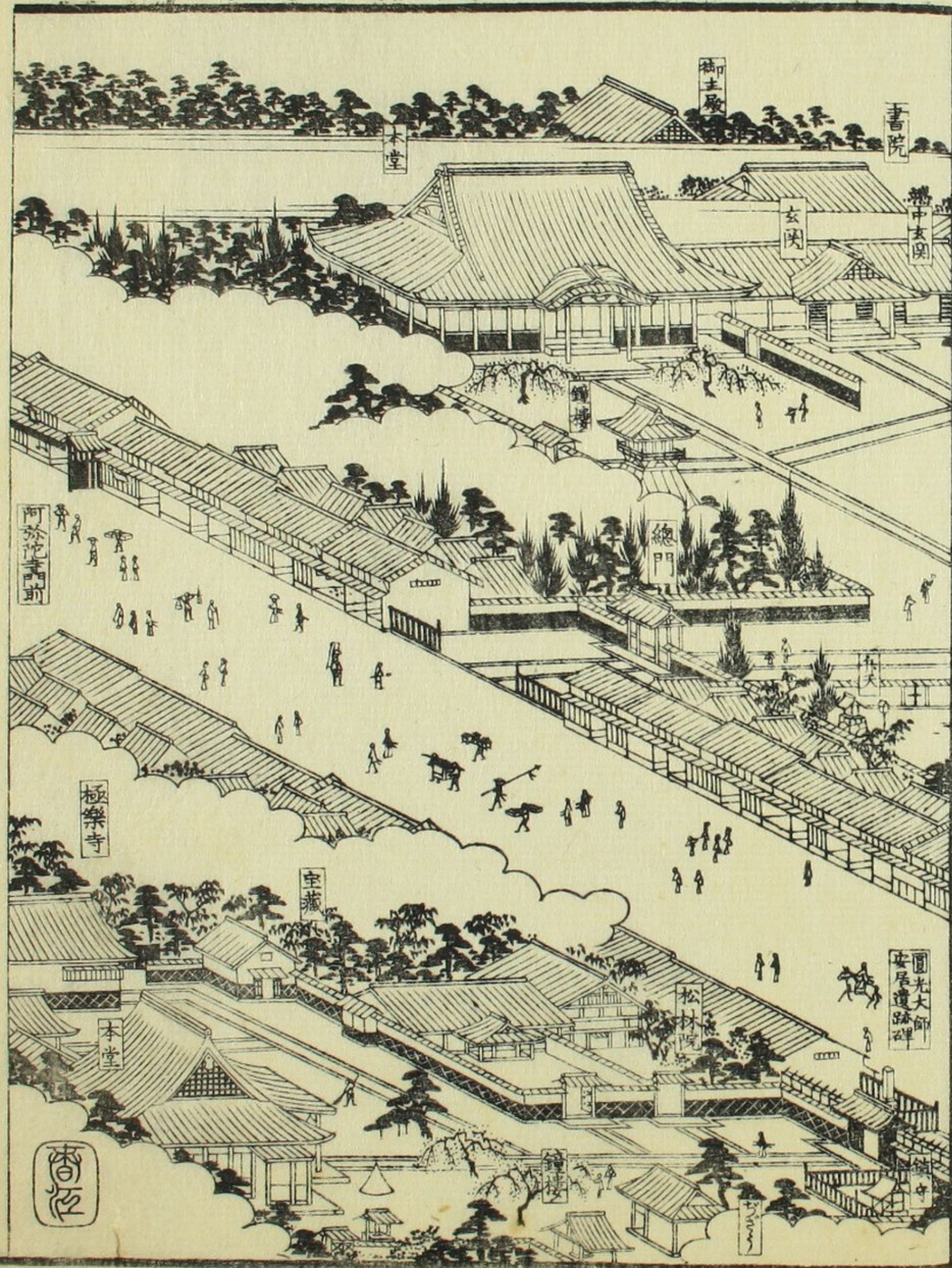
甲申二月三日朝鮮國信使宿唐下與諸子會

自開使星指東嶽首以俟若歷三秋今七皇華無

恙獲臻弊邑奉接清標何喜如之僕姓源名秀雲

字士龍號君山別稱蓋著寓主人族曰松平氏乃

張藩書監也茲日奉命小相賓館獲蒞清華幸甚

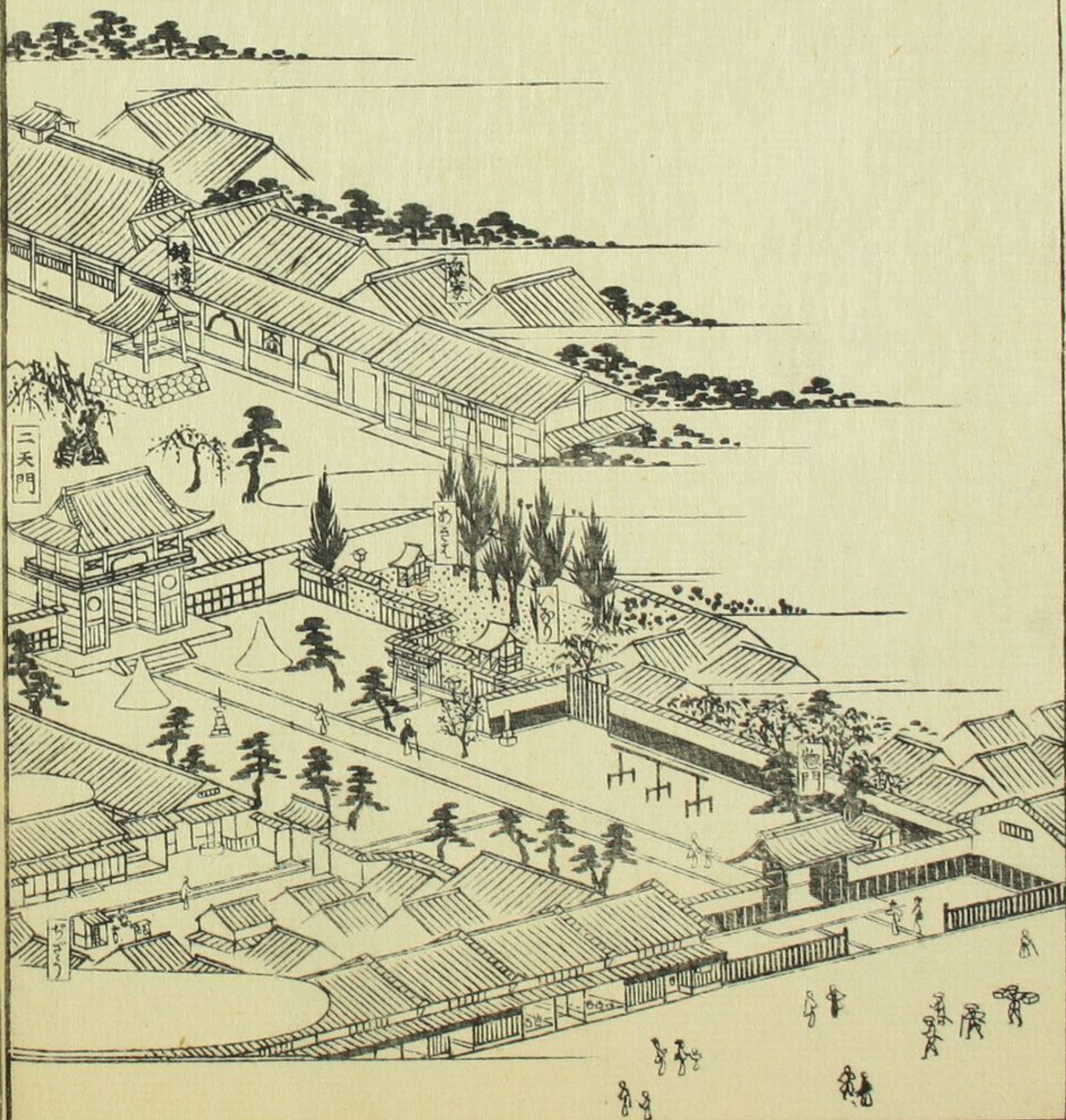




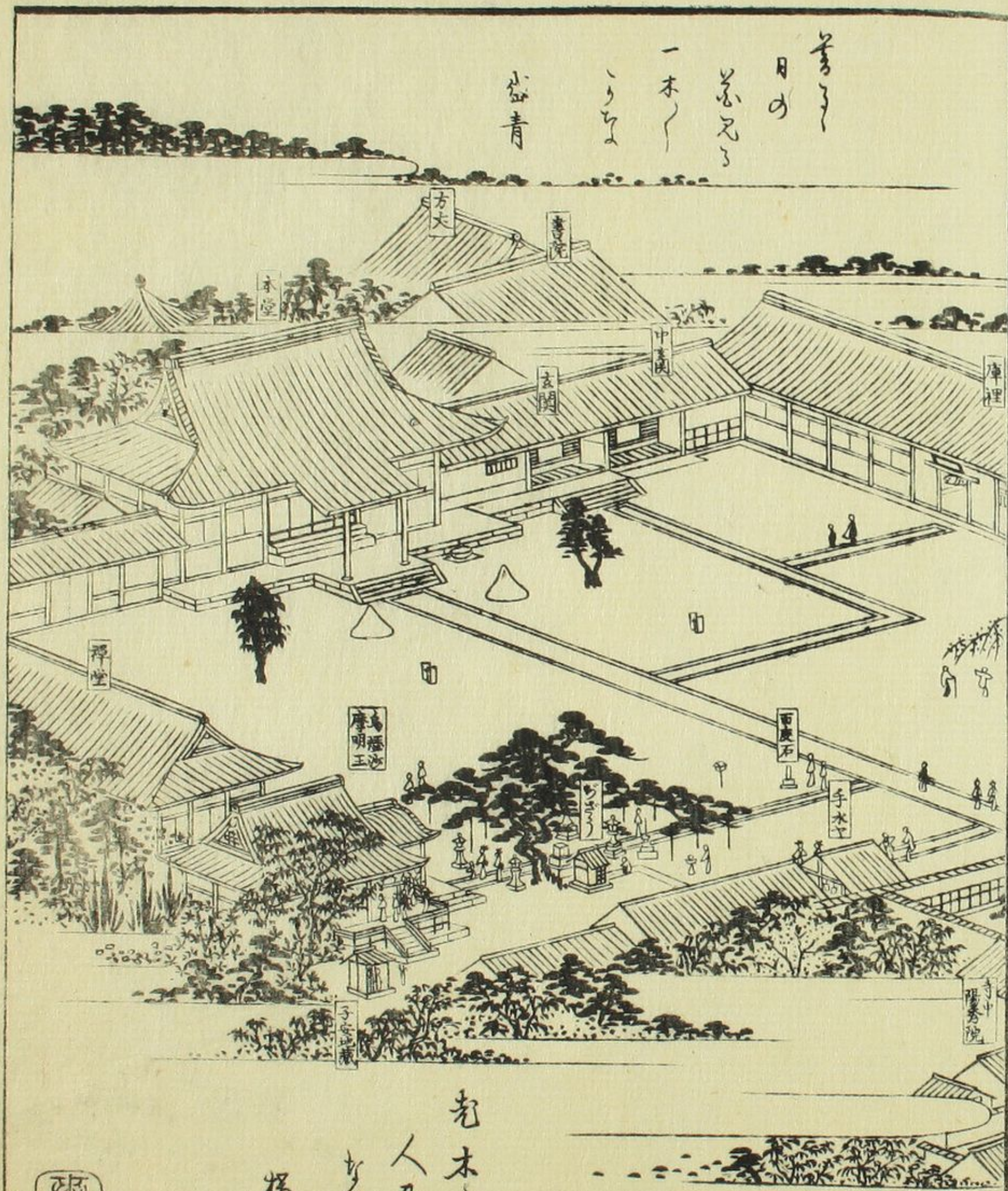
大光院

好惡萬般因
 所思月花禪
 室西相宜月
 花興盡人歸
 去花月領閑
 落後時

大津常辰



善
 日
 一木
 山青



老木
 人乃
 松兄



大光院烏瑟沙摩明王



孝行が道徳堅固なりて眠る事と好まば昼夜とくく候
 端坐して道と修しは色バ道徳顯はる萬く死期と去る
 種く此靈異と示して慶長十四年二月廿八日遷化すこれ
 有りきに 東照神君明嶺と帰依し候に 忠吉君も同
 く帰依し候より厚く御し候に清次に招清し給ひ
 候と云 忠吉君御逝去の後大光院殿とせしは明
 嶺和尚が奉りし法号なりと云く慶長十五年の清廷府
 の時名古屋日置の地にうつして日置山大光院と改号し
 けり又今の山号に改む寺候ハ 忠吉君の御寄附あり
 ○本尊 釈迦の本像 靈寶 天竺貝多羅葉一枚 出山釋迦像一幅 寛政三年殿
司の 觀音像 收漢 達摩像 周徳筆 二天門 の建立ニ
天の像ハ春日井郡鹿田村仁昌 光石地藏堂 牌堂 烏瑟沙摩明
寺の觀音堂に在り古像なり 王堂 境内に在り此明王ハむかし教書にちりてとくくの不浄を清淨
小改り候は神通傳りまはす候と云く機師金剛經に云く

毎月廿八日と縁日として、清の法人羣集とす。又一切下部の諸病を
大樹の塔頭陽秀院 大光院二世大庵の弟 石地藏尊 陽秀院
腫物其外一切の諸病を祈願す。時、孫に紙を授け、愈ふ時、其紙を
東海鳥門登者、慈是魚龍頭角南方佛刹到者、那勞
鳥窠布毛 大光院觀花 乾堂
老拙生涯作齋、儒世間名利、兩虛無僧房、日暮看花
去嘯、吸胸中、与俗珠 大光院の橋、八重とす

狂哥楊枝集附録
花よ名は大きく、わんの糸楊さりとて、も人そほせぬ、米都

醉中雅興集
笑けし花の姿、此母衣武者ハ、一ツ木回前、の糸楊さる、可吟

景陽山總見寺 同町東側にあり臨濟宗 當寺ハ、伊勢の國大

島村、安國寺 京都妙心寺直末 一と、廢寺の、

一と、内大臣信雄、又信長公、此菩提の為に、當國清、
一と、建主、忠藏和尚と、一と、住職、

禪師と、關山、忠藏、公、此法号に、據、景陽山總見寺、

名づを、ら、と、慶長の、清遷府に、わ、

山に在、城、時、山上に、一堂と、建、國中、此郡、郷と、惣見、す、の、意、
と、一と、彼堂と、惣見、寺と、名づ、け、ら、と、公、薨、逝、の、後、其、寺、号、と、一と、
法、号、と、ハ、

第三世の住持、關山和尚、ハ、道德才、学、拔、羣、

源敬公、清寵、遇、結、に、厚、武、夜、方、丈、焼、失、せ、

と、賜、り、正、保、元、年、十、月、廿、四、日、再、建、造、作、竟、

敬公、来、臨、一、給、い、長、臣、に、命、一、宗、門、の、耆、老、と、ら、り、詩、と、作、

ら、り、賀、一、給、い、り、境、内、に、古、杉、樹、多、く、陰、を、

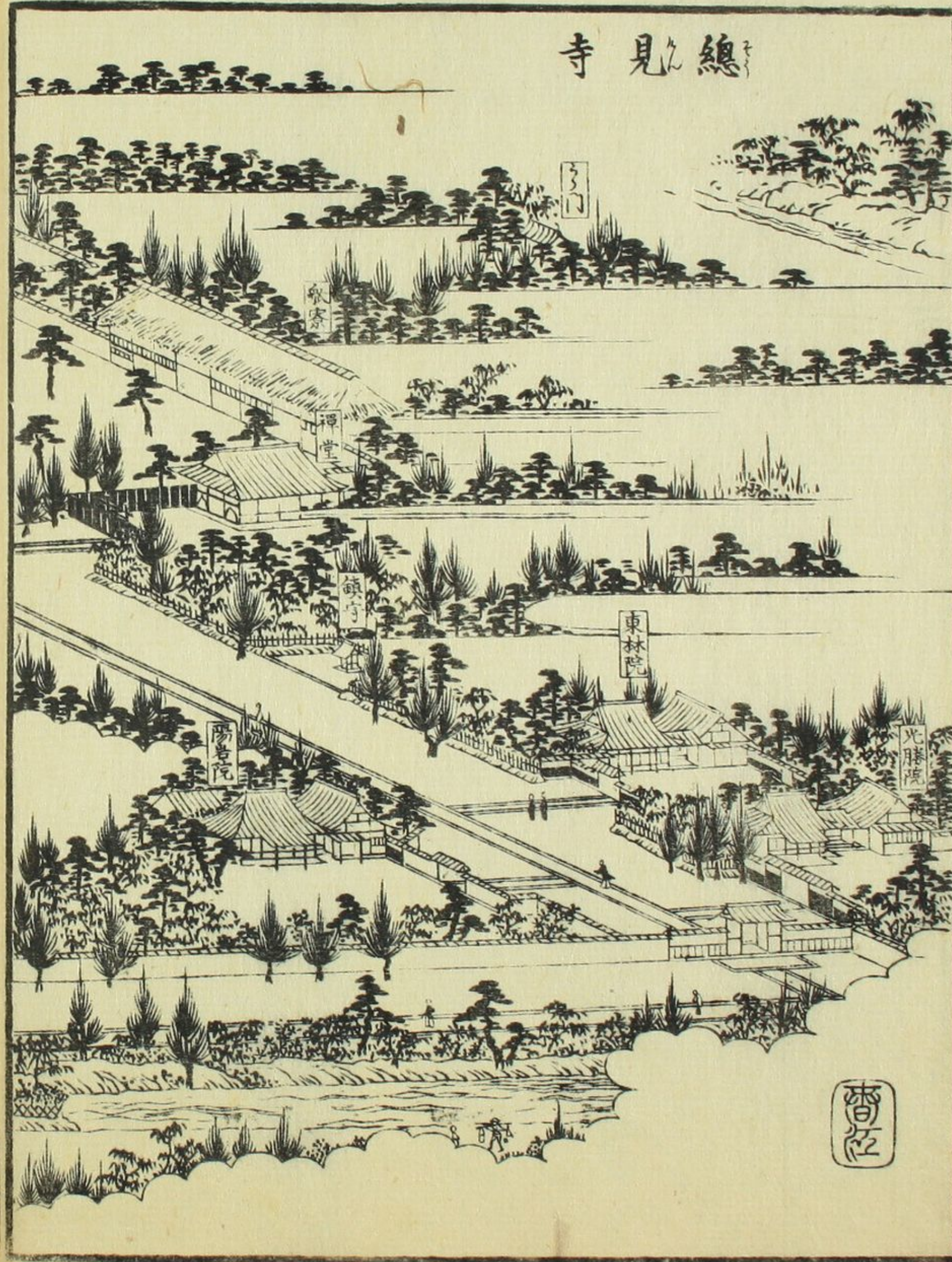
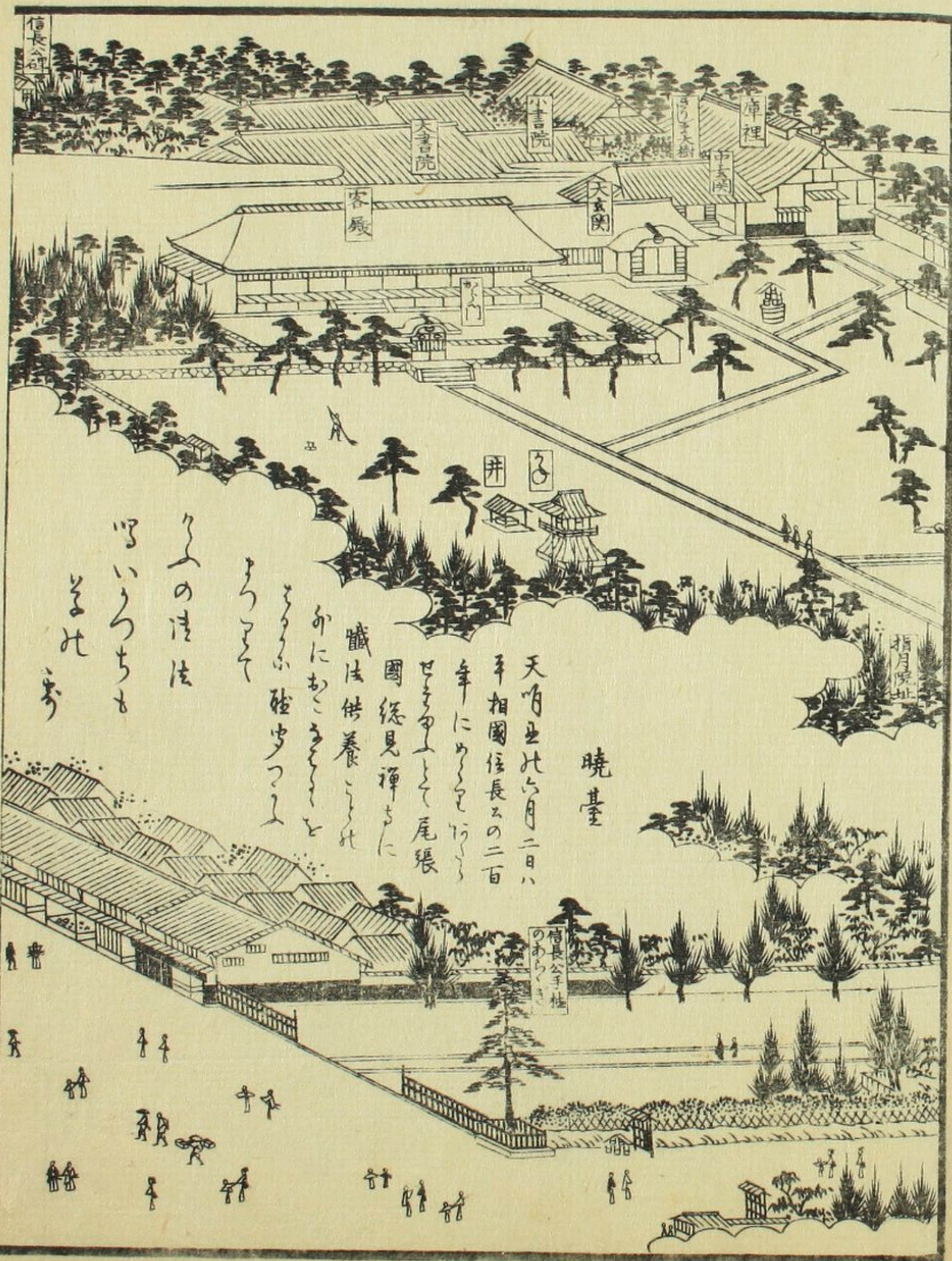
さ、空、に、參、り、禪、堂、に、雲、版、僧、寮、の、石、磬、も、自、ら、幽、凄、

寂、り、市、中、に、疎、ら、古、浄、域、り、○、本、尊、藥師の 禪、堂、

方丈鐘樓 信雄公大鐘と鑄ん 木像 鑿亂の世 財用、

古鐘と、今、に、塔、頭、光、勝、院 信長公此塔男信忠の法 陽、岩、院、東、

林院○什寶 信雄公寄附の信長公画像信雄公画像一幅古法眼元 信、華、花、鳥、山、水、四、幅、信、長、公、書、狀、二、通、秀、吉、公、書、狀、一、通、唐、



香印

総見寺閻山
和尚の古事

或夜和尚の方丈より
火をえ上りてに弟子共
走來り和尚と尋ねに
火焰の中に在りて
る夢に記と云て曰

天示火災三四更
忽然行脚可憐生
尋常慘似把茅漏
と作てて結句いまだあ
ざらに大雨志

きりに降り
猛火忽消
けさハ

烈焰堆中
夜雨聲



法眼梅山筆 東

とけぬ
けるは時
庫裏に
安置せ
章駈天も大
の法師と現
て火とせきり
小杉戸の画籠
をぬけて雲雨
と施せり
も道德の加被力
冥助とゆ
希代の靈應
はけハ火伏せ
とあるより又あ
れ章駈天もハ
像なり



画十六善神同十三佛画像 扉間禪師自画 贊信長公所持の硯同 龍の香爐同
沈香の枕 秀吉公作 安土竹の花 生延文元年の雲版 古銅鐸 信長公影堂
の額は 額ハ世にシテ繪馬トシテ 則信長公自筆の云ハドモのヤリトモ
中六世白翁和尚の摹擬トシテ 今も於世に名々トシテ 外什室 駿ヶさど
枚奉に 追行
流ぞ 畧しぬ

富士山 觀音寺清壽院

同町西側にあり山城國磯城郡の三室院の派
尾張美濃ニテ國の修驗ハ先達ナリ

尊富士權現ハ 土御門天皇の勅によりて 駿河の淺間大
神の神職此地に 勸清シテ 造宮ナリシヨリ 中世前津小
林此城主牧与三た其尉源長清富士權現と崇信シテ
七度と未詣此志願と發シ 三度駿河小下ニテ 登山ハ
アソク 晩年に及びて 志海に 堪ぐク 歩ク 四度と此
社ニ 詣テ 其願トシテ 其 其 砌當社ト 再宮ナリシ
トシテ 信長ニ 此 家臣村瀬左馬助の末孫 修驗トシ
アソク 大園坊トシテ 大正院及び此院と 兼帶住持
セシ 其子室壽院 國君ヨリ 當社の地ト 拜領シ 清壽

院の号と賜り

○祈禱所

本尊不動明王 威王 権現 後
行者 理源 大師と合セ 祭 行者堂

本尊正親善ハ 聖徳太子此作
夾侍弘法大師 後行者ニシテ
其 験 ありしヨリ 像ナリ
例年六月十一日 津樂ナリ 末社 稻荷 金毘羅 菅神
秋葉 福天 境内に 桂木ナリ
テ 盆持ニシテ 忌ノ 祓木 奇草ト 架上ニ 掛列シ 四時の春と
留シ 清観又ハ 芝居見ト 爲レ 小をアソク 花人の 輻湊ナリ
小 絶シ

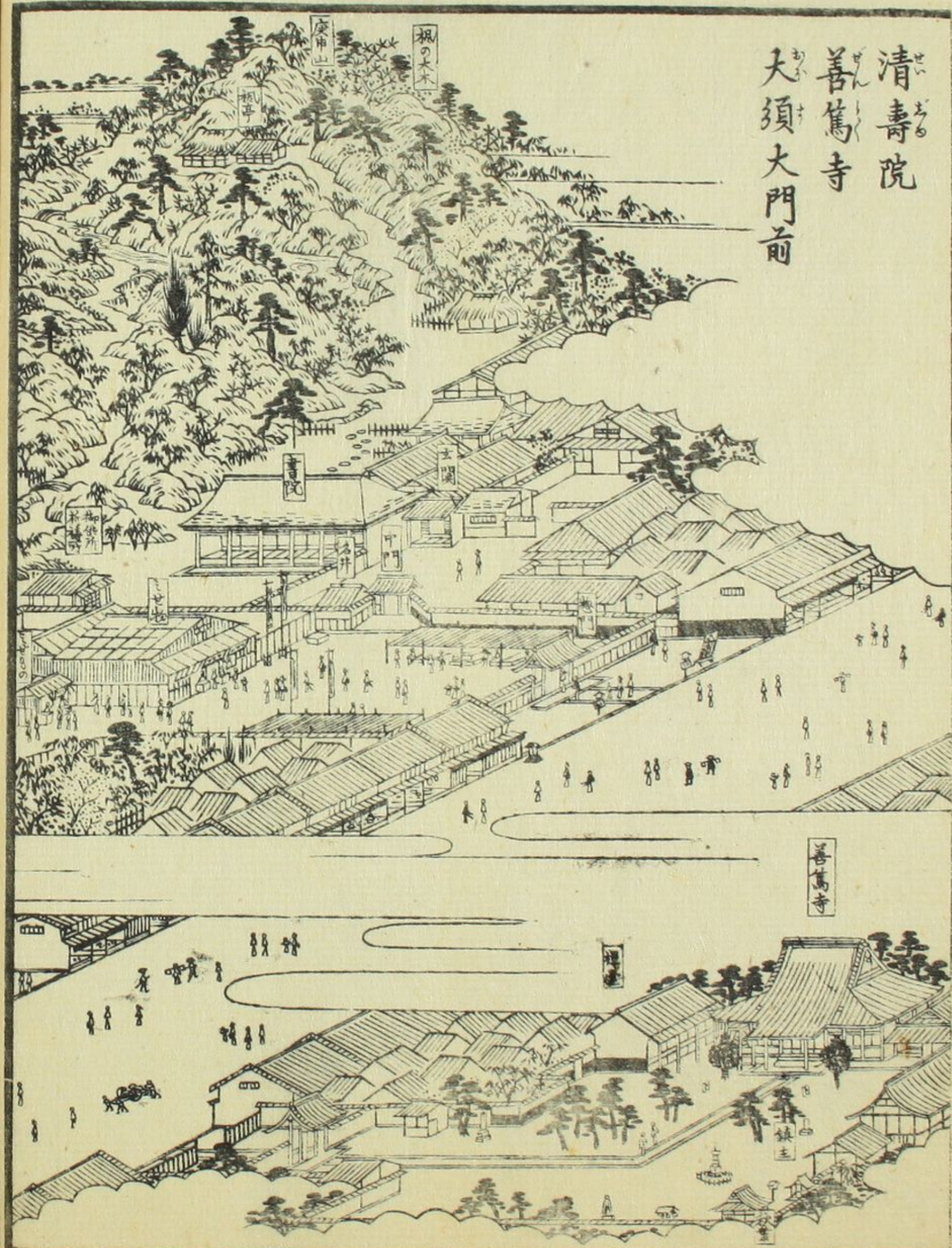
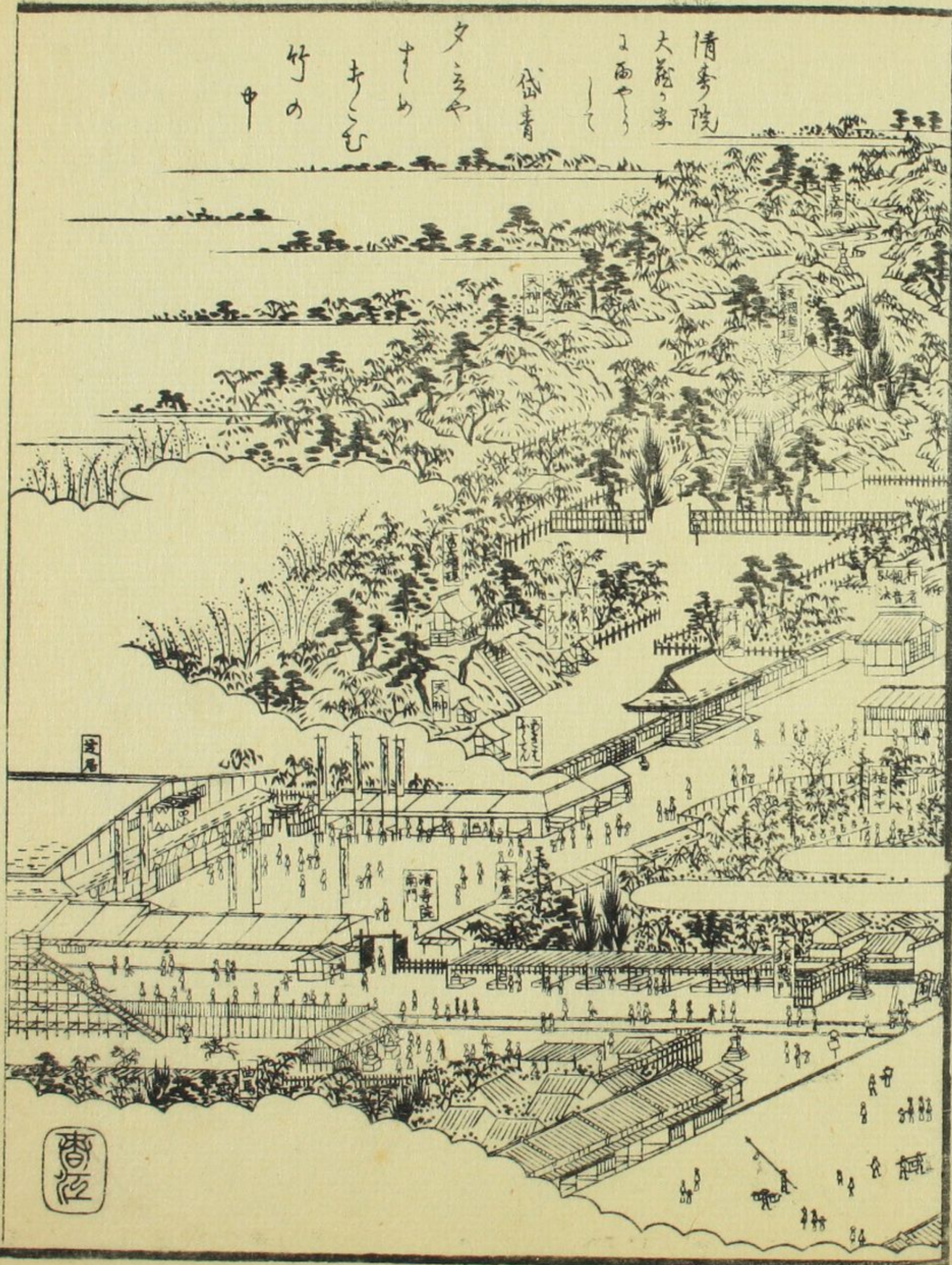
那古野山

清壽院の後園にありて 古木老幹 生茂リ 昔 逢 怪石 攀 廻リ
古色 隱シ 雅地トシテ 昔年ハ 面影 甚 俣 足ニ 是レ 小山ニ

北野山真福寺寶生院

同町西側にあり 眞
言宗 元本寺ナリ 伊勢大神宮此神

主従三位 度會行家の子 能信上人の 開基シテ 中葛郡
大須庄北野村 今ハ美濃の
國ニ 屬ス 今ハ 慶長十七年 東照
神君此命ニシテ 任僧 堯遍トシテ 今此地にシテ 今ハ
南朝の 正平五年十二月十三日 後村上天皇御祈願の 繪旨
と 涉ハ 傳ヘ 東南院ニ 品法親王の 令旨トシテ 後ハ 是レ 田トシ



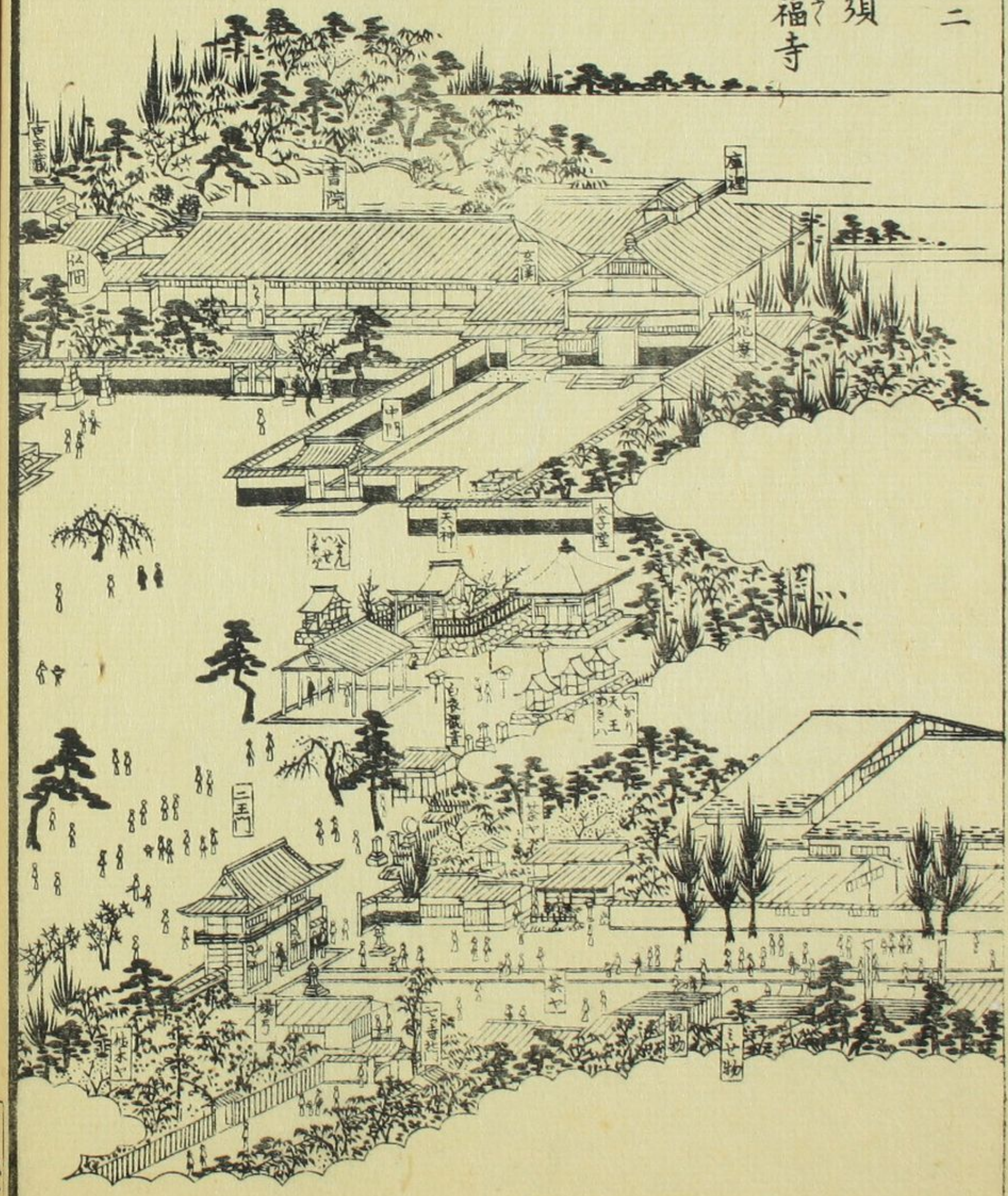
江天春色接煙霞
 梅柳凡香簷外斜
 池上携瓶先汲水
 檀中灌器好供花
 太平時節隨寬法
 安樂心身屬梵家
 瞻仰觀音大悲力
 無邊恩澤幾年加

無所得



真福寺に
 池色の
 納涼
 也有
 灯の影や
 ちの
 えの
 ひ

其二
 大須
 真福寺



宇文和元年 勅によりて拵は國四天王寺に正觀音の像
 としつて當寺の本尊と目ト 天皇の皇子土御門二
 品任瑜法親王第三世に任職しておがらげたる勅願
 寺よりしつて中世に騷亂に衰廢と信長公燈明田
 て北野に地と寄附しつて累年の水災に湮没し
 今今へのあへて遷りしつて

二宗と兼り其ニハ奈良の東大寺に別當法務聖法親王の法脈其
 三ハ紀伊國根來の中性院の法脈ありしを安養寺と正統と一國
 師の子子佛通禪師安養寺に任持しつて時日ごとくに大神宮にゆきて
 神告りつて觸穢とさかざり故に大神宮へ多分の諸人はつて寺にまきて
 今明皇此茶をとりつて其餘風の沙りしつて 佛通禪師遷化の時密
 教及び禪学は書籍少らず彼能信上人へ附与りし今
 兼集春の部にそは花と きんてよ移りしつて春の
 日此光りにあはる花のしつて雪とらんり ○本尊

大須奉納馬の頭

五月十八日馬の頭ハ信長
 公桶狭間の合戦ハ勝利
 して一國の志士
 ありとほひ即日
 馬の頭ハ馬と號と
 ありしなりも後
 移りし今も
 府下を盛つて
 田をかちつて甚
 多し又馬の塔馬
 の堂と書きて
 堂文字殊に我々
 の金韻行ふ似り



其二

十八日馬の塔す
 て翌十九日礼馬
 町に種々の工夫と
 凝ら互に輸
 新の奇の趣向とわ
 所と終日徘徊す五十
 人百人二百人と町の大小
 によろく多少あり其お
 けさ番番狂言の大仕懸
 うもの今ま一同て
 大意と示す



四天王寺の本寺とあり 二王門 五層塔 文政年中の造立ありて本寺に
 の作むる木像なり 五智めまの新作木像なり 三十三所観音堂 大日堂

鎮守天満宮は神像は近喜二年筑紫太宰府より御自
 筆に画せ給ひ北の御方及び昨君へ送らせ給ひ画像小

後醍醐天皇御崇敬のりまもも母庄大須の地にむさ
 了沛建立はらへ 舊社之 今も北せ山より大須へ 例祭ハ

二月廿五日寺子供大文字と奉勢一拜殿及び書院の
 小展観一諸人の目と驚しむは日桜天満宮よりくま

アツ 數十町のる往来羣聚せり 八幡伊勢春日北三神
 稲荷秋葉天王の神社側にありて給座あり

芝居及び見世場小屋未救椽ありて年中此興行

境内

絶ゆるりうく府下戸一に勝地うらぐ純中五月十八日ハ
町より馬の塔と幸納して新撰の奇観見おの羣集
又四万六千日此とあつたに境内に溢る斗の賑ひ
うり又堂内に傳ると多く掲て年々多々の雅致奇巧と
争つても自ら慈眼視衆生諸人結縁此方便ありし〇靈
寶牛玉 天竺靈山の牛のひび 牛玉經 卷一 牛王儀軌 世に稀なる経
一に宝物といはれり 心經 二卷弘法大 瑠玉集 天平十九年に書写せ
室生院の名あり 師の真身 唐王高名あり人
の付を 七大寺年表 永萬元年の書写後 空也誅 天治二年の
の作続羣書類 新修往生傳 仁平元年の書 高野大師傳 寛
従に入 東大寺衆徒参詣伊勢大神宮記 文治二 秘藏寶鑑 平
七年 應安五 弘法大師行徳記 貞和二 聖徳太子傳曆 觀應元 倭名
年写 類聚抄 弘安六年東寺知足院より名教より此書此表より成につく
の古書なり其より白拍子玉玉が注進あり此和名抄關卷に
須本和名抄と稱す 後七日御修法記 正應四年 權律師

寛信授灌頂於兩人記 元應二年以吉祥園寺上人 擲金抄 弘安
写後世の節用集 寛洞院僧正入壇資記 長元 徳治元年東
のめき書なり 寺結縁汀雜記 永和二年の写汀に灌頂此二字 梅尾上人像 文和
写 三寶院印可略日記 元亨三 高野山順禮記 貞治六 神道
集 永享五 孔雀經法 正中二 遊仙窟 文和二 章律通致章
年写 第二 文保元年東大寺 結縁灌頂私記 貞治六 如法尊勝記 保
六年法眼 正應記 元應二年成法 灌頂應徳記 應仁三年室生 西
寛信筆 院傳法灌頂記 文明十年権 應長元年具支日記 應長元年 應
僧都廣譽写 長元年於西阿弥陀院汀記 文和二 請雨經支度并卷數案 永
五年勝 新樂府畧意 寛喜二 仁王經法 建徳二年 本朝文粹 十四
の關本建 同書 同卷の關本正應 同書 十二の卷に關本真書より錢錐の
保五年写 表白集 延文元 文鳳抄 弘安元 麗氣制作抄 康應元年 醍醐
ア 寺結縁灌頂受者記録 嘉元二年 本朝詩合 文治二 明文抄

正安元年 御産御祈目録 嘉曆元年大 法師頼心写 弘法大師傳 應長八年 尾張國

解文 正中二年 八月写 將門記 義徳三年正月廿九日写 近世稲葉 通邦模写印刻して世に流布す 口遊 源為 憲作

弘長三年二月五日写 近年 模写印刻して世に流布す 阿弥陀經疏 嘉保二年 新撰朗詠集 元年 建治

の更書 聚分韻畧 享祿庚寅の 印刻本あり 類聚神祇本源 正安五年の 古 真書あり

事記 奥書に借請親忠朝臣一本吉田大納言定房卿被所望之間 依家君 御命書写進畢又一本書写之止之あり 本居宜長が古事記傳及 び平田篤胤が古史微問題等に引用す 扶桑畧記 古写 卷物 神祇秘記 三 世に名なき真福寺本古事記をり

神寶 群家諍論撮要 表紙に本朝無双 元弘書あり 大日本國現報善惡靈

異記 卷物關本中下二卷あり 羣書 類從に真福寺本あり 東大寺古文書 教部 本朝神 社記

社記 神祇の本縁 類聚既驗抄 神祇の事實 天照皇大神遷幸

時代抄 卷物元元集の 原本あり 勢田秘釋見聞 卷物 続羣書類 勢田講 式 從に入より

式 卷物 続羣書類 從に入より 神皇正統録 続羣書類 從に入より 古證文寄進

狀 寛元三年同四年尾張俊村が田地と寄進せし状を 凡當寺此 藏書 天平年中此写本とあり 數千部に古書籍又弘法

藏書 天平年中此写本とあり 數千部に古書籍又弘法

大師興正菩薩の真蹟南朝 帝王に勅書親王家に令

旨將軍家の制札等此より音代の珍寶甚多く

とあり

稲園山正覚院長福寺 同町西側にあり 真言宗京都 智積院を末七ツ寺と通稱す 當寺ハ

と正覚院とありて中島郡七ツ寺村にありて天平七年

行基菩薩の開基あり 光仁天皇の天應元年河内権

守紀是廣 河内國 菅田の人也 秋田城介にありて仁國にあり

奮里にのこせし 幼児光磨七歳に成り時父是廣と慕ひ

任國出羽に下らむとていひて旅立當國萱津の里に在

り重く煩ひて身はうらぬその時父是廣彼任終りて帰

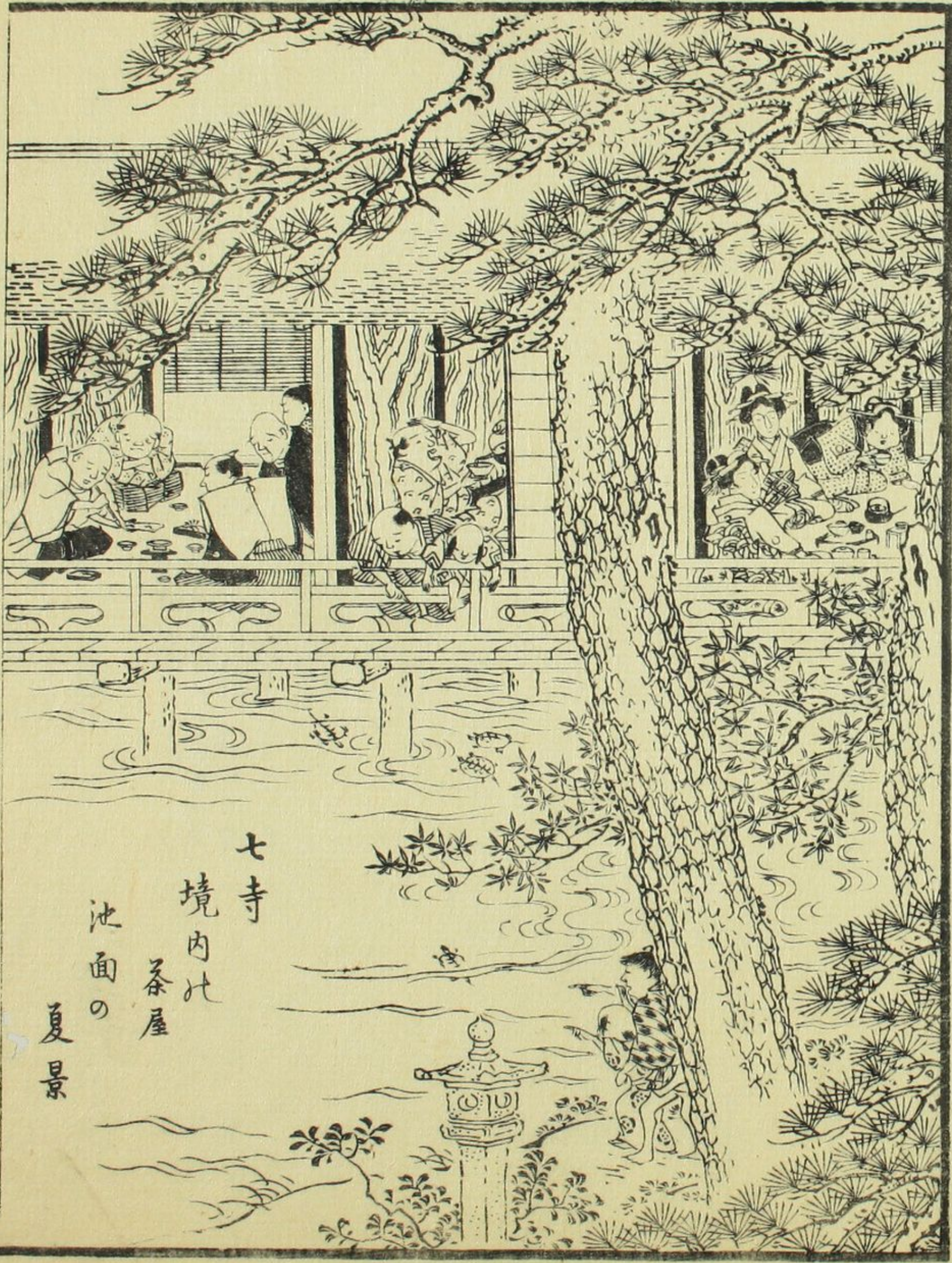
國より萱津に宿りて我見れりせりて遭ひ悲歎のあり

て正覚院より來り住僧智光に逢ひて幼児が片時の獲生

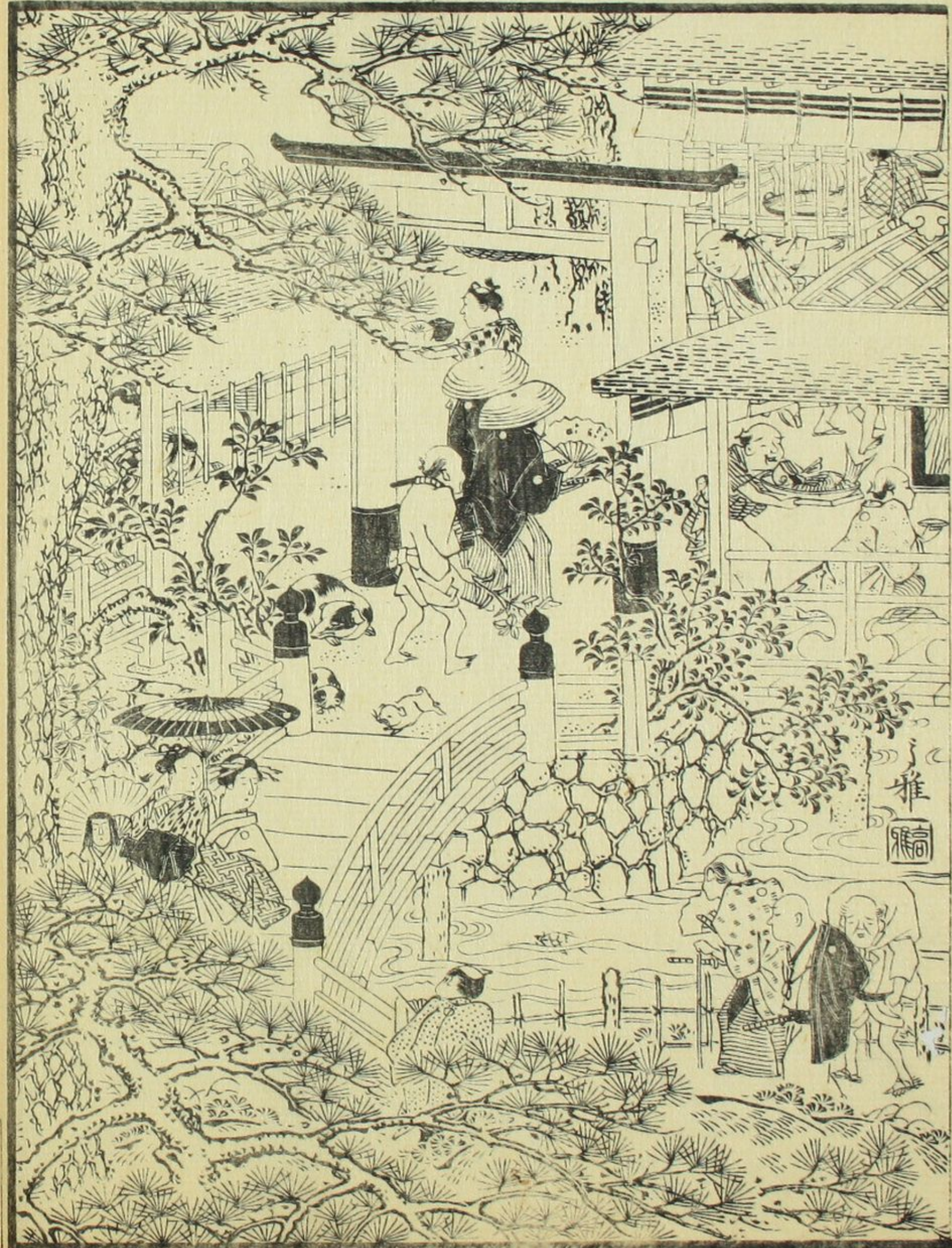
と祈りて終りてと乞ひしに智光憐れり寺に東より林中

小壇と封じ地と清り薬師如來と壇上に安んじ却死
 返魂香とつる名香とより醫王密法と修せり香煙
 児が面に掩ひ忽蘇生し父子名系る事と得たりさへ
 かみみ小愛慕此情と治らひあむくくわくく全死
 ういあくく正覺院に葬る追福の為に延暦六年十二月
 七區の佛閣十二の僧坊と建てる
七歳の七児うめに七區の佛閣と營みり
 七区に仁和三三年七月の水難天慶四年の兵火等
 糸すかいて堂宇衰廢せりと六條天皇の御宇尾張
 権守大中臣朝臣安長寵愛の女子仁安二年六月十五日
 身ゆりしつむすめが夫豊後守親實ももにさり
 てそとが菩提の為に彼七區に伽藍及び十二僧坊と再
 建し稻園山長福寺と改号し紀伊國高野山の支院
 とせりさく十五所推現と勸清し當寺護法の鎮

祠と多し又安元元年正月と治承二年八月まくに安長
 一切經と謄寫し輪藏と建て納めをり建武年中
 兵火に寺塔過半焼失せり清湏に任人鬼孫を馬吉
 久法名宗敬天正十九年豊臣家の命によりて寺と清湏に
 大塚村性海寺に任僧良圓と中興開山とせりと夢長
 十六年今此所へつりり○本尊阿彌陀佛觀音
 堂正保二年の建立正觀音及び二玉の像と安置す聖天堂冥驗著る住僧によりて俗脚の法と修りり
 十王堂延宝元年の建立地蔵及び十王の像ハ小野篁の作影堂慶長年中の建立と鬼
 輪藏舊蔵ハ廢して今此ハ貞享二年に再興り彼大中臣安長
古写ありて其奇品なり純中經唐櫃一合今に存り蓋に十六善神の繪を繪りるを古雅なり又其任寄附につる五箇條の清狀と其蓋に書き依り左の字畫比湯る文章の顛倒を多くして甚淺
くけきと古意と損らんと思はるるに影写す
 勸請 鎮守十五所推現大明神神寶前
 謹請 一切經安置間五箇條起請狀
 一 後々將來寺家不集來者獨竊不可開唐橫事
 一 後々將來雖族縁取人不可奉借出他園他境事



七寺
境内池
茶屋
池面の
夏景



雅
編

改号一 大倫和尚と開山し其後天文年中清順に

慶長十五年善い今此所へつて

今ハ末寺も十二宇は色に立つて

寺とある

宗源山浄久寺

善篤寺の南隣に即ち末寺の山竈首座の開基小

本尊 釈迦佛恵心 靈寶 景清守本尊千手觀音 悪七五佛

矢の根に彫り小佛あり景清の末葉古波に伝ひが家に於て

持永山光真寺

浄久寺の南に隣りて善篤寺末之僧元興の開基

本尊 正観行 薬師堂 凶惡の士ありて善師信仰の人此に

西本願寺掛所 同町西側 伊勢國桑名郡長島北門徒等信

證院蓮如上人に乞ひ

長嶋北杉江村に一寺と建立

上人の末子實惠と招待して住持して願證寺と名づけ

伊勢尾張美濃三箇國の小本山をうりて天正二年甲戌

九月廿九日門徒の一揆によりて亡され廢寺とありて

如上人内大臣信雄公によりて願證廢寺と當國清順に再

興り其のち又桑名郡本願寺村に願證寺と再興して

清順の寺と通所とせしと慶長御遷府の後通所と今

の所へつて舊号によりて願證寺と名づくも享保

年中本坊懸所とす境内に杉の大樹数株ありて春日遊

二子山の古跡

西掛所の地むら二子山とて春日遊山野とて

七面山妙善寺

福町西側にあり日蓮 天和三年僧日春建立して

愛智郡岩作村に妙禪寺とて廢寺此ありて其寺

号とらう 妙善寺 音便に下りて 名づく 延宝此らう

國君御信仰ありて 今に奉昌す ○本堂 七面の依ハ茶屋長以ガ彫刻して天和三年安立す

日置八幡宮 妙善寺北西隣之日置村北地う 左かく呼へり 延喜神名式に愛智郡日置神社本國神名帳に從三位日置天神と

千本松 日置八幡宮のものと信長公桶狭間合戦の時日置八幡宮に樹ら

無量山延廣寺 橋町の西側にある西本願寺直末常川掃部延廣の廟基よりて寺号といひ伊勢國長鳴にありて元禄六酉年あにらる

護國山東輪寺 同町大木戸際西側にあり黄檗宗山城國宇治の萬福寺末 寛文十一年唐僧千呆 安

の草創して即非禪師を開山して法嗣あり故大休とい住持とす

大休ありて退去し廢寺とせりて萬松寺と未判して高顯寺

と改む 今日置にあり 千呆和尚又愁訴して元禄五年再び黄檗寺と

ありて建立て東輪寺と名づけ江外和尚と長壽より清して住持

とす ○本尊 明人作れ釈迦文殊普賢の像と内殿に安立す 觀音堂 鐘樓 芭蕉堂 大施餓鬼

七月十五日乞と執行す好に名る

犬御堂法浄寺華光院 大木戸の南西側にあり 真言宗大須真福寺末 開山僧無閑 俗姓平氏

紀伊國高野山 あり出家す 修行此を先法園行脚し壽永年中此地より

來り身疲も煩悶して息絶むとせり黒白此二犬いて

草此葉に水と浸してとく來りて僧の口よりきくは

忽蘇生し心身快然とり此僧おとひるハ犬ハ高野大明神

此使者なりとバ偏に明神比加護うると知り且阿彌陀め衆

冥夢の告げしうバありて艸庵と結び彌陀佛の尊像及

び黒白兩犬の姿とらうとて安立し犬御堂と名づけしとぞ

真言古義に護摩壇側置黒白二犬是弘法大師始入高野山有ニ大尊

引故置犬像壇側とて名を置尻に高野四所明神の圖に階下黒白二

犬と西く見ハ空海弘仁中高野山と攀登し隙ニ犬有りと導きま

引箭と帶せり北人山とせし示す精舎建立此後狩場明神と号して

祭りてとせり此形を圖せりて密家の傍にありハ犬御堂も真言

宗の法也此為に本尊の眠ニ二犬とせりてとせりハ犬急に

一人に吠るを衣とくして引くハ一人なりと我とくせん疑ひるカ

東輪寺

東輪寺坐月

南源

東游草
一擊蟾官開鏡鉞無
孔竅東海轉霜輪十
方均普照露柱策眉
觀虛空開口笑賓主
會同堂松琴彈逸詞

冬央

能潜古渡集
八夏多や

あくらん

探此

夕附日



香印

東輪寺

芭蕉堂新成

士朗

城もも

みふやなけ

やま

むの教

黄山

人去く

泣ふき

色は

しり



とて犬の首と討たるに首樹上に在り大蛇の一人と呑んと取
に害附り一人は忠精とあり後りやうく犬と殺害せりやと悔かされぬ
小寺と建立せりやとあり附

古渡 曹府南にありや市莊古渡又舊渡ともかけし明月記云尾張國
舊渡者往昔海潮没岸之跡趾也予赴東方之時自鳴身到於此云

明日香井和歌集
むらさきの名かきぬ古よりまほせぬ梅ねる 春談雅經

日本靈異記に愛知郡片菟里に舊本今昔物語に愛智郡片輪郷に
り依ハ此古渡の古名あり又一女子村といひしりりむ富饒の
人七人のむすめあり或長の子七所へ嫁りし所の一女子
村といひし後世古渡村と改号す二女子以下は皆一也地名ありて
二女子村四女子村五女子村ハ尾り西南の方に今あり又三女子ハ
檜村及小塚村地内の字六女子ハ丸米野村に在り七女子今小村
あり戸口より小塚村より支死すて七人の娘が在りし地名今に
おこるありし七人のむすめは道場法師が孫女なりと傳へりハ則尾張
若狭久政利が妻

稻荷社 古渡の南に大見堂の南に西側にあり祭神伊弉册尊倉稻魂命
天津彦彦火瓊瓊杵尊孫田彦命及び住吉四大神の五社
國君圓覺院殿元禄二年九月十七日江戸四ッ谷御館山
御誕生より稲荷と生土神と改めし御崇敬あり

らと吉見刑部少輔幸和に命じ給ひて丹羽郡石枕村に
稻荷の社とすにりり正徳三年四月廿五日遷座す

免後へり○末社山王社 本社の北の方にあり本社と
同時に清瀬ありつす 五條天神
社 本社の南にあり本社と同時
その外の末社殿宇小八園上に
絶て見えり例祭 本社ハ二月初午日三月中旬日四月上旬日十一月
十日十二月 節分日 神主 安井 境内に楓樹多くありて秋霜と降

時ハ紅い二月の花と欺き觀賞のありあは雅俗遊人の
履歴日小縁あり古社の奇觀實に府下の第一あり

龍洞山大泉寺 稻荷社の南にあり曹洞宗管所 本尊 坐冠の釈迦
洞仙寺末貞享三年の建立 法大師 觀音堂 正觀音あり洞仙寺に本尊
の作 愛智一郡の落寺併し 愛染明王 享保
の寄附ありたり四 尺余に本像あり

瑞雲山洞仙寺 古渡の南に中市場筋東側にあり曹洞宗勢田の
本尊 法持寺末あり玉泉寺といひしと寛文七年改号す
千手觀音真心傍の作あり源頼信より右大將頼朝にまが
代崇敬ありし本像あり又桃巖梅あり紅白あり

古渡稻荷社
 小栗街道
 犬見堂
 古渡橋
 闇森八幡宮



河村時秀

りんごの山代
 おおみち



川

闇森

小栗街道

闇森

為のり當所此城主織田備後守信秀信秀
付しついで此寺の境内ハ山城造営の時加賀家此普清坊より有し
と傳に彼國老横山山城守ホより姓
返り書翰多く此寺に傳へり

南方鐫名古屋けぬき 足利義教足利公富士御覽の時契田の圓

福寺に止宿在りし古渡の鍛冶鐫けぬきと云ふり
けぬきけぬき何と云ふり家号も云ふり
白華隨筆に

志志 周田挺之が暢園詠物詩の古渡の句に人
姓南方能津御村名古渡自横舟と伝れり

狂哥真寸鏡 戸人戸人のんれさけぬきも方くはる今ハかゝる 木端

闇森八幡宮古渡 古渡橋多の北側に在り 祭神 應神天皇神功皇
后也也 鎮西八郎馬朝の灵と合祭す

十八年鶴見道親以下六人の僧俗カとりて重修す元
禄の比右黑某の母 子のむすを極すきれ年を經て月さ
らぬくくられ表しふいざ今も古木表いとて白昼

ととるき神祠あり 未社 春日社 稻荷社
神明社 辨天社 例祭 二月初午鳥祭
十一月初辰

古渡橋 闇森の西坂川に渡りし橋古きに云ふ
古渡の舊橋ハ邑にハあり
て近きにまた大神堂と稻荷の間に溝に古き橋板の横つてり

菅津のくく通ふ道と今も小栗街通と云ふて法園にも小栗街通と云
ふ必古道の通称なり是ハ邑多井 雅経卿に道
うきもあかき

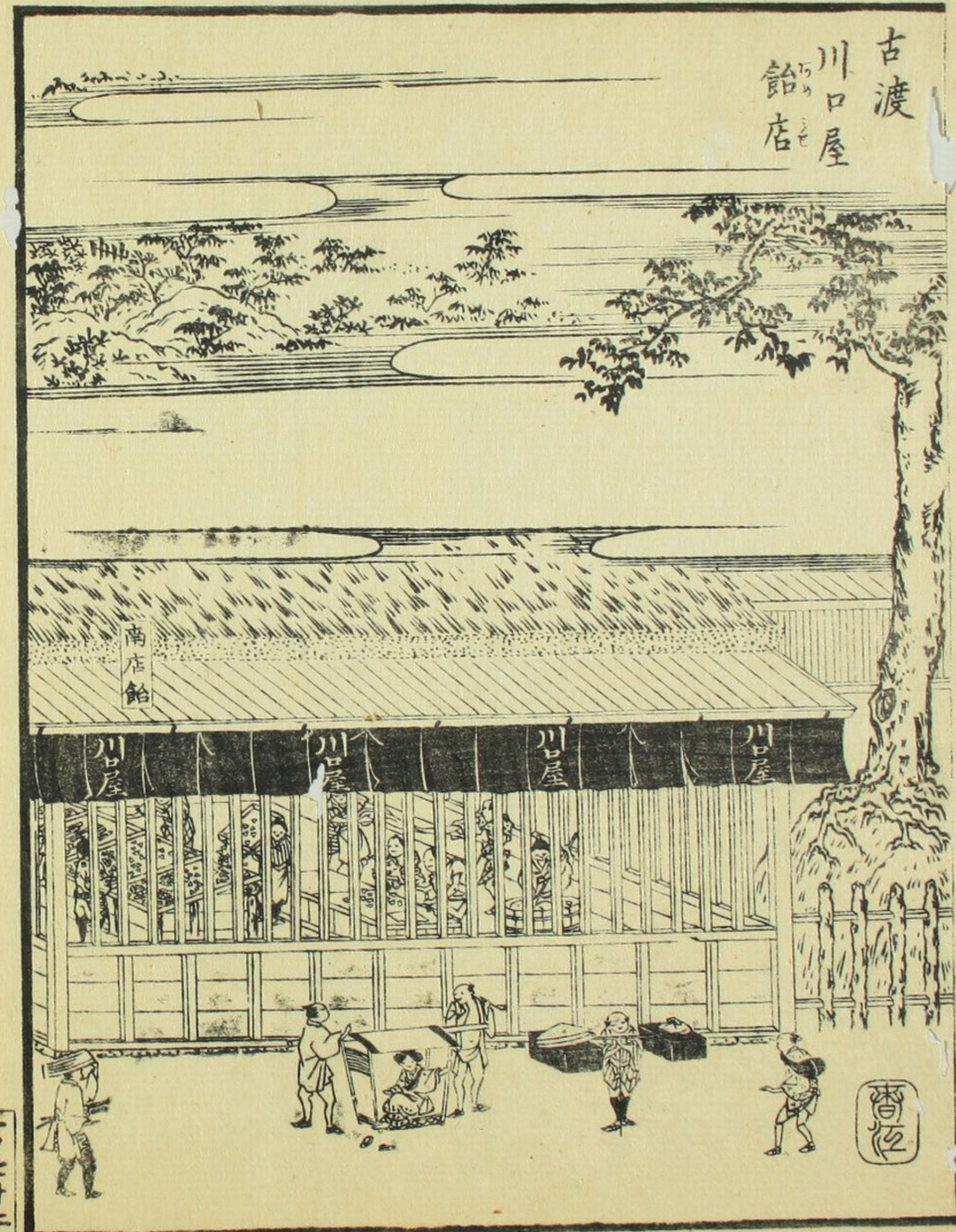
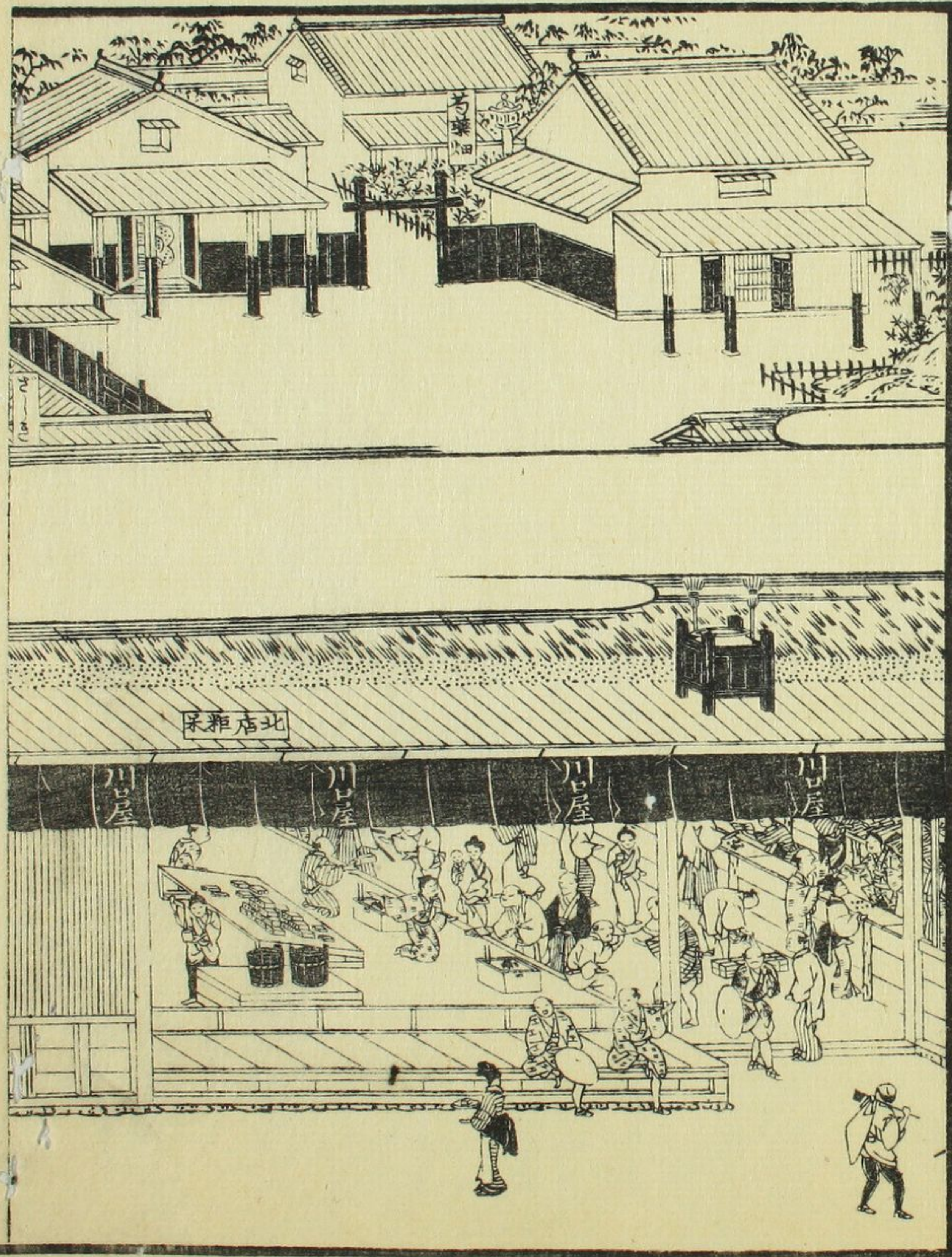
柳森 古渡新町の左側にあり 本社白山媛命 左右二社ハ伊弉諾尊大己貴
命仁和三年の鎮座也 契田の祭事にハ森比林と云ふ旧例あり
一名名つけしは古渡に鶴の表盗人の表
直會表

國豊山元興寺 尾頭橋筋北側にあり 淨土宗京都智恩院末代昔
道場法師尾頭が創基あり 本郷元興寺の末寺なり

中世衰廢あり 牛立村へつゝ東門徒尾頭山願興寺と云ふ
本
び流より本願堂の跡あり 享保三年再興し 旧号に復す
尊 某師佛身体破壞し 淨首の跡も 古佛なり 又名
に古瓦と稱せらるり

道場法師 古渡の出生して 南都元興寺の僧とて 其傳日本靈異記
本朝文粹水鏡にのせり 三書に其文甚長くして
むにのく且異記古雅なり 文義を解し けさ今其要と
る結して 是と云ふす 敏達天皇の御宇 尾張國菟野郡 淨徳里の

農夫田に水をしきけるに雷うて 前に居ける其形 小き子也
農夫すしきけるに雷うて 前に居ける其形 小き子也
と入る竹の葉を浮し 其報に 是れ男子と云ふ 且 梶の舟に水
を入る竹の葉を浮し 其報に 是れ男子と云ふ 且 梶の舟に水
を入る竹の葉を浮し 其報に 是れ男子と云ふ 且 梶の舟に水
を入る竹の葉を浮し 其報に 是れ男子と云ふ 且 梶の舟に水
を入る竹の葉を浮し 其報に 是れ男子と云ふ 且 梶の舟に水
を入る竹の葉を浮し 其報に 是れ男子と云ふ 且 梶の舟に水



夜に鬼の聲を聞きて夜待接して妻子鬼と闘ひて其聲を聞きてつゝみたりと云ふ
たゞ鬼の聲を聞きて髪とぬれたりと云ふやがまぬ夜明けに血を流してつゝみたりと云ふ
後其怪ありと云ふ其聲ハ元貞寺の宝物に収むる童子成長して寺に在
りて寺田に水をくるとして他の農夫を導いて水入させたりと云ふ
余人一々おろべき物此すといふとつゝつて水口にまゝに人々くぬき捨て
て水と寺田に引けり人々おち恐みてまけりハきゆりけ次々に
かゝて彼寺にて別髪一ノ道
場法師と名まかりけり

鎮西八郎為朝塚

尾頭橋の東にあり為朝の位也一ノ道に傳へ
嫡子義實尾張國知多郡に隠居し其孫市部太郎義季あり其
庄に居候すされハ其祖の墓を築きあり又牛立村に貞寺に傳文に
為朝の子尾次郎義次ありに傳せり一ノ道に傳へり亦定りハ其
に四男一女ありと云ふ義次と名のり人々一ノ道に傳へり
傳説にもつて強く是非と論せり

尾張名所圖會卷之一

